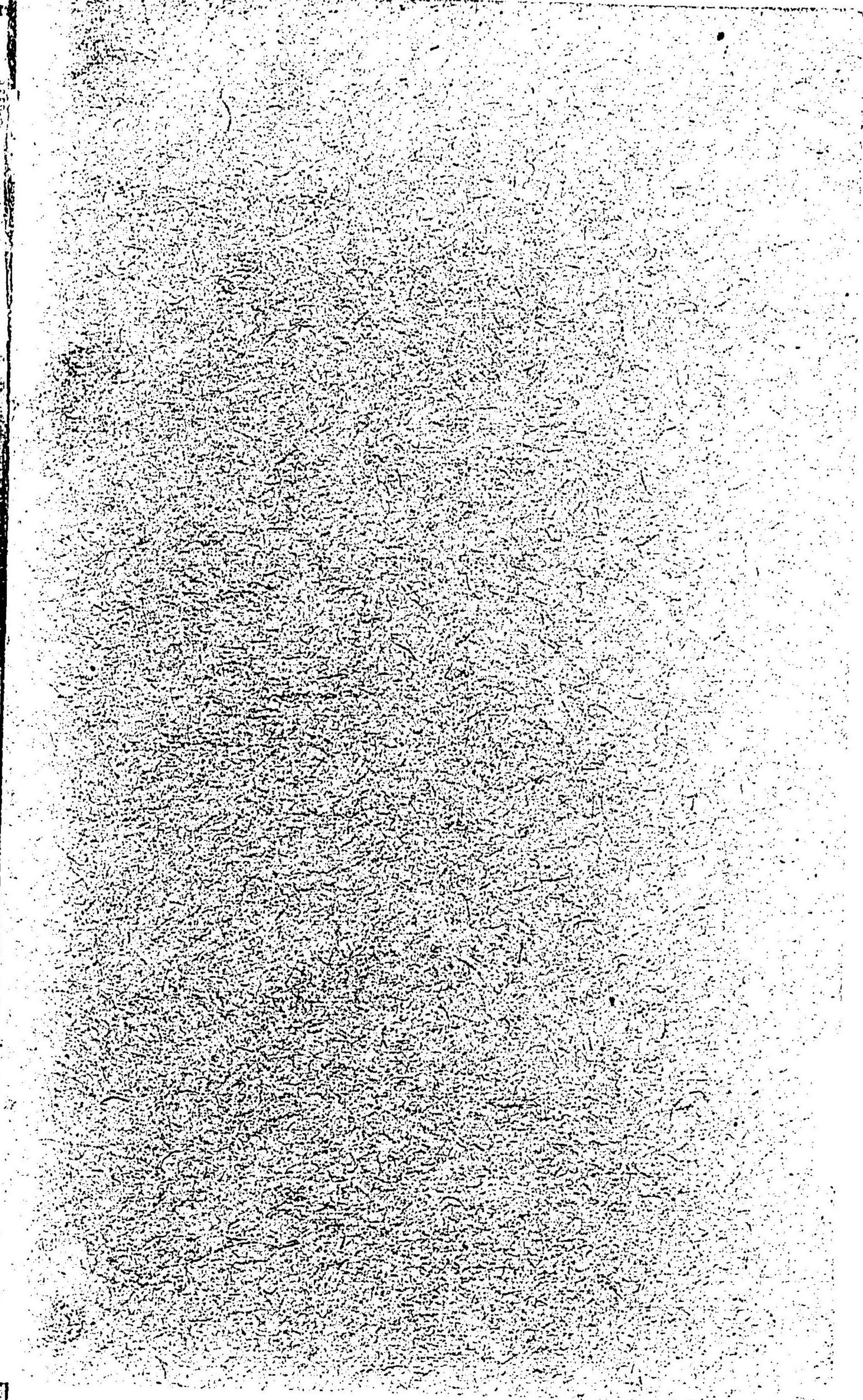


17  
455

松山  
案内

阿波  
三津  
郡



○南北棧橋共ニ伊豫鐵道高濱停車場ニ接近シ御昇降共人力車ヲ要シ不申候

# 伊豫國高濱港

橋 棧 北	所合待御客船	橋 棧 南
大阪門司線 宇品高濱線 ノ各船ハ北 棧橋ニ繫留	南北兩棧橋 共ニ待合所 ノ設備アリ 休憩御隨意 手荷物無料 運搬可仕候	大阪宿毛線 大阪内海線 ノ各船ハ南 棧橋ニ繫留

●大阪行

前八時發 丁日  
前九時發 毎日  
後八時發 毎日

●門司行

前四時發 半日

●宿毛行

前八時半發 毎日

●内海行

後二時半發 毎日

●宇品行

前八時發 三毎日  
後一時五十分發  
後六時五十分發

▲汽船

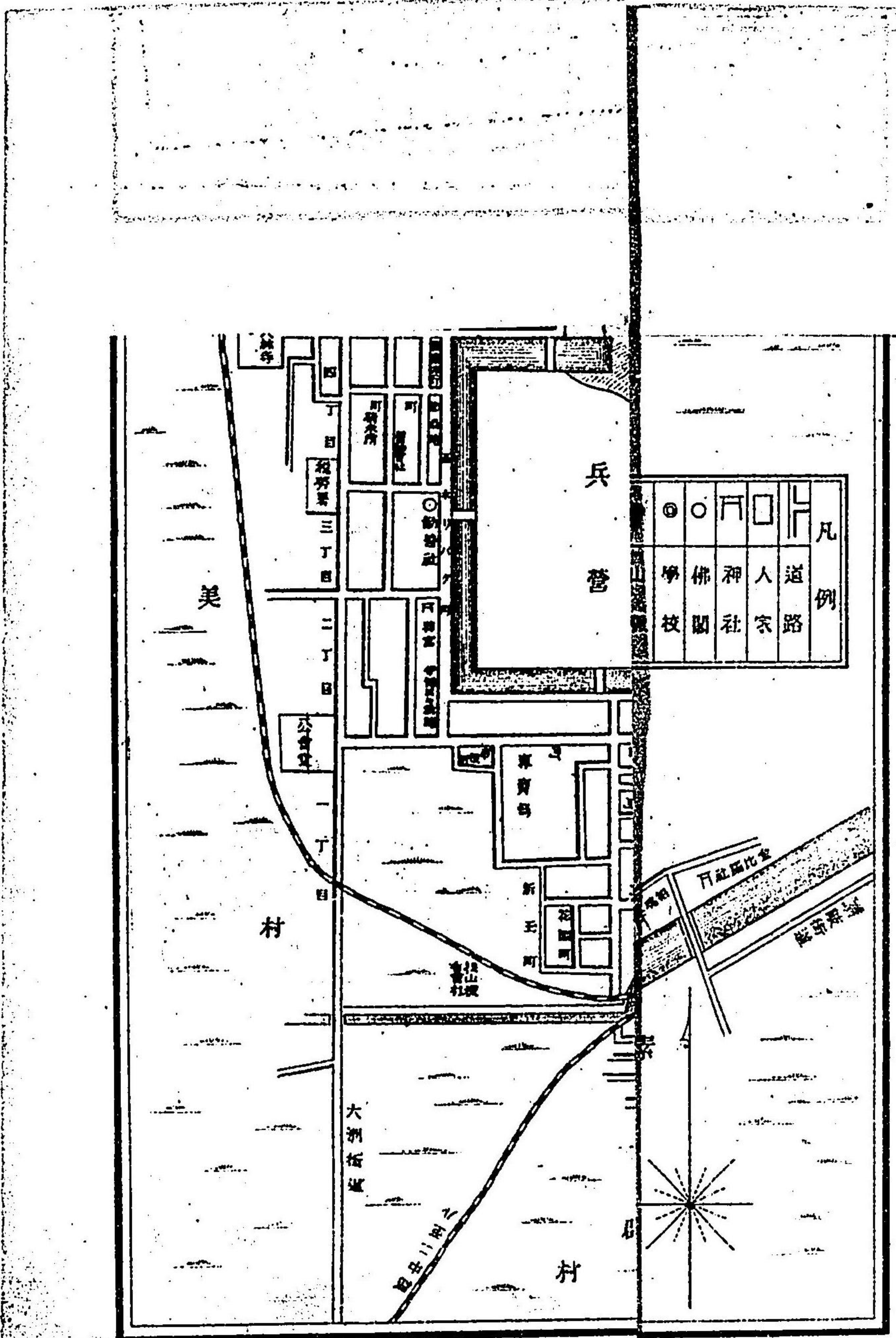
各港發著時刻表ハ本  
案内記ノ卷末ニ在リ



▲運賃

記及運數ハ本案内  
記卷末ニ在リ

大阪商船株式會社高濱出張所

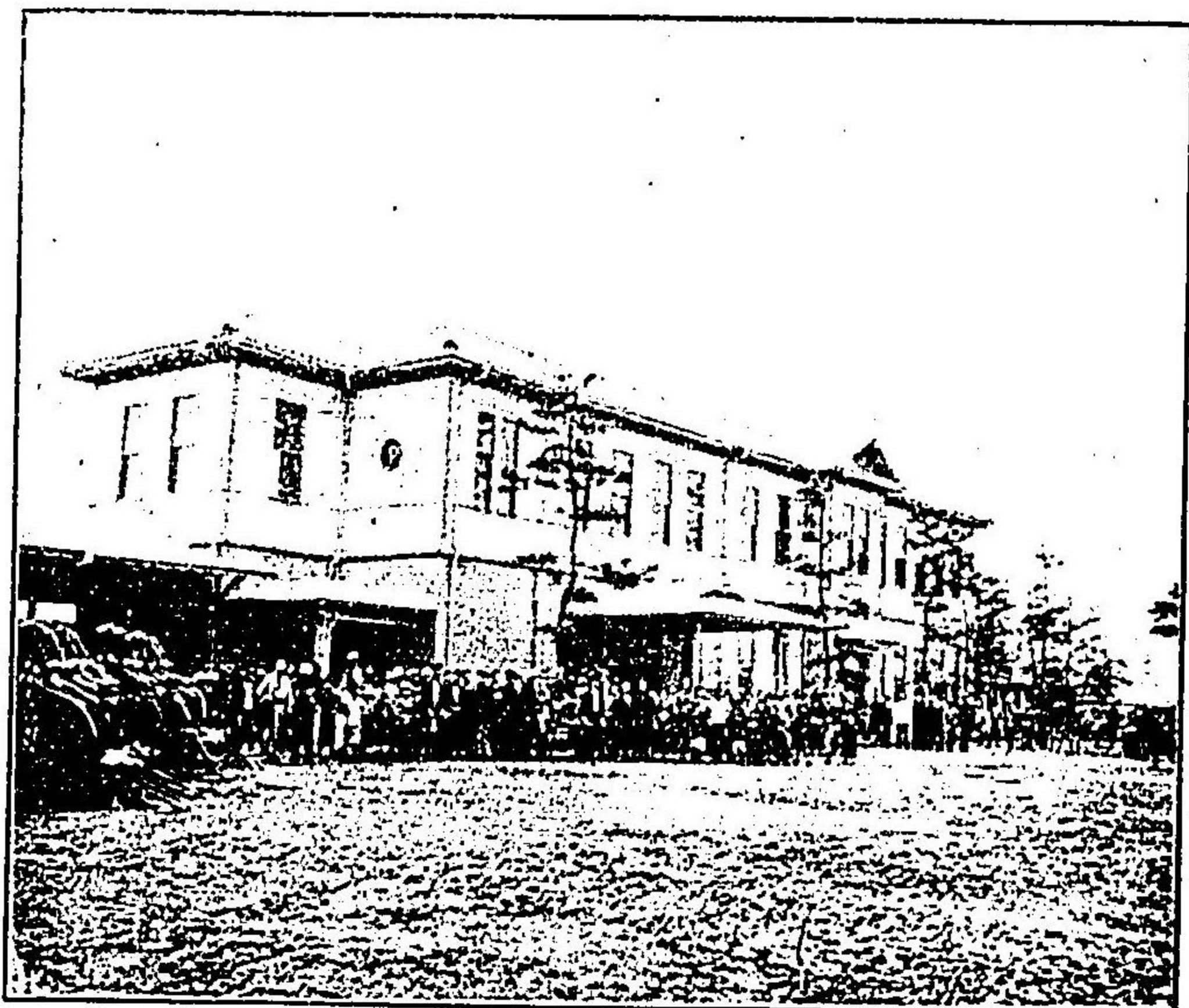




117-455



伊豫鐵道線路圖

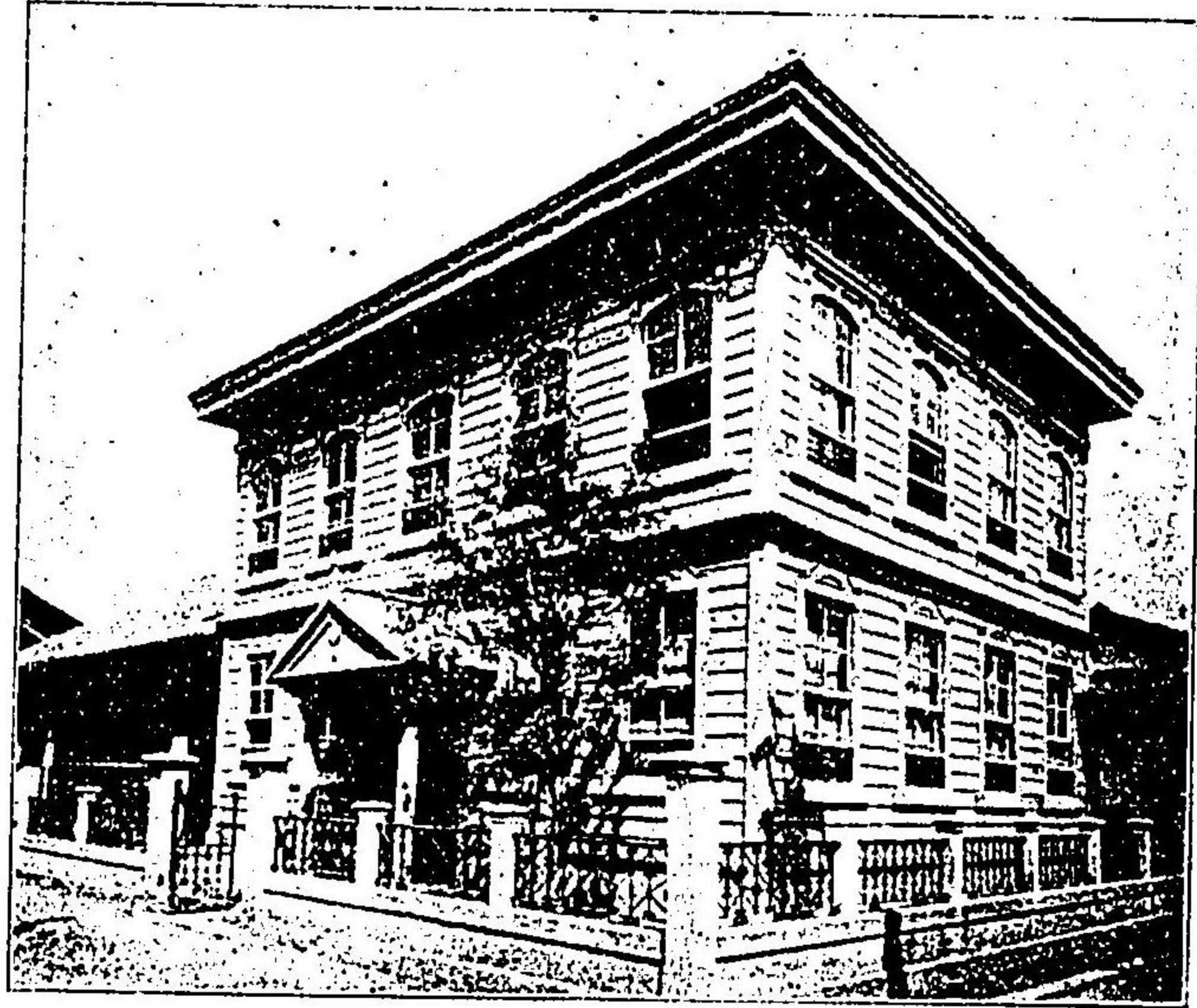


明治廿一年開業  
營業線路廿七哩

資本金百貳拾萬圓

伊豫鐵道株式會社

電話二〇七番



- 一 伊豫織物改良同業組合員の製織せる伊豫  
緋の染色は純良正藍染にして善く洗濯に  
耐へ日光酸類に對しては最堅牢なり地質  
は緻密にして柄模様は最新優美なり特に  
價格低廉にして社會中流以下の需要に適  
し就中男女學生の被服としては最適當な  
り
- 一 産額組合員の製造に係る伊豫緋の産額は  
一ヶ年約參百萬反に及ぶ
- 一 檢証 組合員の製品は毎反組合事務所の  
檢査證印あり
- 一 伊豫緋の特色  
價格低廉にして實用に適す  
染色正藍にして極めて堅牢なり  
柄模様最新にして高尚優美なり  
地質緻密にして丈幅は完全なり
- 一 伊豫緋は全国各地太物商吳服店に於て販  
賣せり

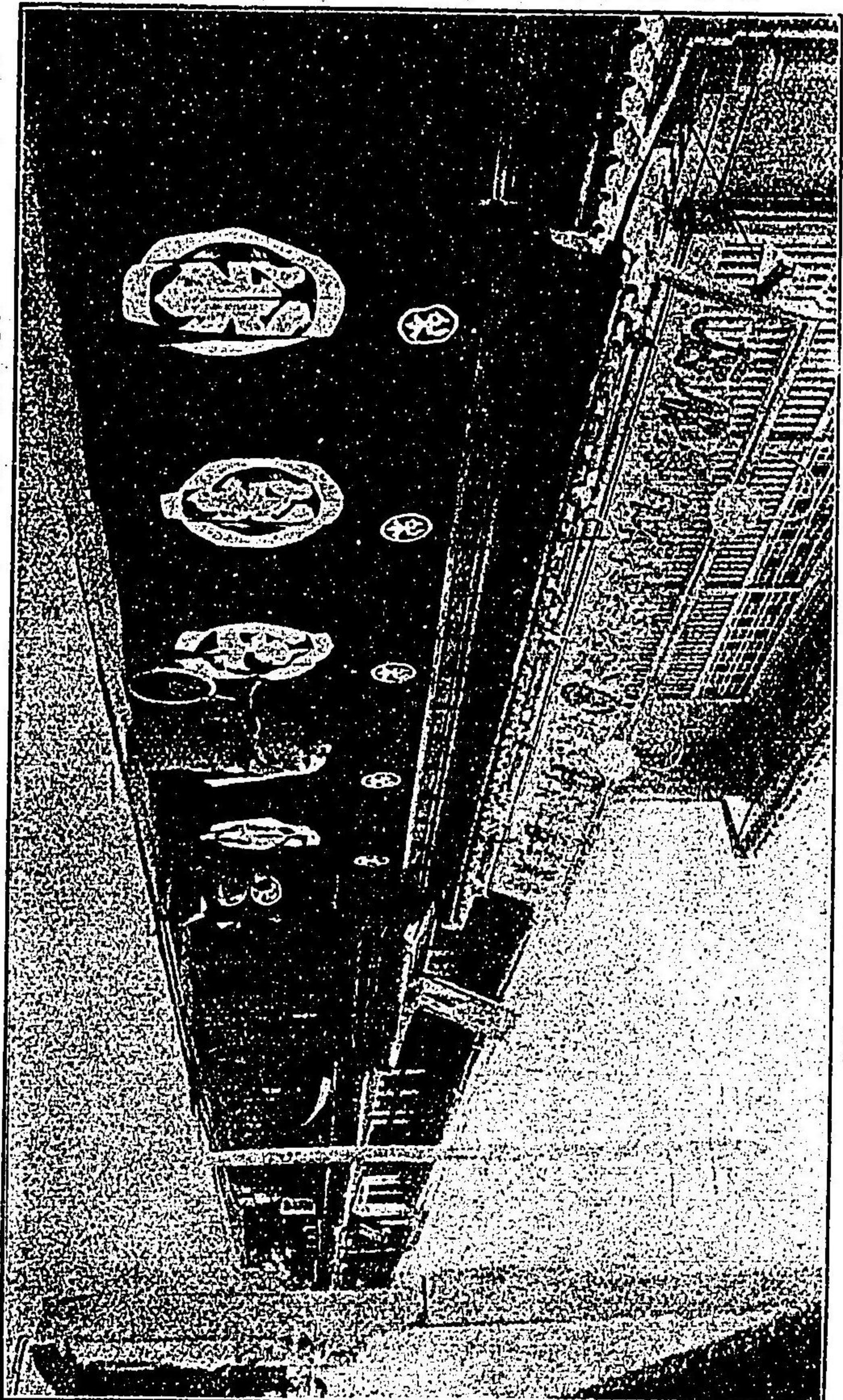
松山市紙屋町

伊豫織物改良同業組合

電話貳四八番

伊  
伊豫米澤  
製織物改良同業組合  
松山市紙屋町(電話貳四八番)

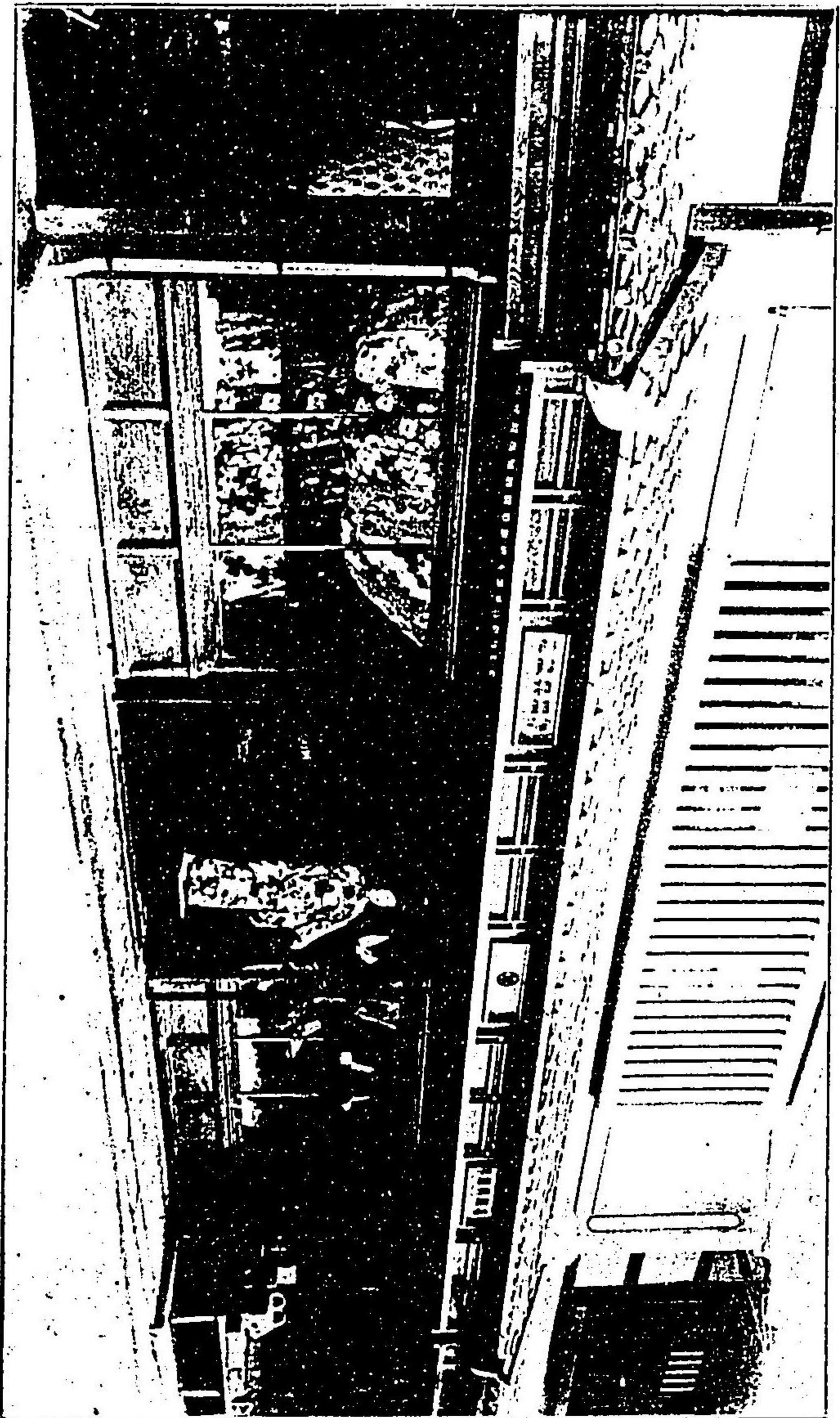
目丁四町湊市山松



電話 百三十六番

振替貯金口座三二〇三番

舖店服吳周米 社會名合



場列陳店服吳周米



# 伊豫絣卸商

松山市前町五丁目

## 松山織物株式会社

電話五百零五番

第九回關西聯合共進會一等賞金牌

伊豫絣 製造  
愛媛絣 販賣

松山市豊坂町一丁目

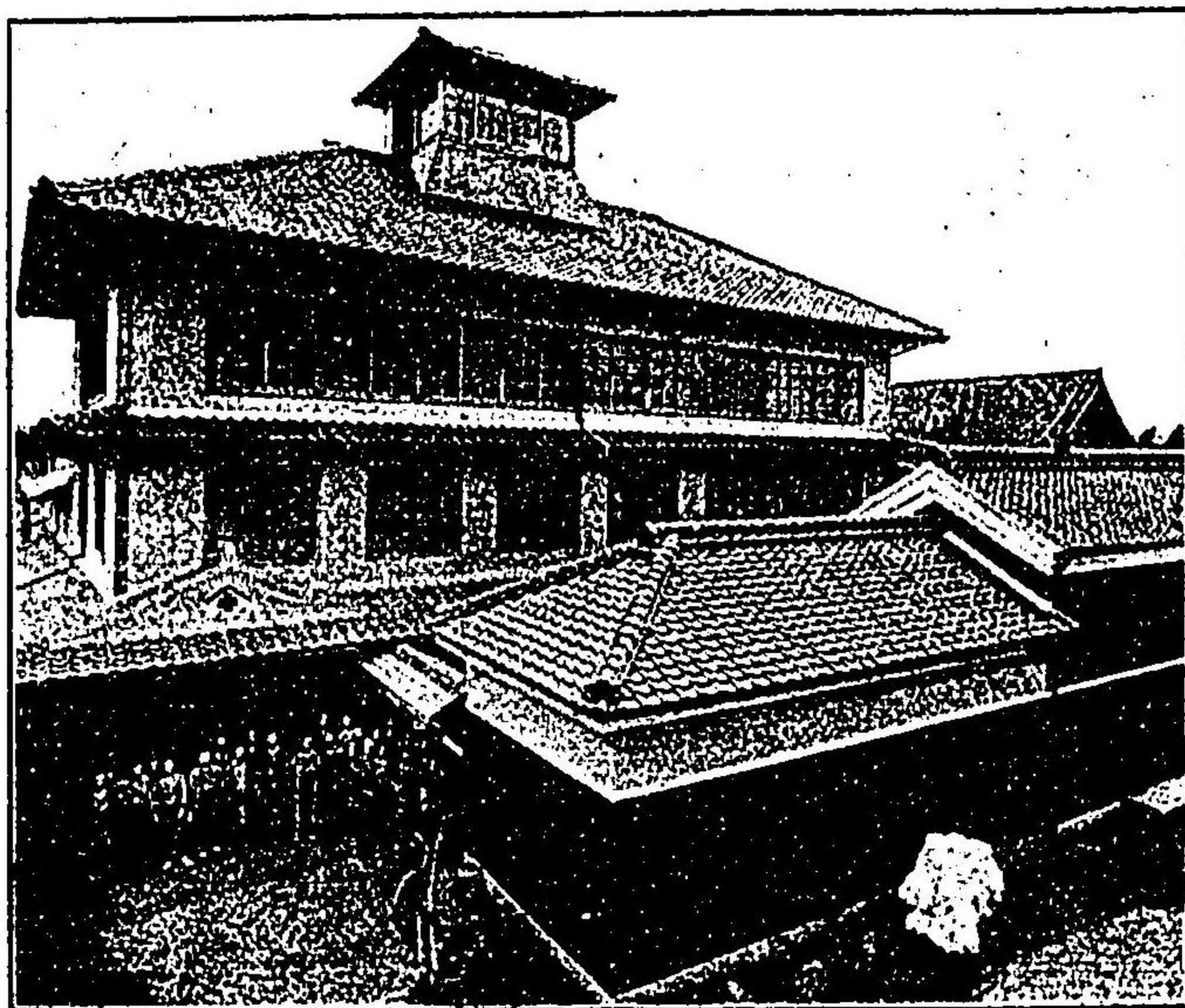
田内機織所

電話五四番

同市本町一丁目

田内機織所  
販賣店

電話一五〇番



◎織製棉木生◎

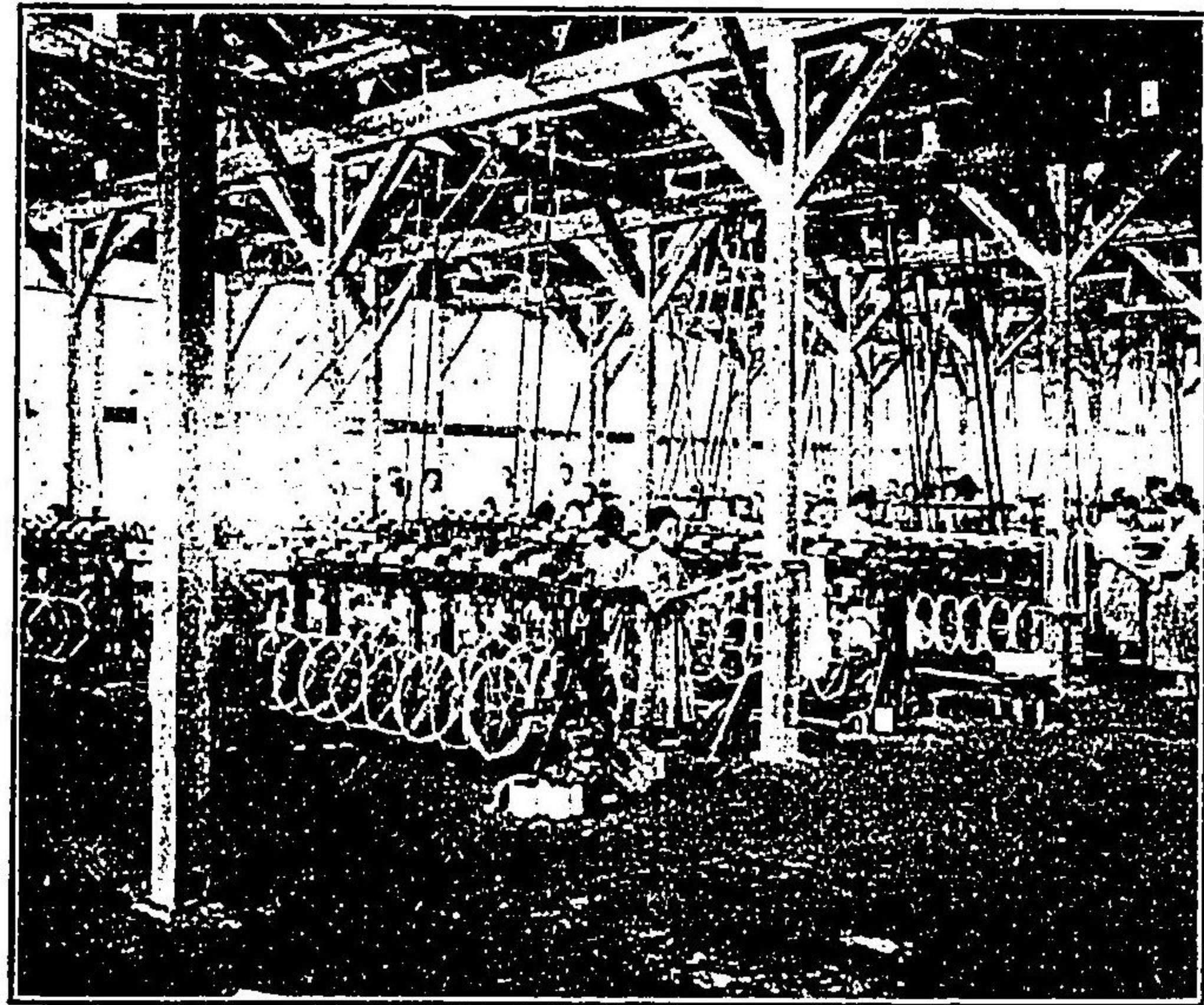
明治四十年九月一日創立  
資本金拾萬圓  
電力應用 松山市南江戸拾四番戸

  
伊豫電力織布株式會社

機械特製

電話二一七番  
電器器號イフ

品質の精良にして風合の良好なるは本社製品の特徴なり上等裏地類無地紺染め等として頗る高尚優美なり



工場内操業之狀態

各博覽會  
共進會  
名譽賞受領

伊豫かすの卸商

商標



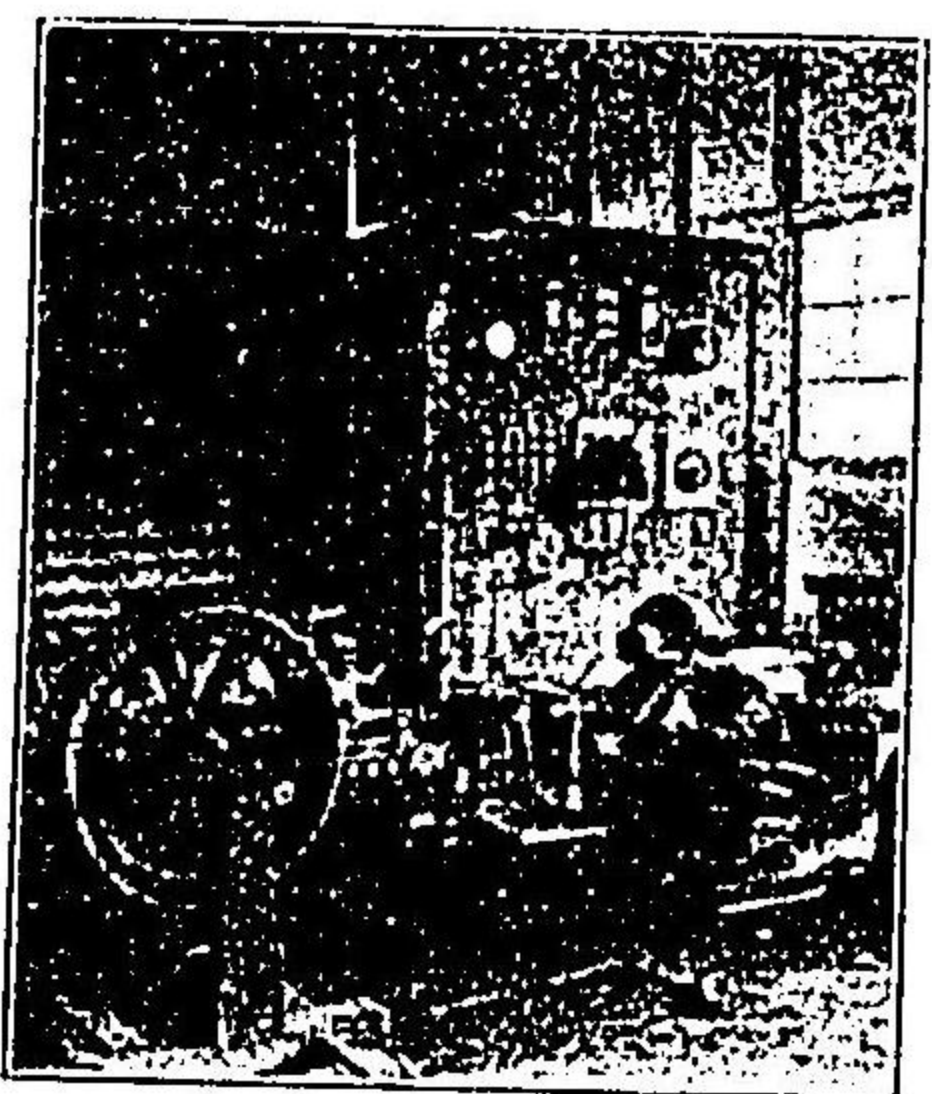
松山市本町二丁目  
林吉次郎商店

電話 三十六番  
振替口座 六四三三番

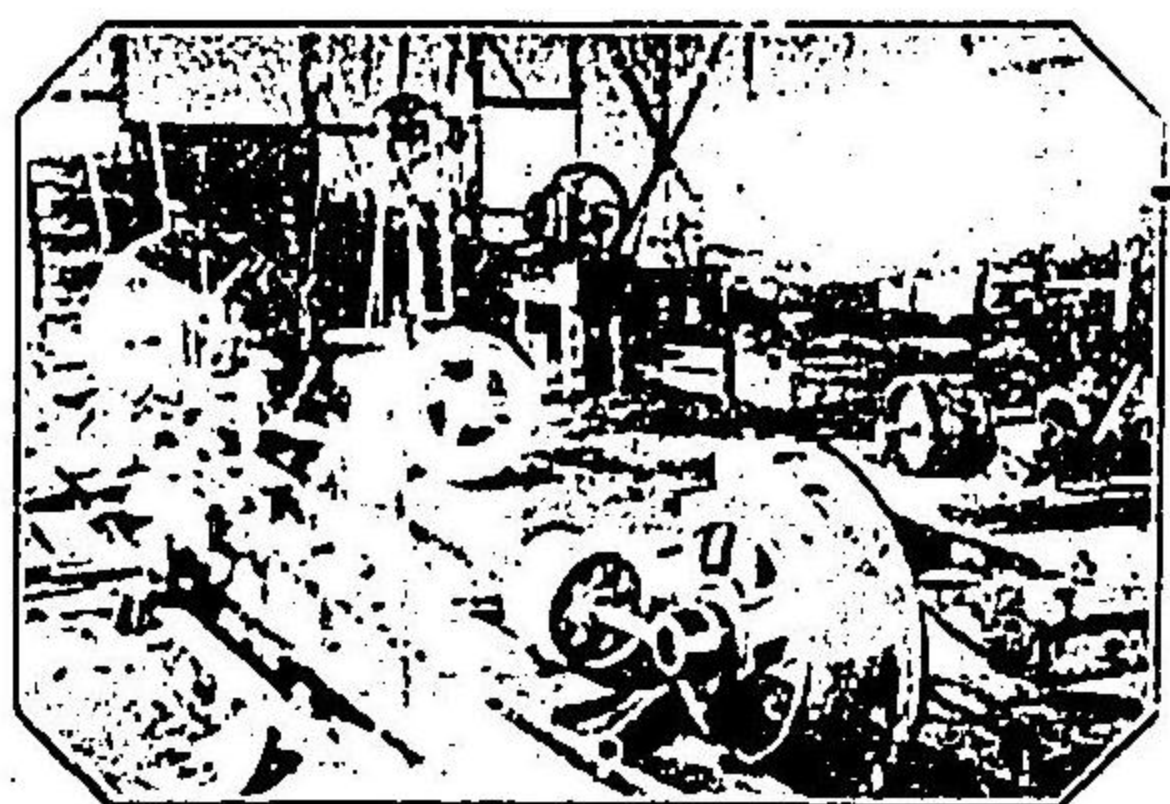




才賀電機商會松山支店



才賀電機工場鐵工部



才賀電機工場機部

才賀電機商會  松山支店

電話二四番

電氣諸機械輸入及製造販賣  
 設計、監督、受負

—\*—\*—\*—\*—\*—\*—

本店 大阪市東區伏見町三丁目  
 (電話東一五九)

支店 京都市  
 (電話八六八)

支店 松山市  
 (電話二四)

工場 同所

出張所 新瀨市  
 (電話一四〇)

同 清國營口  
 (電話一五八)

同 同安東縣  
 (電話一五八)

同 和歌山縣海草郡雜賀村  
 (電話一五八)

同 伊勢松阪町

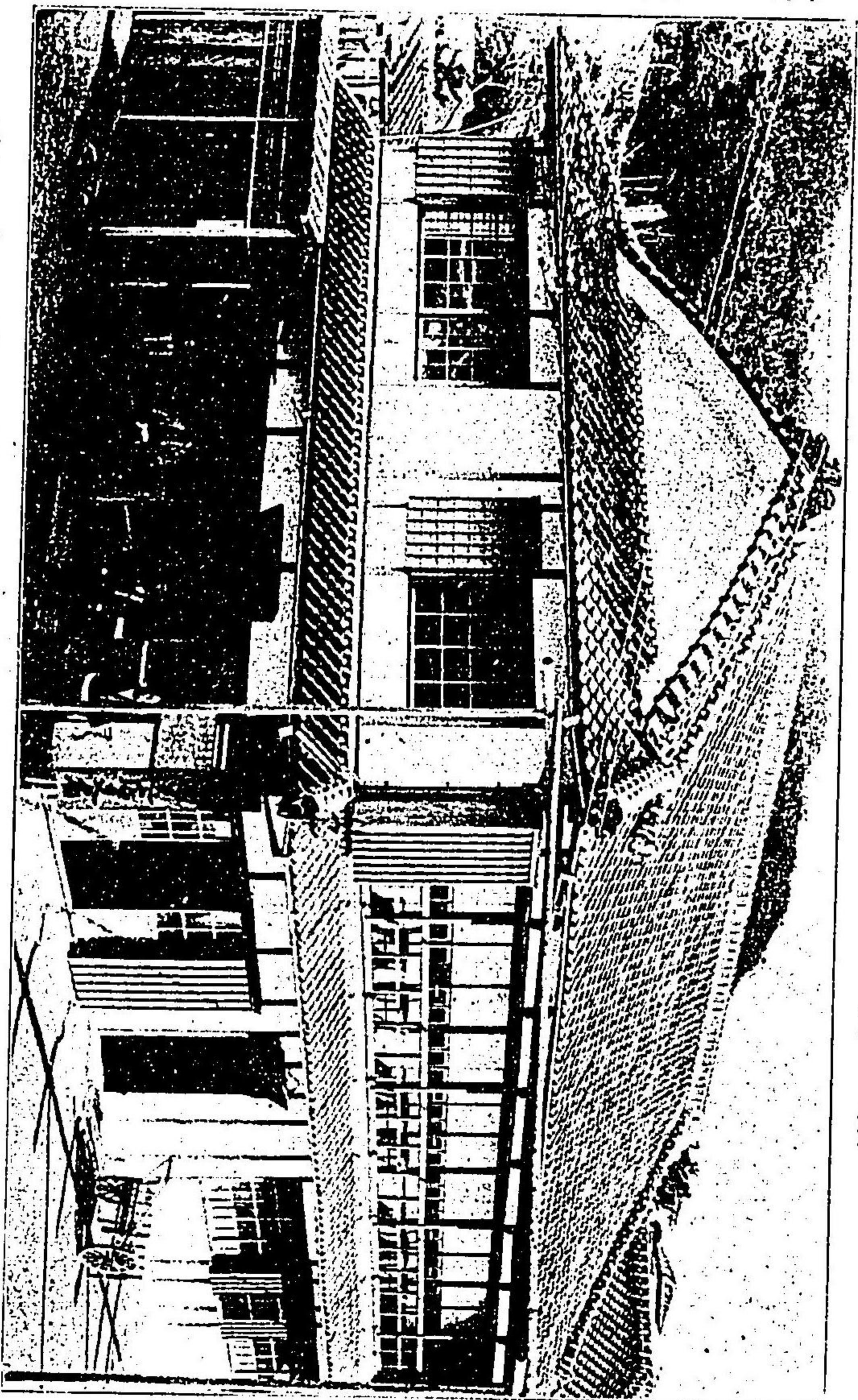
同 豐後大分町

同 北海道岩内町 (電話 三九)

同 兵庫縣明石町

同 愛媛縣久萬山

和洋御料理小富士亭

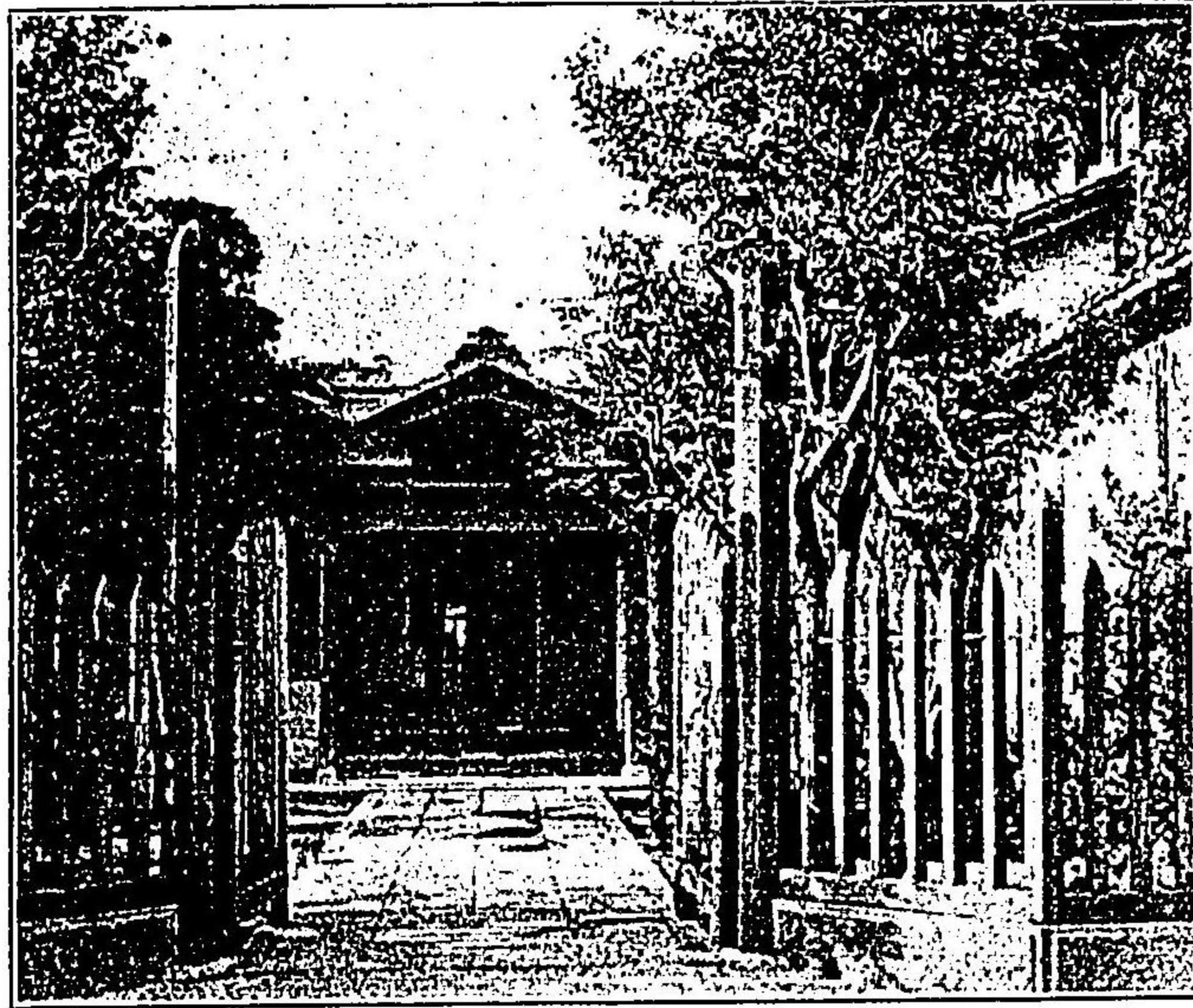


久保田保田旅館

(松山出張所電話百十番) 高濱(特設電話)

久保田回漕部高濱本店 三津支店

發電畧號  
キト



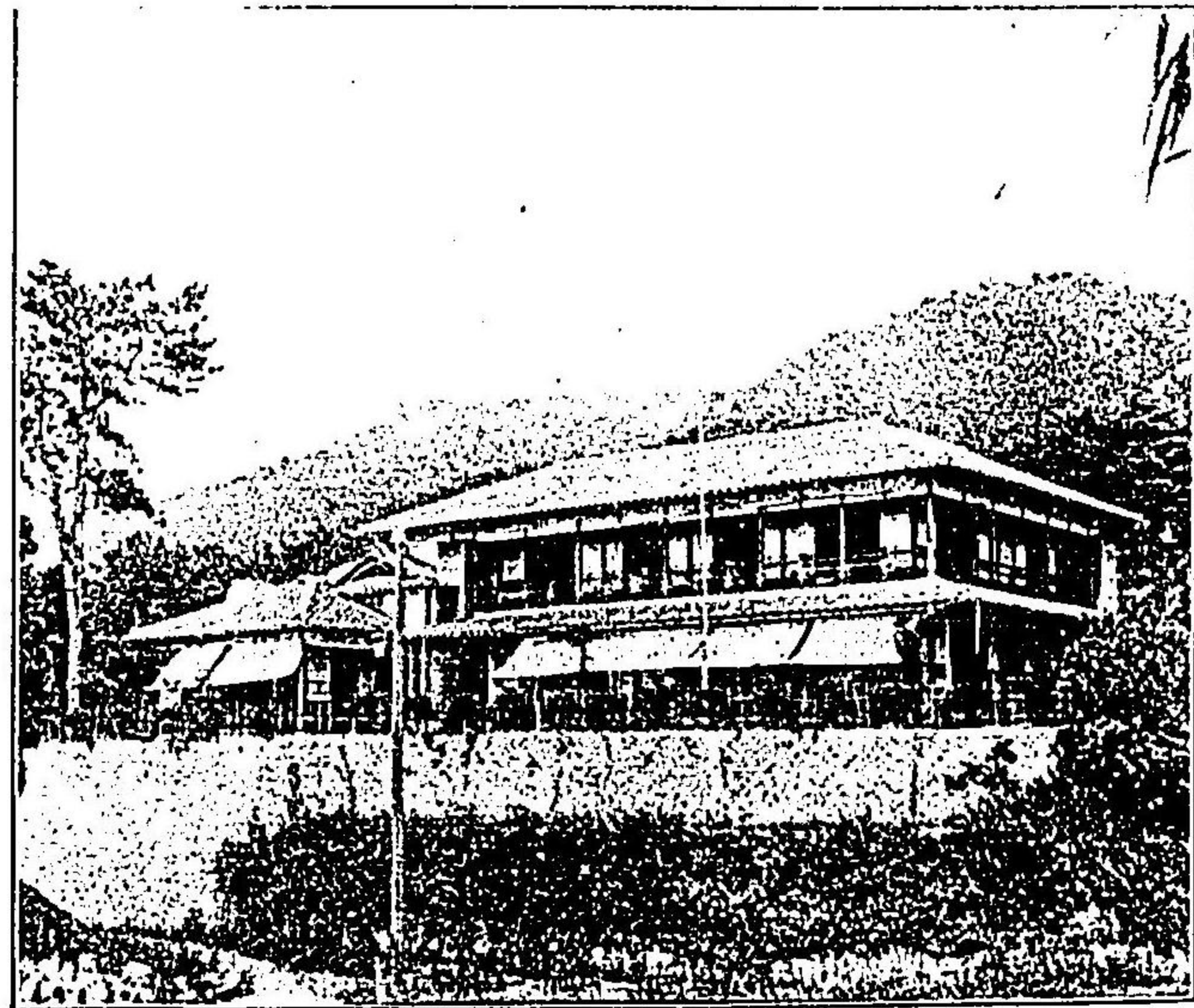
館旅やどき山松

電話  
六十七番

和洋御料理

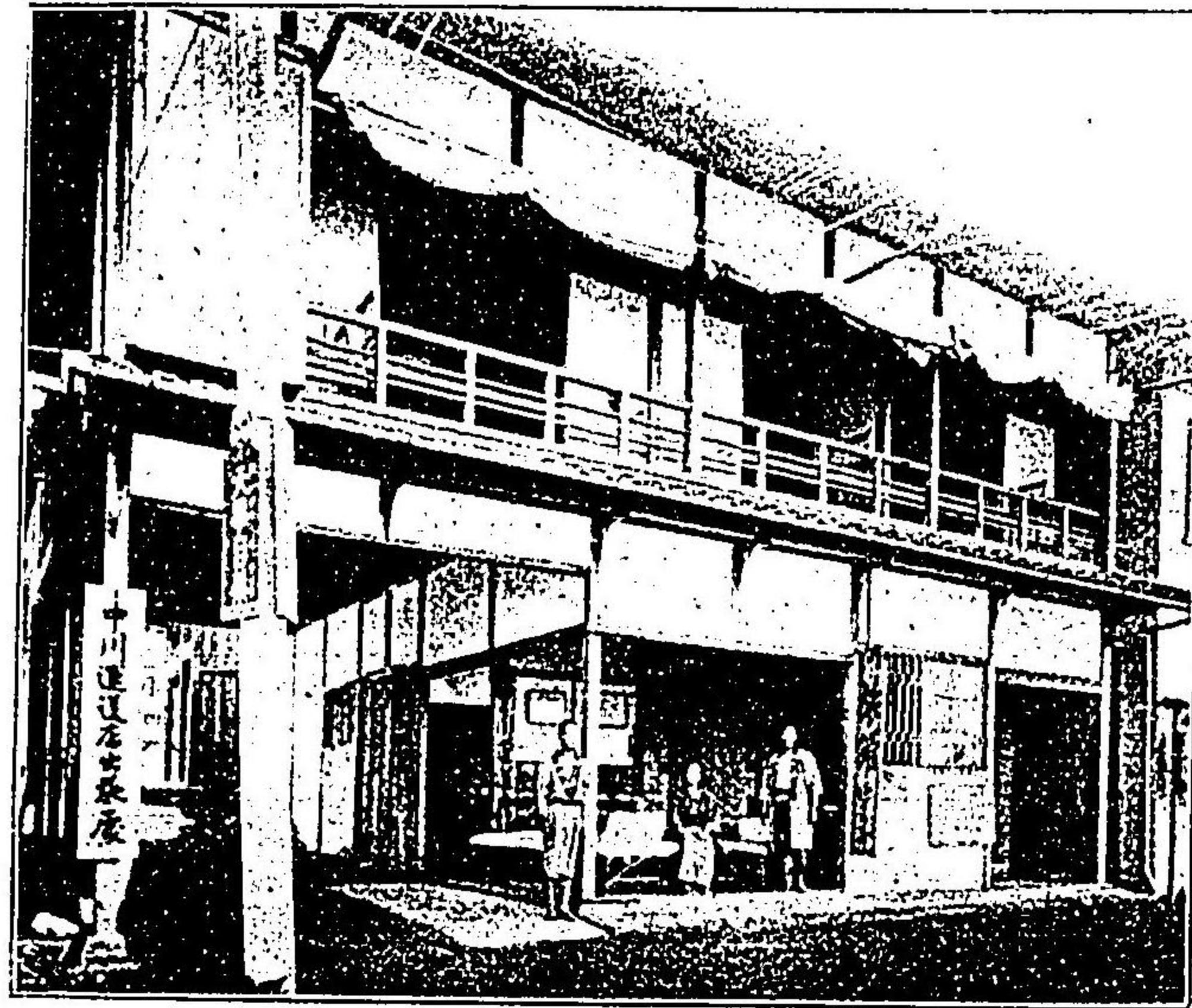


館旅(玉らあ)川中港濱高



館別やどき濱高

三津濱に回漕部出張所あり



店漕回玉らあ港濱高

(1)

次

目

松山案内目次

松山市街全圖

松山城

松山市役所

愛媛縣廳

道後温泉

道後公園

愛媛縣立師範學校

松山中學校

高濱港

興居島

三津港

三津魚市

郡中彩濱館

重信川出合

森松鐵橋

序 說

河内白猪澤

石手寺

十六日櫻

湧ヶ淵

久萬山御三戸

海 路

大阪宿毛線

大阪内海線

大阪門司線

高濱宇品線

三津尾の道線

柳井線

陸 路

大洲宇和島街道

土佐街道

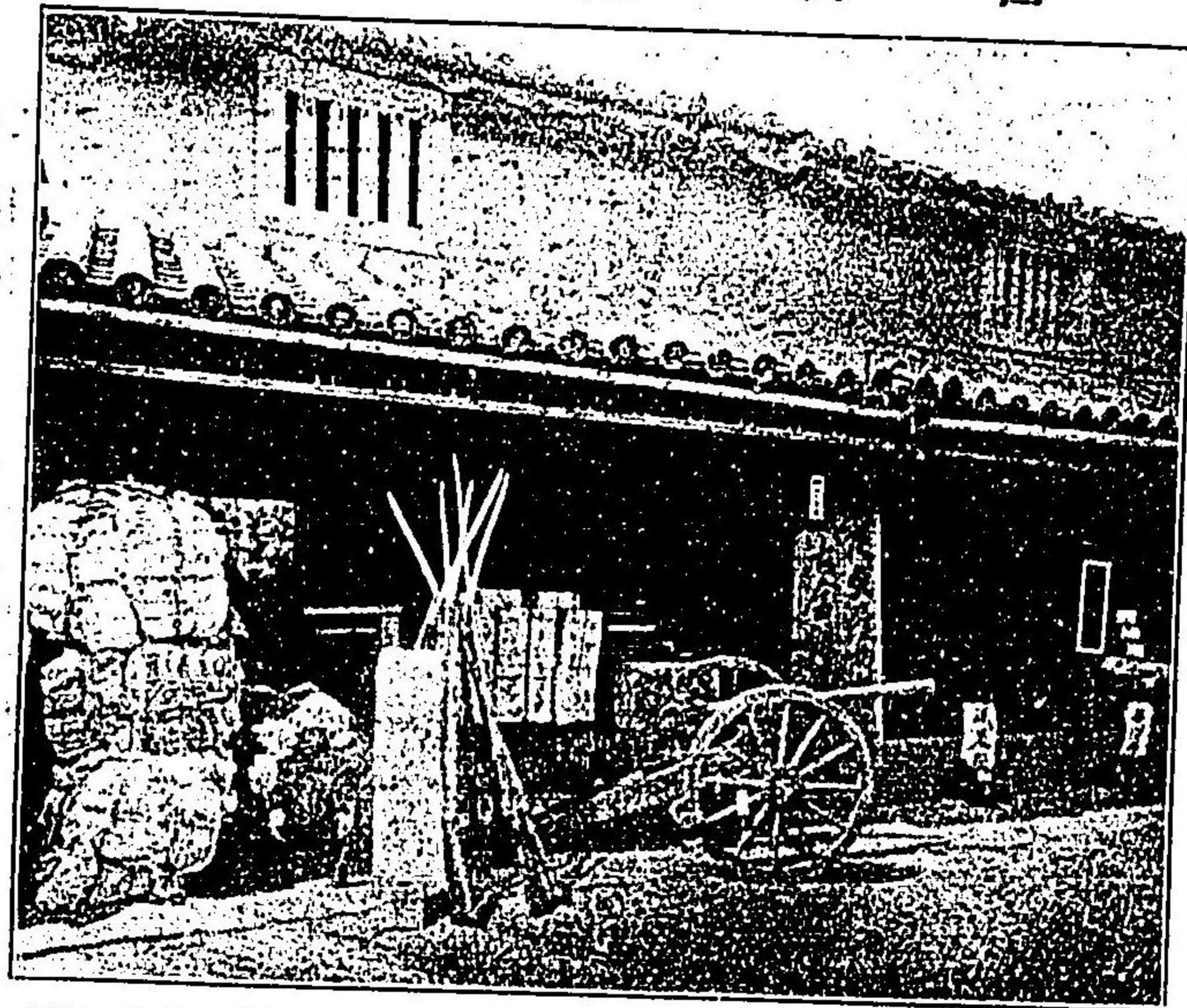
讃岐街道

八

42 5 18

内交

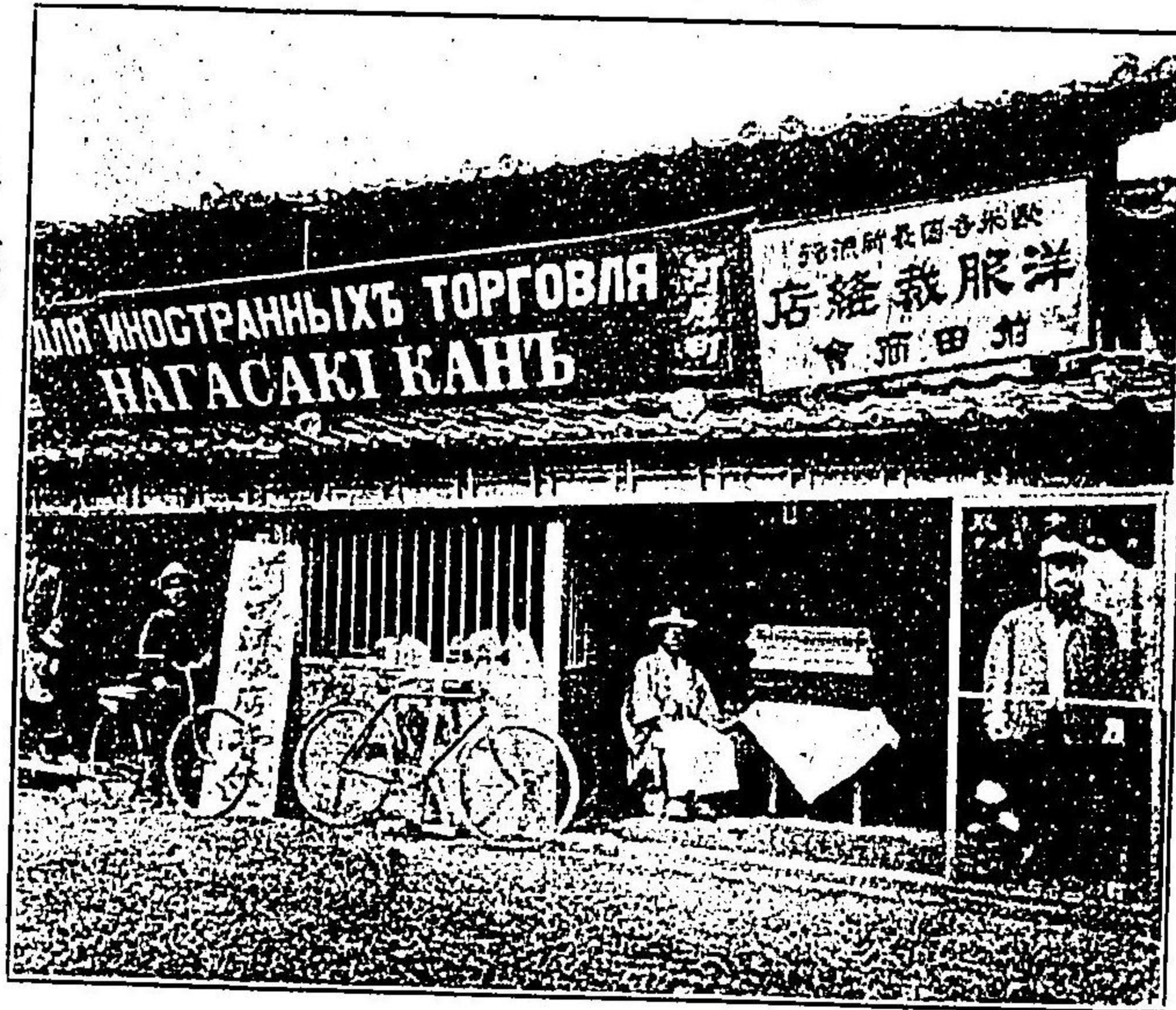
古物屑物商



諸官衙拂下品改造卸賣

紡績落綿糸屑ウエス商

松山市唐人町前田竹治郎  
(電話六百番)



足袋製造卸賣店

高等洋服調進處

松山市河原町前田商會

(3)

次

目

市の財政	三〇
市の教育	三三
官衙會社	三四
神社寺院	三五
松山附近名所	三七
石手山	
山越	
十六日櫻	
星ヶ岡	
松山附近の名邑	四一
道後	四一
温泉	
温泉碑	
旅館	
物産	
道後公園	

道後附近の名所	四八
伊佐爾波神社	
鷺谷寺	
鴉溪	
義安寺	
岩堰	
河ヶ淵	
高濱	五〇
梅津寺濱	
興居島	
長師の濱	
大山寺	
三津濱	五三
官衙公署會社	
朝市	
烈女松江の墓	
郡中	五四
彩濱館	

内 案 山 松

(2)

今治街道	
里程	
松山市	一一
市政沿革	
松山城	
市街	
外側	一四
港町	
小唐人町	
三番町	
二番町及一番町	
河原町	
南堀端	
古町	一六
登町	
木屋町	
西堀端	

木町	
紙尾町	
魚町	
松前町	
松山市の設備	一九
旅館	
料理屋	
勸商場	
劇場	
水力電氣	
市の交通機關	二一
伊豫鐵道	
電信電話	
市の産業	二三
伊豫耕	
伊豫耕の沿革	
勸業協會	

源範賴墓 ..... 五五

後藤又兵衛基次之墓 ..... 五五

伊豫鐵道線 ..... 五五

高濱驛 ..... 五五

三津驛 ..... 五五

古町驛 ..... 五五

松山驛 ..... 五五

立花驛 ..... 五五

久米驛 ..... 五五

平井驛 ..... 五五

田窪驛 ..... 五五

横河原驛 ..... 五五

森松線 ..... 五八

石井驛 ..... 五八

森松驛 ..... 五八

郡中線 ..... 五九

余戸驛 ..... 五九

附 錄

出合驛 ..... 六一

松前驛 ..... 六一

地藏町驛 ..... 六一

郡中驛 ..... 六一

道後線 ..... 六一

木屋町驛 ..... 六一

道後驛 ..... 六一

一番町驛 ..... 六一

伊豫鐵道唱歌 ..... 六三

松山土産 ..... 六七

(一) 松山市商工人名錄目次 ..... 七〇

イノ部 ..... 七〇

印刷 ..... 七〇

石工 ..... 七〇

鋸物 ..... 七〇

糸類 ..... 七〇

ロノ部 ..... 七〇

蠟燭油製造 ..... 七〇

ハノ部 ..... 七一

履物 ..... 七一

ニノ部 ..... 七一

肉類 ..... 七一

ホノ部 ..... 七一

紡績 ..... 七一

トノ部 ..... 七一

陶器 ..... 七一

時計 ..... 七一

土木受資業 ..... 七二

チノ部 ..... 七二

茶類 ..... 七二

リノ部 ..... 七二

陸軍用途 ..... 七二

旅人宿 ..... 七二

料理店 ..... 七三

ヲノ部 ..... 七三

公ナル周旋業 ..... 七五

織物 ..... 七五

(一) 伊豫耕問屋 ..... 七五

(二) 綿耕製造 ..... 七五

(三) 綿子ール製造 ..... 七五

(四) 木綿製造 ..... 七五

ワノ部 ..... 七五

綿 ..... 七五

カノ部 ..... 七五

硝子類 ..... 七五

紙類 ..... 七五

形紙 ..... 七五

金物類 ..... 七五

眼鏡類 ..... 七五

乾物類 ..... 七五

蒲鉾製造 ..... 七五

傘製造 ..... 七五

瓦製造 ..... 七五

ヨノ部 ..... 七六

洋服 ..... 七六

タノ部 ..... 七七

薪炭 ..... 七七

(7)

次

目

古着  
物品貸付業 ..... 八三

コノ部  
呉服太物  
紺屋業  
小間物  
氷 ..... 八三

エノ部  
米穀類 ..... 八五

テノ部  
電気業 ..... 八七

アノ部  
藍  
麻裏製造  
荒物  
油揚製造  
飴製造  
サノ部  
清酒醸造  
酒類販賣 ..... 八八

砂糖  
材木  
指物  
雜貨  
キノ部  
銀行業  
金錢貸付業  
牛乳 ..... 九一

ミノ部  
味噌製造  
ミシン機械販賣 ..... 九二

シノ部  
醤油醸造  
醤油販賣  
焼酎蒸溜  
鹽  
漆器  
銃砲  
書籍  
シャツ莫大小袴物類 ..... 九二

内 案 山 松

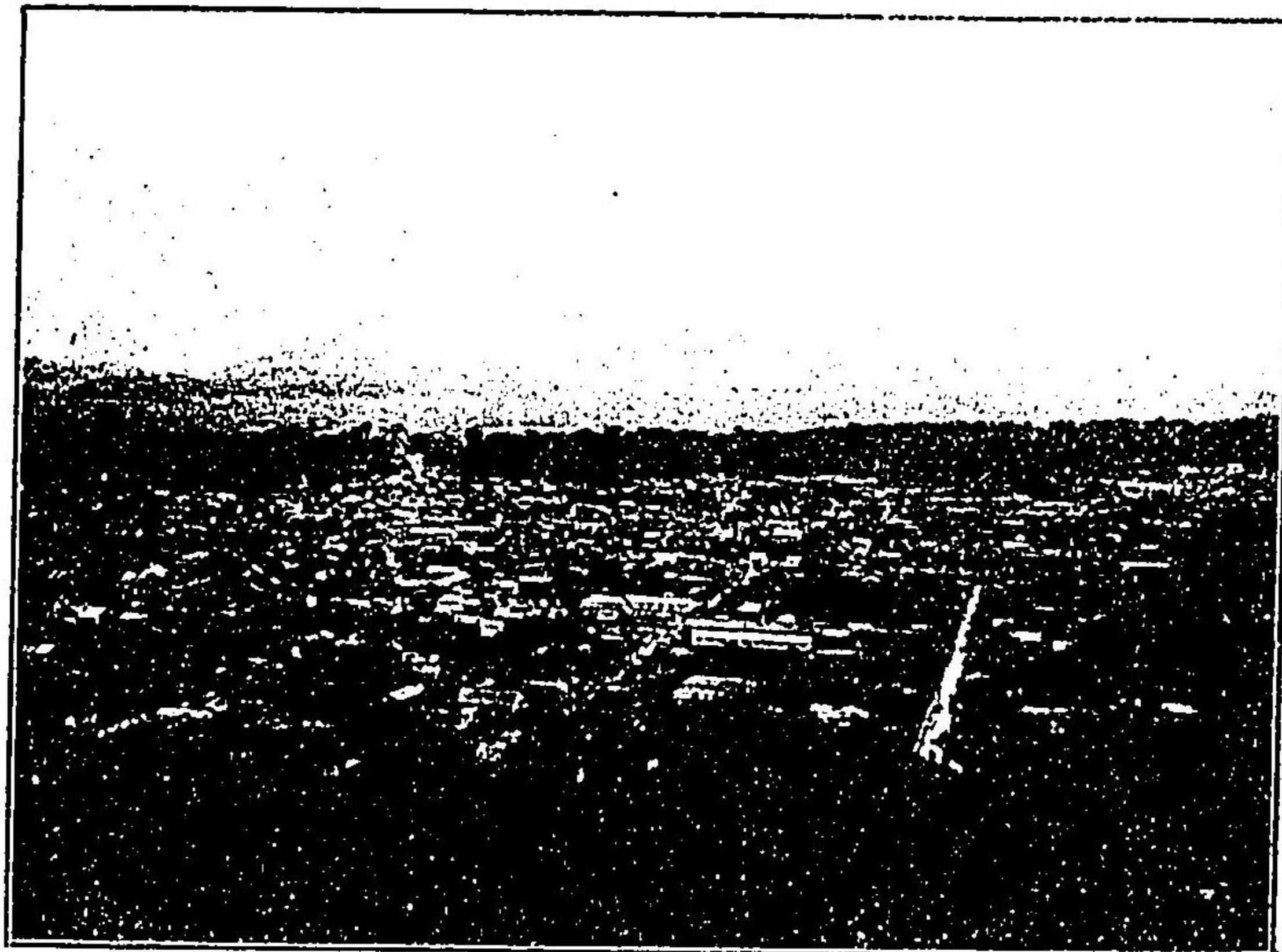
(6)

檀草  
足袋製造  
樽製造  
疊製造  
ソノ部  
染物  
葬具類  
素麵製造  
ツノ部  
漬物  
ナノ部  
仲買業  
仲買業  
仲立業  
（一）米穀仲買  
（二）公債株式仲買  
（三）緋仲買  
ラノ部  
（一）綿子ール  
（二）米穀  
ラム子製造  
ウノ部  
魚類 ..... 七九

備前蕎麥類  
植木商  
運送業  
團扇製造  
クノ部  
屑物  
車  
自轉車  
菓子製造  
靴製造  
ヤノ部  
八百屋  
藥品  
柳行李支那靴製造  
マノ部  
燐寸製造  
フノ部  
文具類  
蒲團  
古道具 ..... 八〇



松 山 城



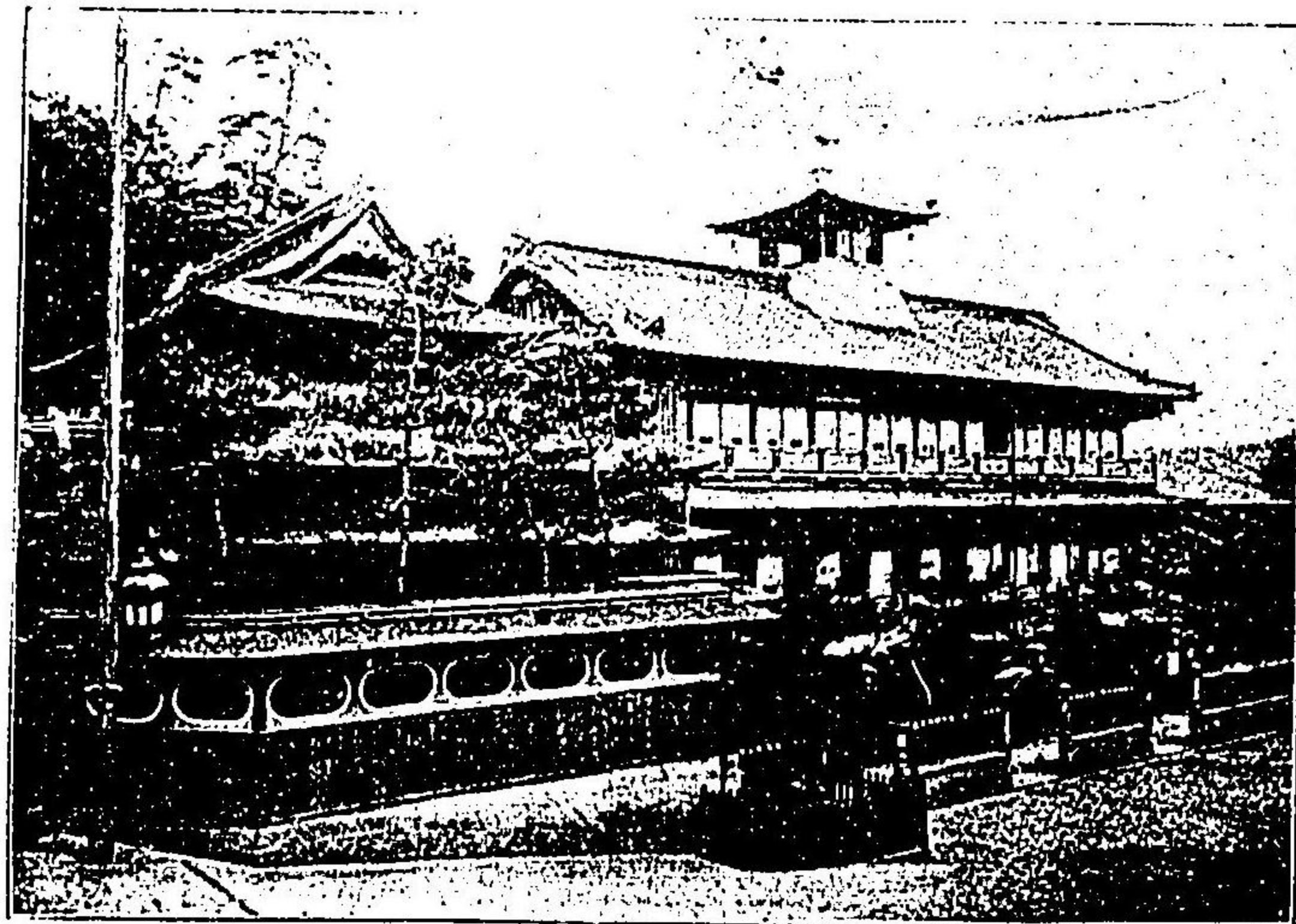
松 山 市 俯 瞰 圖

新聞發行及賣捌	九四
寫眞	九四
ヒノ部	九四
肥料	九四
モノ部	九五
精米業	九五
製粉販賣	九五
石油セメント石灰	九五
スノ部	九五
酢製造	九五
(二)松山紳士及び紳商	
銀行	九六
會社	九七
商業組合	九七
官廳公署	一〇二
學校圖書館	一〇四
名譽職員	一〇五
名譽職員	一〇六
病院醫師	一〇九
辯護士、公證人、執達吏	一一〇

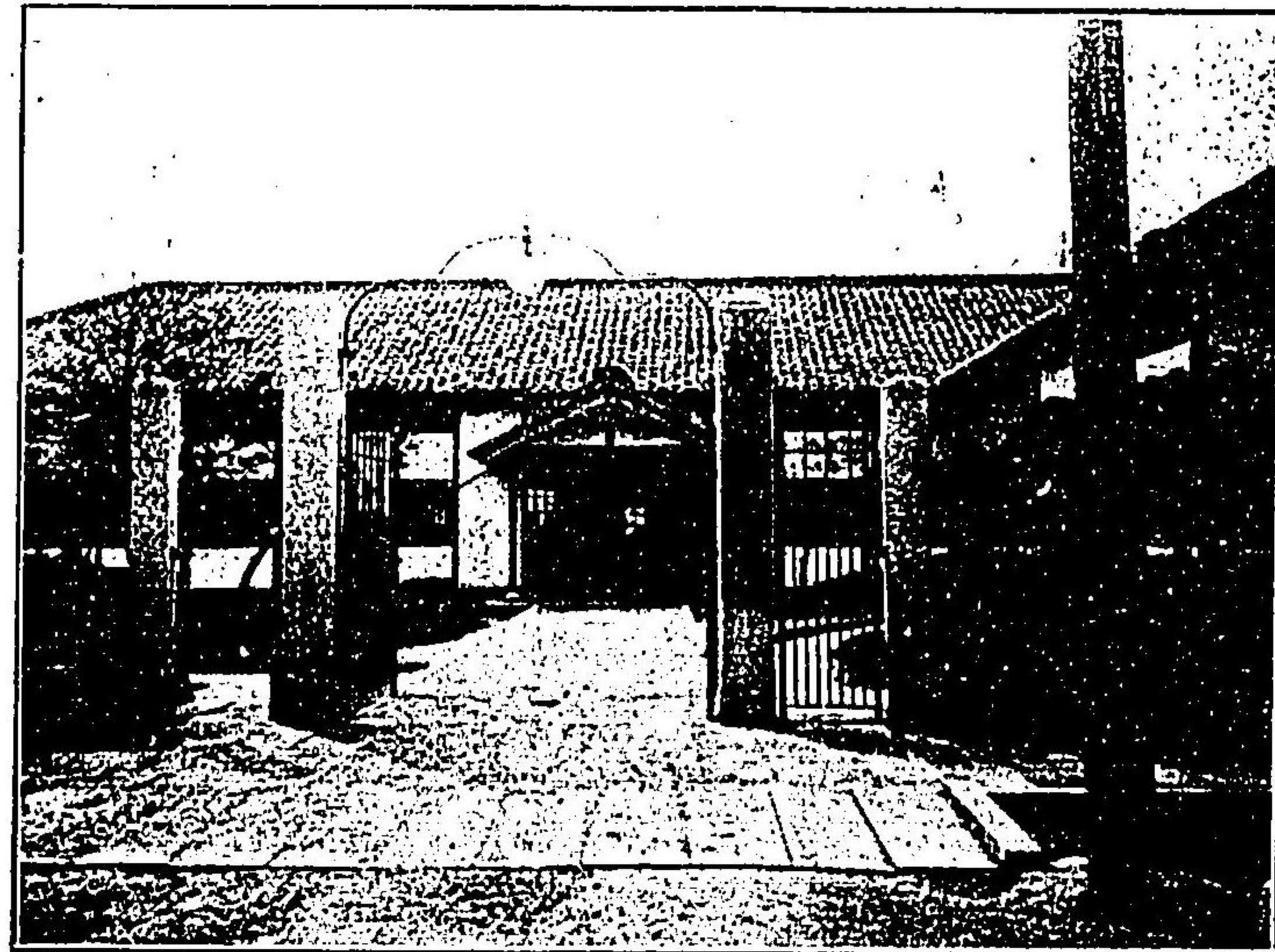
目

次 終

新聞記者	一一一
團體	一一二
	一一三



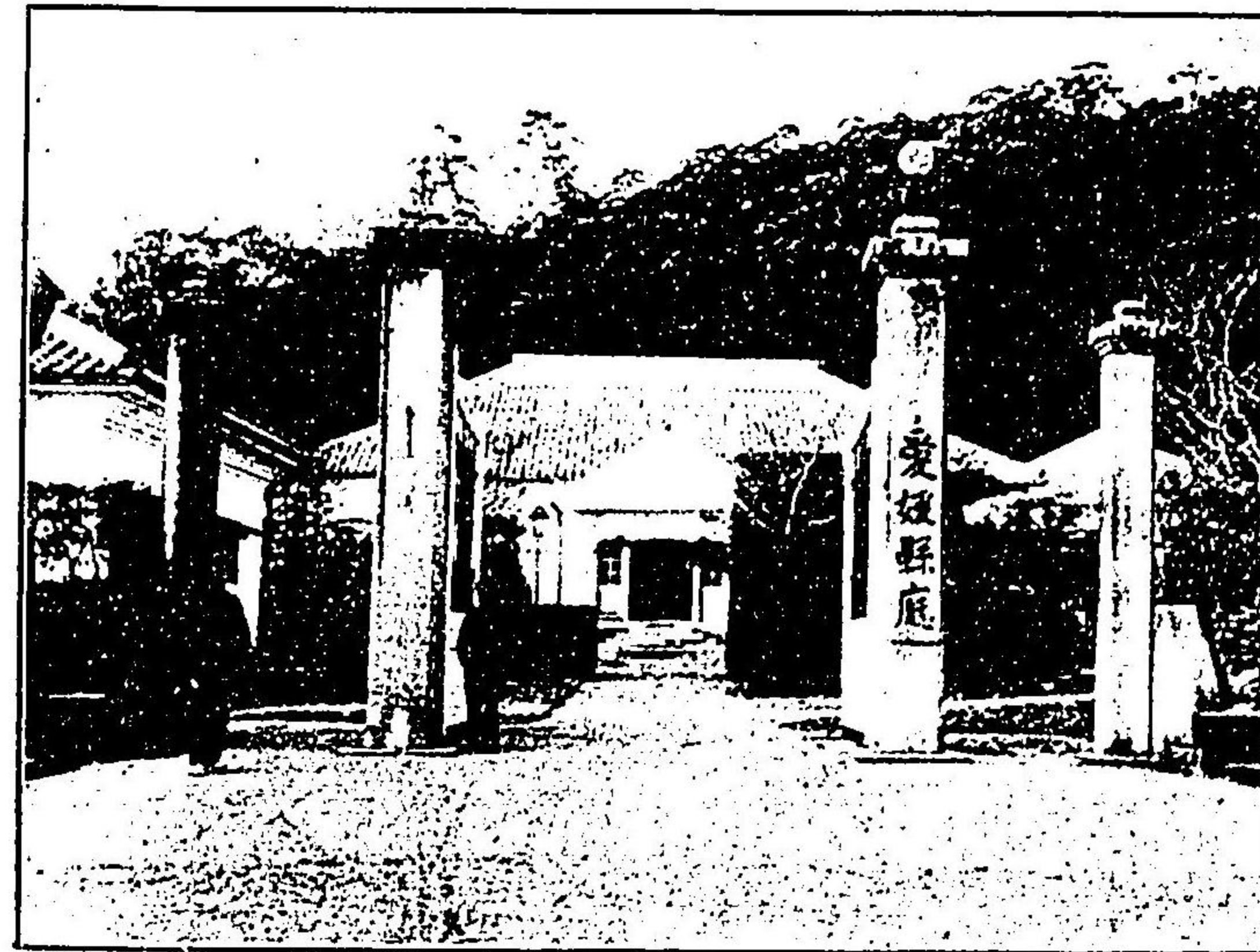
道後温泉



松山市役所

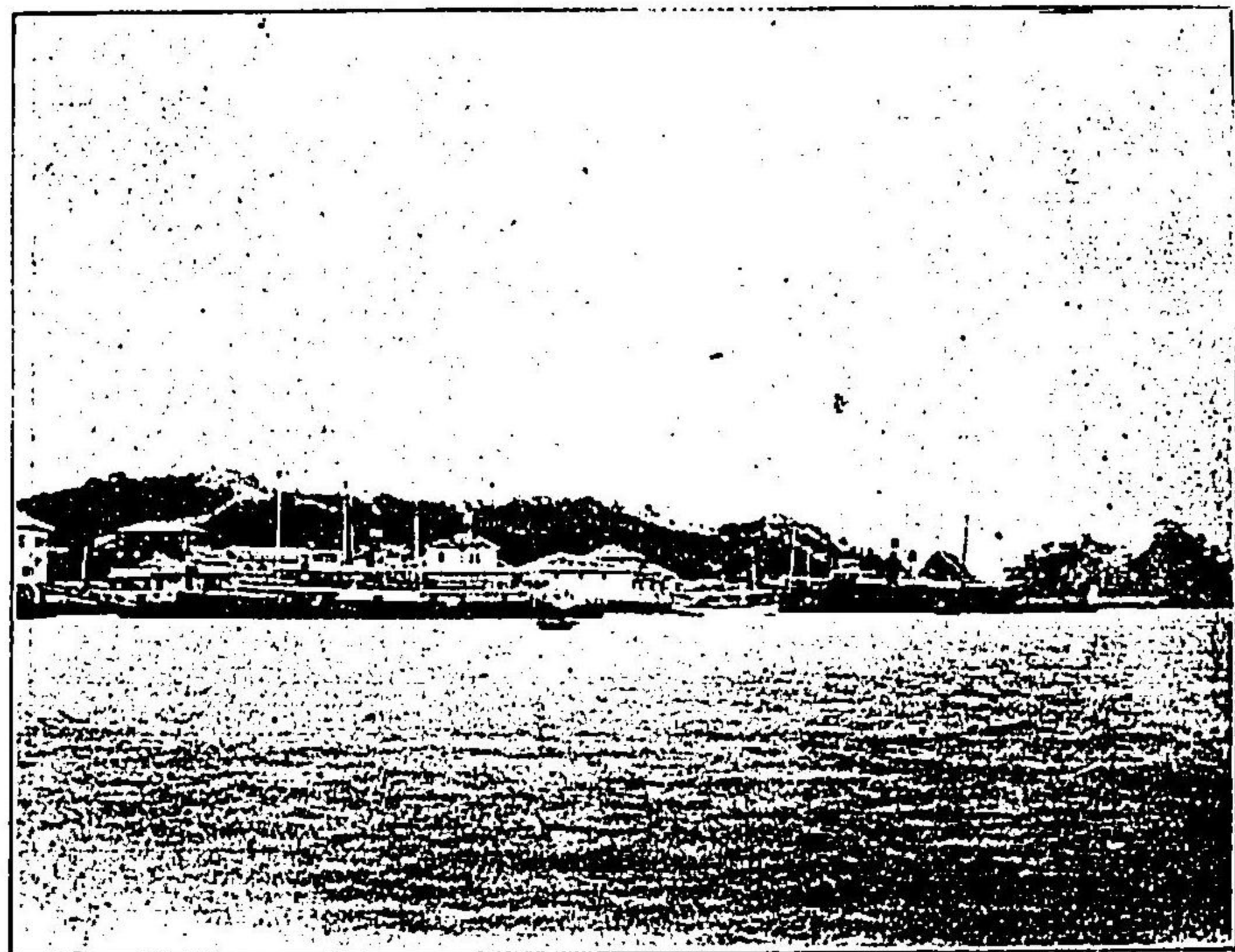


道後公園

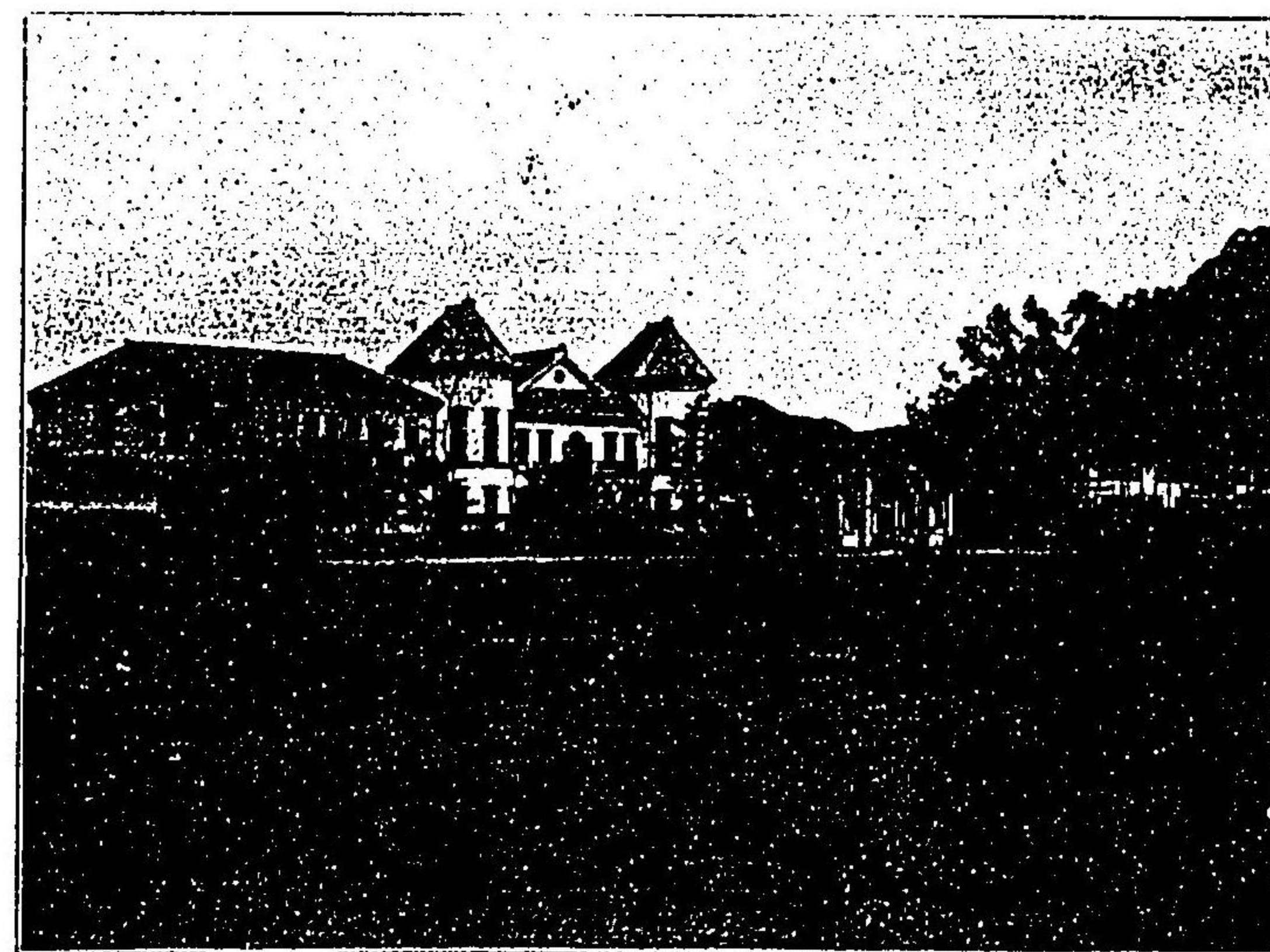


愛媛縣廳





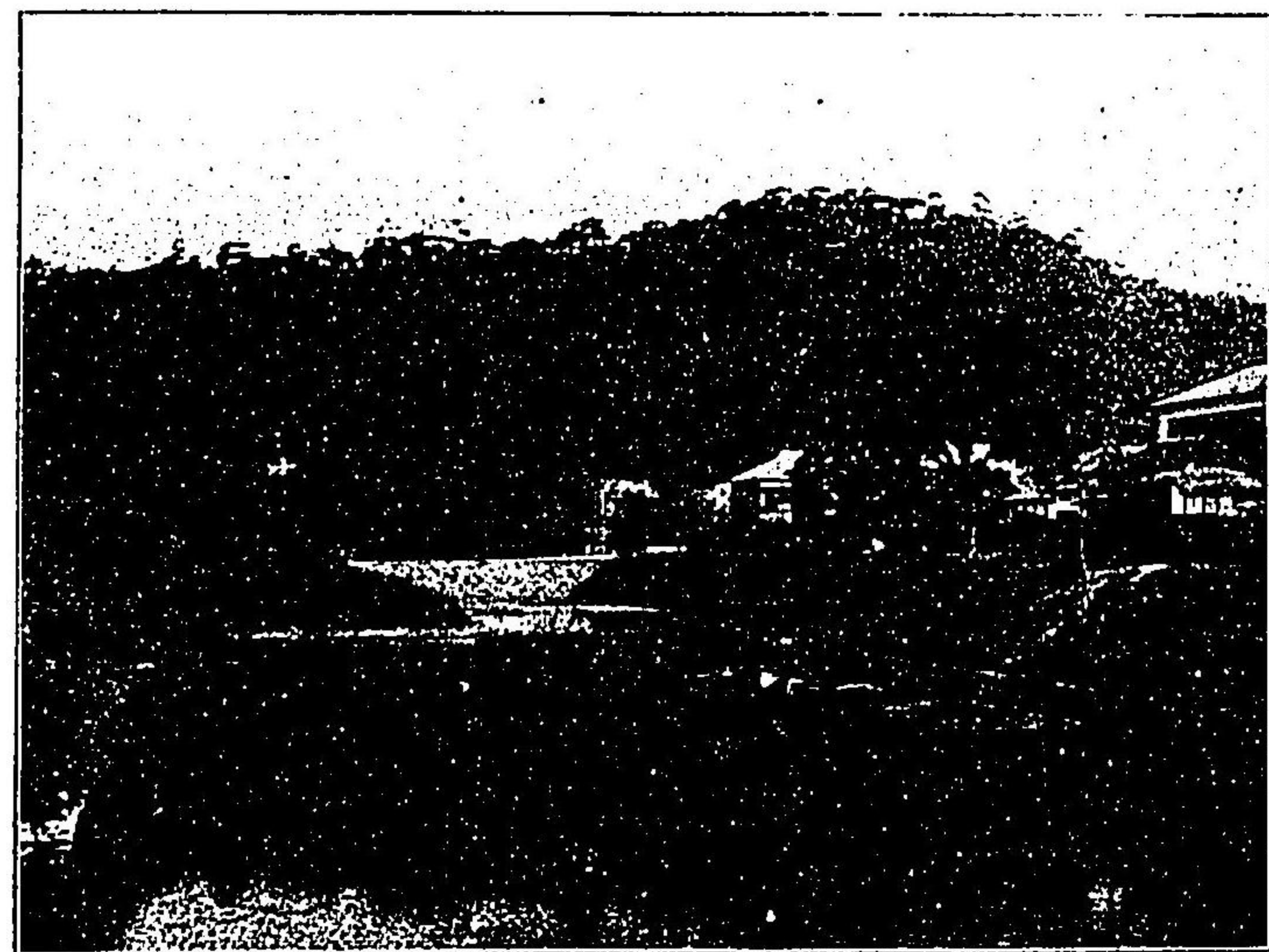
高濱港



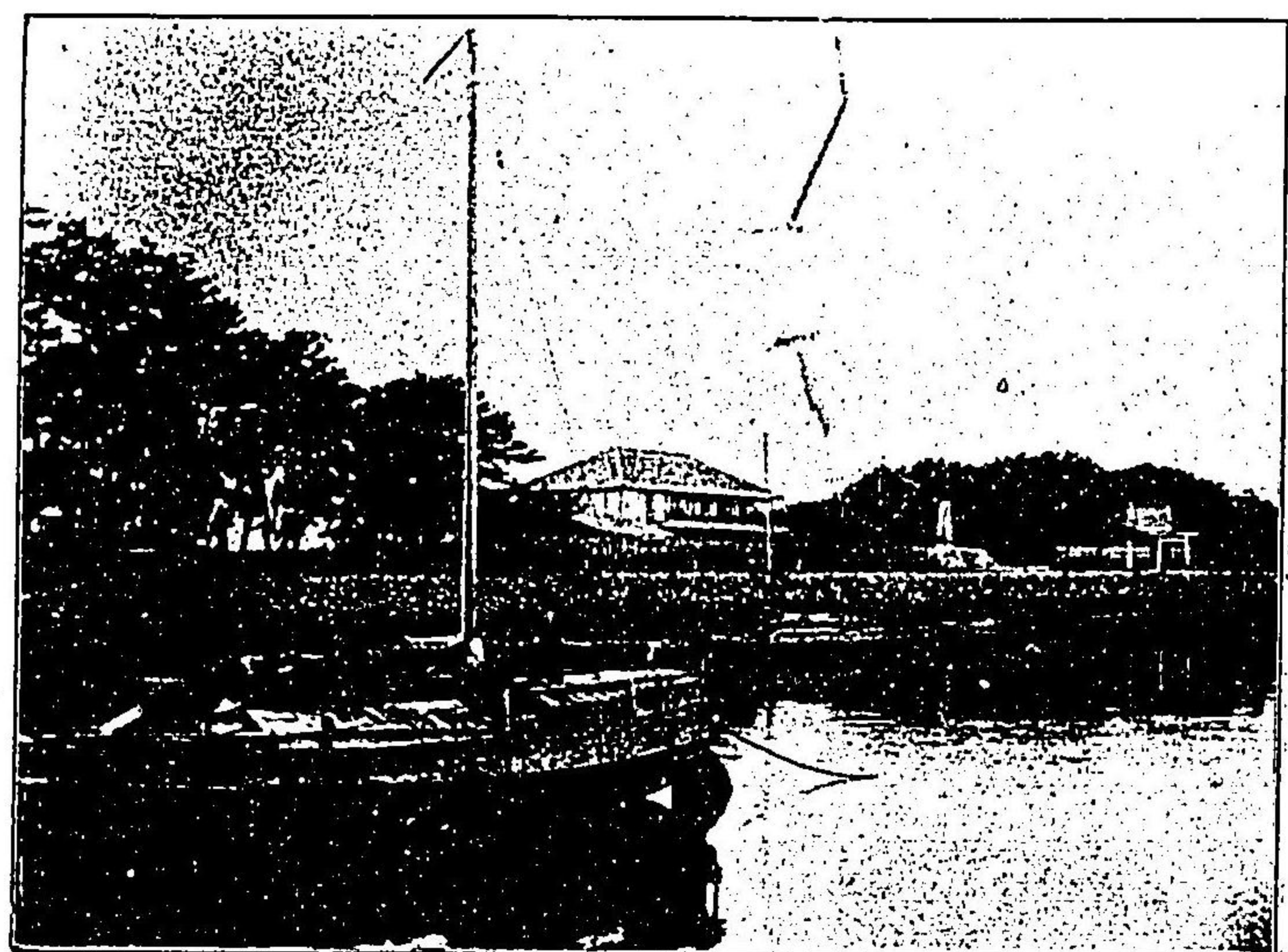
愛媛縣立師範學校



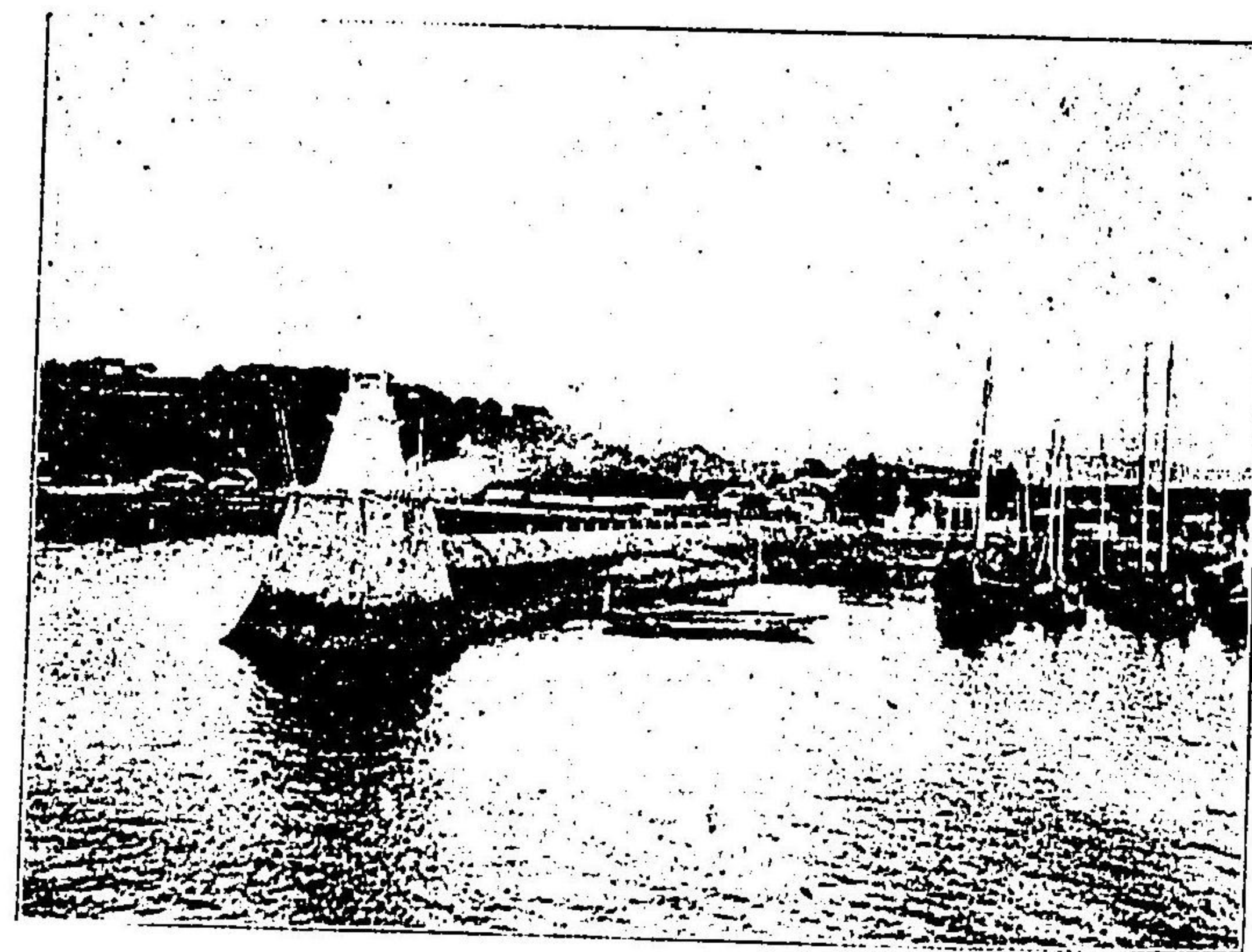
興居島



松山中山學校



館濱彩中郡



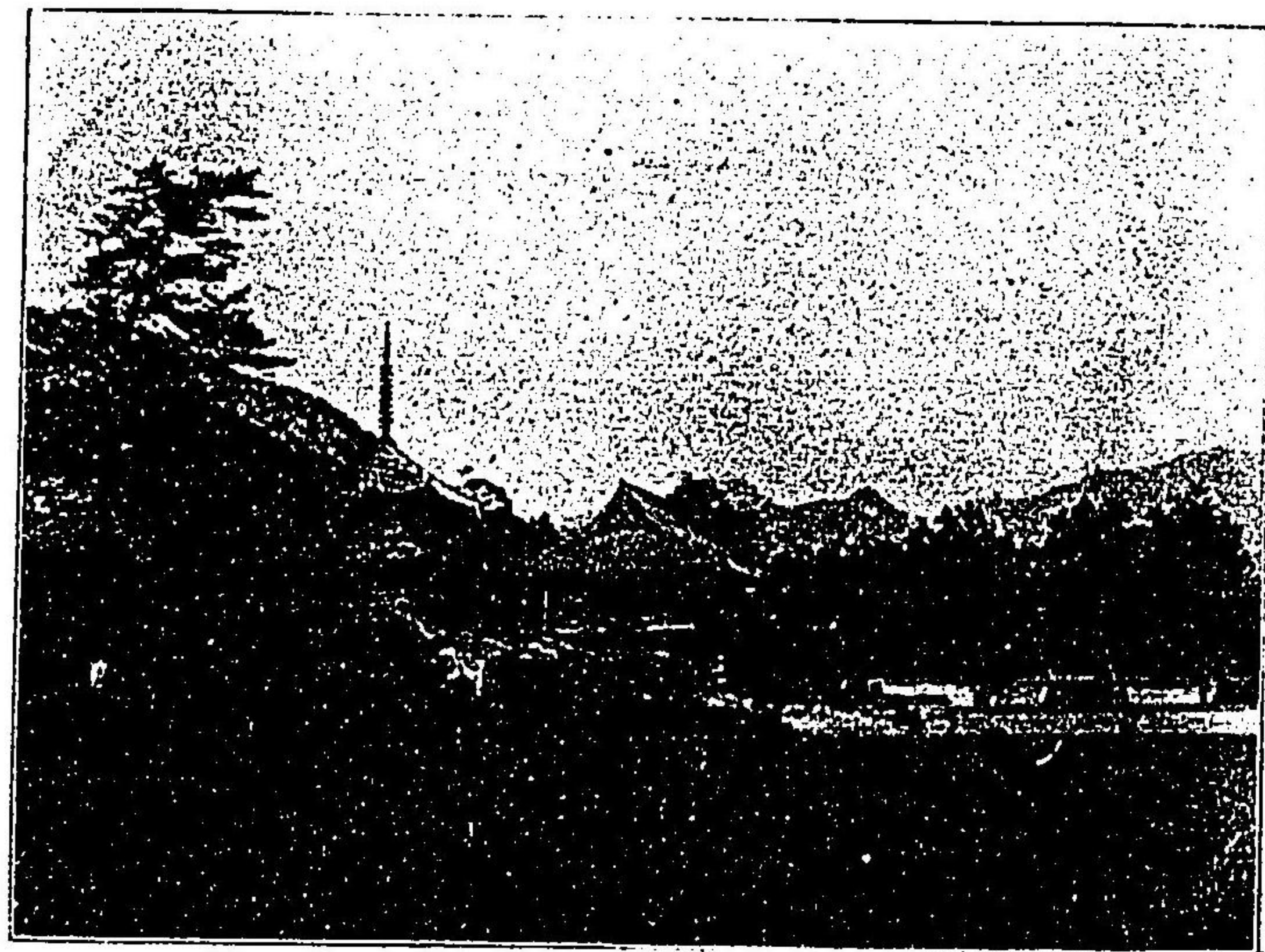
港津三



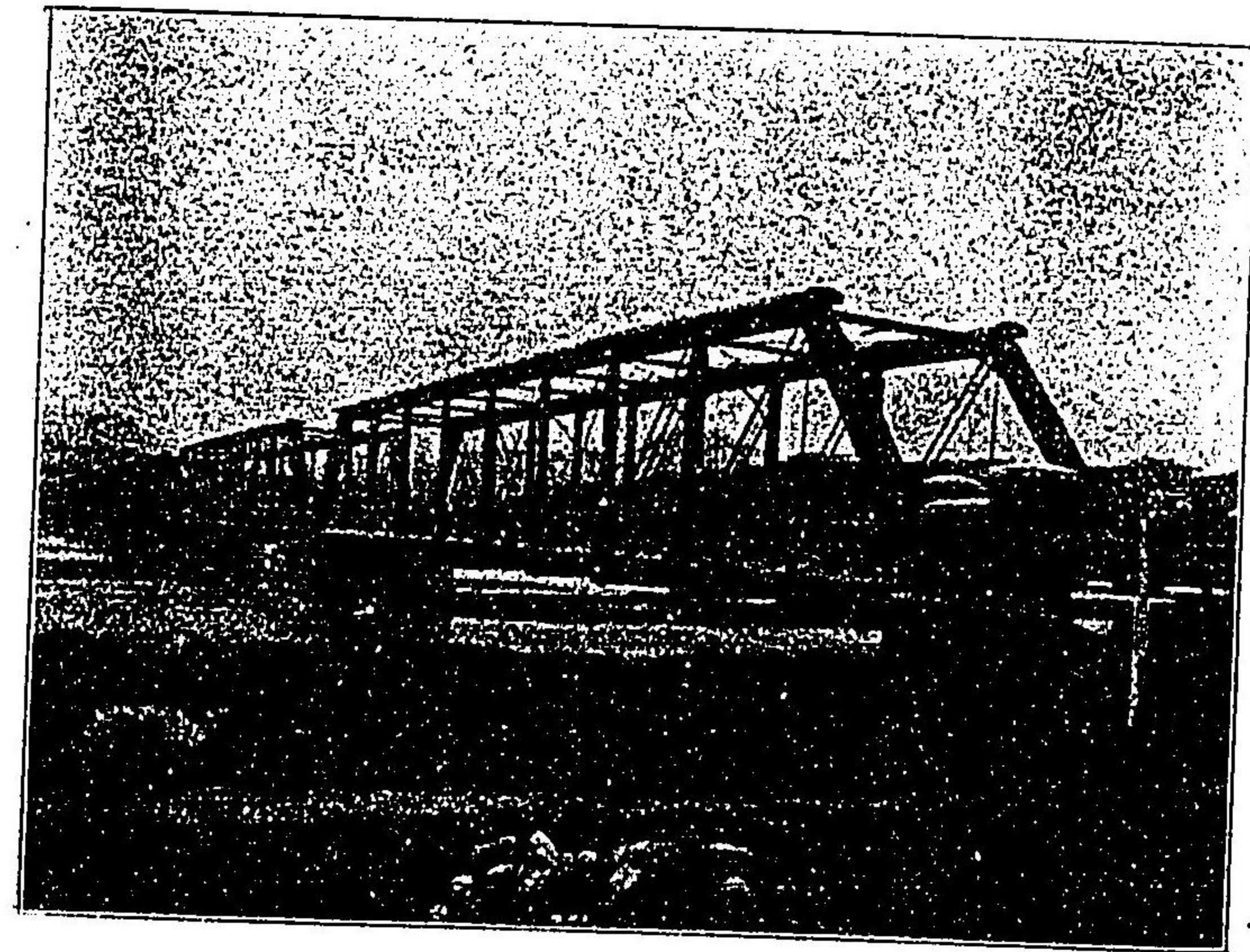
合出川信重



市魚津三



寺 手 石



橋 鐵 松 森



櫻 日 六 十



瀑 猪 白 內 河

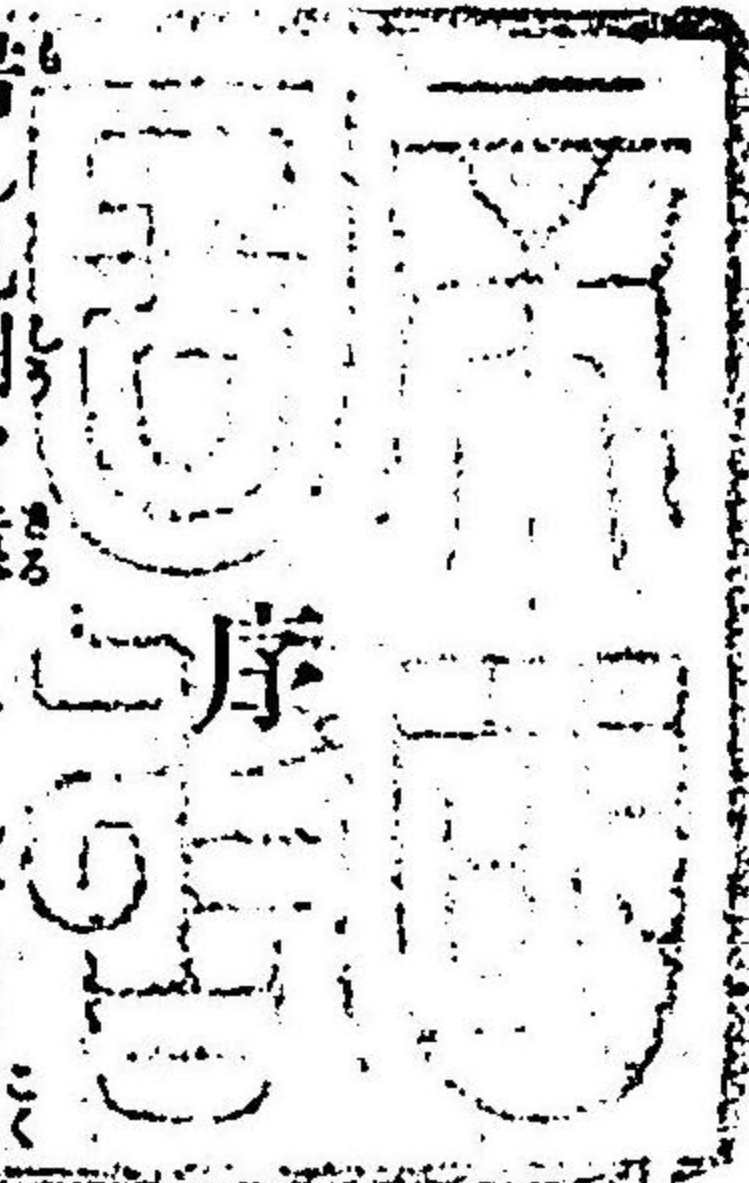
(1)

説

序

松山案内 附道後高濱三津郡中

高濱虚子校閲  
東草水編述



説

若し九州を猿とすれば四國の形は即ち蝙蝠である。地圖を披いて此の奇妙な蝙蝠に興がる人は、蝙蝠の左の翼が長く伸んで有名な佐田の岬となつてゐるのを見て更に一段の興味を覚えるであらう。この蝙蝠の左の翼こそ即ち伊豫の國で、伊豫の國の縣廳のある所が即ち松山市である。

伊豫の松山！地理に疎とき人々は此の言葉を聞いて何か邊陲の地であるかのやうに思ふかも知れないが、日露戦争以後、伊豫の松山といふ名は歐洲の果てまでも響き渡り、美しき海と美しき城の在る所として外國人から非常に賞讃せられて居る。實際松山は



淵ヶ湧



久萬山御三戸

美しき所である。海に依て松山に来る人々は西よりするも東よりするも將た又南よするも、先づ瀬戸内海の美しき島々と美しき浪とを見て感嘆の聲を惜まざるをえないであらう。瀬戸内海は恰も日本の地中海である。風光明媚の地中海を横ぎつた汽船が先づ錨をポートセードに下ろすやうに、瀬戸内海を横ぎつた船は、日本のポートセードたる高濱港頭に安着の汽笛を鳴らして、松山に行くべき數多の旅客と荷物を棧橋の上に乗ぶ。棧橋に下り立つた旅客は直に伊豫鐵道の高濱驛に駆け付ける。輕便にして瀟洒な汽車は僅に半時間の後、是等の旅客を繪の如き松山城の下に送るのである。若し季節が春の頃なら風は暖かに百花が咲き満ちてゐよう。若し夏ならば風は涼しく市外の堤に螢が飛んでゐよう。市を距る東數丁の道後には有名な温泉が玉の如く湧いてゐる。

今進んで此の松山に就て、歴史上から商工業上から交通上から、或は又風景上から縦横に解説を試みるに當り、暫時瀬戸内海の航路が如何に興味ある航海なるかを述べてみやう。

假に大阪の川口か或は又神戸港から船に乗つて高濱に向ふとする。まづ第一に横ぎるのは播磨灘だ。萬波濤々として四顧の光景既に平凡でない。高松を過ぎ多度津を出づる頃から所謂瀬戸内海の特色は次第次第に其面目を現はしてくる。夏の朝、靜かな緑色の波の上に幾十幾百の帆掛船が純白の帆を張つて列をなす様は水彩畫に見る地中海の光景そのまゝである。秋の夕暮、煙波蒼茫たる間に數限りもなき小島が船の進むに連れて前に現はれ後に消え行く様は宛然是れ一幅の水墨畫である。かやうに美しい、繪よりも美しい海上、波の極めて穏かな海上を渡つて船は高濱港に着くのである。更に又、宇品港を出た船は、先づ吳軍港に山の如き軍艦の威風堂々たる壯觀を眺め、次で『船戸可愛いや音戸の瀬戸で一丈五尺の櫓がしはる』と、謠に名高い音戸の急潮を乗り切つて碧玉を延べたやうな海へ出る。風暖かに空晴れて幾百の漁船は彼方此方に點在してゐる。やがて伊豫地近くなると伊豫の小富士が夢の如く目の前に浮び来る。程なく船は高濱港の棧橋に着く。

其他、宇和島方面からの航路も九州方面からの航路も海上の美觀は言説の及ばぬ程で、

何れの航路を取るにしても瀬戸内海の航海は一度び之を試みたもの、長く忘れえない興味ある航海である。

松山市の案内記を叙する段取として伊豫の國の歴史を極めて大掴みに語ることにする。古い歴史の物語に依ると、伊弉諾、伊弉册の二尊が淡路を作り給ふた後に次で作られたのが伊豫二名島で、今の四國の總名である。其の時分伊豫の國は愛比賣と言つてゐたが、後に伊豫と呼ぶやうになつたのである。それから桓武天皇の御子、伊豫親王が西南藩屏將軍として此國に來られた一事は伊豫史上に於て最も重大なる關係を持つてゐる。其子孫は其後國中の各處に割據して種々の豪族となつた。其中でも河野氏の一族は最も勢力があつた。河野氏が豊臣氏に亡ぼされた後は一時福島正則の所領となつてゐたが、徳川時代になつて各所に大名を分置することゝなつた。加藤嘉明は松山を領してゐた。後蒲生氏が之に代り更に蒲生氏に代つて松平氏即ち今の久松伯爵の祖先が維新前まで引續いて居られた。尙この外、伊豫の歴史を飾るものは道後温泉と弘法大師である。前者に就ては後段に於て詳しく説くこととする。

それから尙近世史上に於て見逃すことの出来ない事件がある。之は伊豫といふよりは寧ろ松山に關することでも即ち俘虜收容の一事である。由來松山の地は氣候が温和で人心が穩かな上に交通の便利がある爲めに、日清戦役の際には、先づ第一番に操江號の俘虜將卒を松山へ送つて來た。そして市外山越の長建寺に收容した。次で日露戦争の時には、鴨綠江、旅順、奉天の俘虜を高濱へ送つて來て松山へ收容した。收容所として市の公會堂や寺院などを用ゐた。それが爲め市中は俄に活氣を呈して商況は頗る繁榮を極めた。長崎、神戸あたりの商人は勿論のこと、佛國人さへ態々やつて來て商店を開いた程であつた。兎に角松山と日清日露の兩戦争は淺からぬ關係を持つてゐるのである。

さて愈々これから松山市の記述を始めるのであるが、暫時松山市へ來る爲めの海路及び陸路に就て述べてみよう。

海路

上に述べた如く海路に依て松山に入らんとするものは、必ず高濱港を経由せなければならぬ。高濱港は實に松山の關門であつて、外へ行くにも内へ入るにも此の關門を待たねばならぬ。詳しくは後段に説くが、高濱は交通の便利といふ點に於ても風光の絶佳な點に於ても兩つながら比類稀なる良港である。今、高濱港に發着する汽船の航路に就て以下に詳しく述べやう。

**大阪宿毛線** 大阪、神戸より高知の宿毛に至る汽船は上り下りとも毎日一回高濱へ寄せる。下りは、朝の九時に大阪を出帆して神戸、高松、多度津、今治を経て翌日の午前七時に高濱へ着く。それから更に長濱及び豊後沿岸の諸港を廻つて八幡濱、宇和島を訪ひ、三日目の午後一時に始めて宿毛へ着く。上りは午後二時半に宿毛を出て翌日の午前八時に高濱へ着き、それから大阪へ行くのである。此の航路の汽船には香川丸、愛媛丸、別府丸、宇和島丸等があつて何れも七八百噸のものばかりである。

**大阪内海線** 之は大阪から日向内海に至る航路である。大阪を午後四時に發した汽船は前記の各港を経て翌日の午後一時半高濱へ着く。それから長濱及び豊後、日向の

諸港を廻つて内海へ着く。下りは内海を午前十時に出て往路と同じく各港へ寄つて翌日の午後六時に高濱へ着く。それから又逆に大阪へ歸つて行く。汽船は宮崎丸、大分丸、吉野川丸、湊川丸、加茂川丸等である。

**大阪門司線** 大阪から門司へ通ふ緑川丸、龍田川丸、其他の船も亦高濱へ寄せる。朝の十時に大阪を出ると翌日の午前時には高濱へ着く。それから八九時間して門司へ着く。反對に門司からは午後九時に出て翌日の朝七時に高濱へ着いて大阪へ引返すのである。

**高濱宇品線** 高濱宇品間は往來が最も頻繁で豊浦丸、第三早速丸、第四相生丸が絶えず往復してゐる。航路の途中、音戸と吳とに寄港して約四時間で到着する。高濱を出港する時間は、午前八時、午後一時五十分、同六時五十分の三回で、宇品發の時間は、同じく午前八時三十分、午後一時、同六時三十分の三回である。何れも高濱で汽車の發車に接続するやうになつてゐる。

**三津尾の道線** 三津濱及び高濱から尾の道へ通ふ船は毎日午前七時と午後二時に出

帆して約五時間で尾の道へ着く。尾の道からは午前六時と午後二時に出港する。往復共途中の諸港へ寄せる。汽船は第三、第五の相生丸である。

●柳井線 三津濱及高濱と山口縣の開作及び柳井間にも毎日汽船が通ふてゐる。之は開作、柳井及び山口縣大島の各港から往來するもので、開作及び柳井を午前五時頃に出て十一時過高濱へ着く。それから直又引返して午後五六時分に柳井と開作へ着く。尙、此外に三津から縣下中島に通ふ汽船がある。それから三津濱から郡中、長濱其他沿岸地方を廻つて佐田岬へ行く船もある。更に又大阪、長崎間を往來して往復共に三津濱へ寄せる汽船も尠くはない。

●兎も角高濱は海陸連絡の便が充分備つてゐるから、松山へ行くにも又松山から出て行くにも極めて便利である。尙、宇品高濱線は各使往復共に帝國鐵道廳山陽線及び伊豫鐵道線と接続し連絡切符發賣の便がある。

陸路

近來道路改修工事が盛んに行はれたので、松山から各方面に向ふ陸路は大抵坦々たる大道となつたので人車往來の便が自由となつた。左に重なる街道に就て述べてみよう。

●大洲宇和島街道 松山から郡中町までは汽車(郡中線)の便がある。郡中から凡四里行くと中山、泉町があつて更に四里進むと内子町に達する。大洲町は此處から西南三里、容易く人車を通ずる事が出来る。大洲は元加藤氏の城下で、肱川に臨み、蠶絲、木蠟、製紙等の名産地である。そこから西三里の處に入幡濱があつて、更に南十里に宇和島港がある。宇和島は元伊達氏の城下で松山に亞いで繁華な市街、汽船の便もあれば物産名勝舊跡も多い。

●土佐街道 松山の南方八里餘の處に久万町がある。松山驛から森松迄汽車に乗つて、そこから先きは腕車を駆つて久万町へ行ける。途中の三坂峠は風景が非常によい。久万町附近は山水の景に富んでゐて、岩屋山、御三戸などは有名な勝地である。ここから土佐へは幅の広い大道が坦々として砥の如く續いてゐる。

●讚岐街道 松山の東方、横河原で汽車を下ると、帯の如き大道は櫻三里と越えて七





に與力同心といふものがあつて百般の政務を分掌してゐたが、別に總年寄、町年寄等があつてそれ／＼政務に參與してゐた。廢藩置縣後は松山縣と稱したが、間もなく石鐵縣と改め、更に又明治六年に愛媛縣と改稱し、明治九年には香川縣と合併したが、廿一年に再び分離したのである。明治廿三年に自治制度が施行せられることゝなつて、市内の港町四丁目に市役所を設けた。明治廿五年に更に市役所を現在の場所即ち出淵町一丁目へ移した。

以上は單に松山市の略圖を説明したに過ぎない。四萬の人口を有してゐる松山市が、交通機關の設備に於て、商工業の發達に於て、將た又教育、旅館、其他あらゆる方面の設備に於て、いかに進歩整頓してゐるかは、次の項目の下に委しく語ることにする。

松山城

海路松山に來らんとする旅客は、船の未だ高濱港に着かない前、船中遙かに城山を望見するであらう。港近く船の進むにつれて、綠色の山上に華やかな夕陽を浴びた樓閣は、繪の如く目前に迫つて來る。この城山こそ有名な松山城で、實に松

山市の一名物である。此山は勝山、寶山或は龜山と稱へて鬱蒼たる老杉古松生ひ茂れる中に聳え立つ天主閣と樓門は、靜に三百年の歴史を語つてゐる。巔に五重の天守を築いて二の丸と三の丸がある。東北には大手の大城戸を構へて矢狹間、鐵砲狹間など要害は頗る堅固である。この城は慶長八年加藤左馬助喜明が松前城を移して改築したものである。喜明の考へでは、北方二里の海から運河を開鑿して之を石手川に結びつけ松山城の外濠にする大計畫であつたのが、幕府の忌憚に觸れ、工事半ばにして四十萬石を賜つて奥州會津に移された。次で寛永四年蒲生秀行の次男中務大輔忠知、出羽上山四萬石より十一萬石を加増せられて此城に移つたが、其後同拾二年に東照神君異父同母の弟久松從四位少將定勝の世子松平隱岐守定行が十五萬石にて當城を賜つたので、伊勢の桑名からここへ遷つた。同十九年城を修營して五重天守を三重に改めた。それから數代を経て雷火の爲め一旦天守は焼失したのであるが近年再び建て直した。廢藩置縣後は城内を開放して公園とした事もあつたが、明治二十年陸軍省の管轄となつてから、特に出願するものゝ外、妄に觀覽を許さないことになつた。山上に立

つて回顧すると、遠山近海、悉く一眸の裡に集まり来るさま、壯絶快絶、殆ど言語に絶する。

餅をつく音やお城の山かづら 子規

市街 かく歴史的にも風光上にも兩つながら市の裝飾たる松山城を圍つて、一萬有餘の人家が軒を並べてゐることは既に述べた通りである。今市街の状況を語るに當つて先づ外側と古町の二つに分たう。

外側

● 湊町 船を高濱港頭に捨て、伊豫鐵道の汽車に乗ると、汽車は三津驛、古町驛を過ぎて松山驛のプラットホームに横付けとなる。今秋改築した松山驛の建物は、まづ旅客の目を驚かすであらう。この松山驛は即ち外側の關門であつて驛のある湊町は實に市中第一の繁華な町である。停車場の構内を出ると、湊町は一直線に東に續いてゐる。外側が松山市の商業の中心點である如く、湊町は外側の中樞である。米周米藤の

● 呉服店を始め立派な商店、立派な旅館、勸工場もあれば銀行もあり、愛媛新報社もある。夜は華かな電燈の下に多勢の人が來往織る如き有様を呈する。

● 小唐人町 湊町を二丁目あたりまでのぼつて直角に左に曲ると、幅の廣い大通が遠く城山の麓まで續いてゐる。これは小唐人町で俗に大街道と呼んでゐる。この町は湊町に次で賑やかな町で、各種の商店は勿論、海南新聞社と新榮座といふ劇場がある。この町を更に行くとも城山の半腹に愛媛縣立病院が巍然として高く聳えてゐる。

● 三番町 湊町と並行して城山に近き側に千船町があつて、之に並行して三番町がある。この町は賑かなことは決して湊町に劣らないばかりか、年々繁榮に趣いてゐる。城戸屋を始め、立派な旅館が澤山ある。重なる建物としては、五十二銀行、松山郵便局、松山貯蓄銀行、壽座、伊豫水力電氣會社等がある。

● 二番町及び一番町 三番町に並行して二番町と一番町がある、この二つの町には官衙學校が多い。町幅も廣く凡てが規矩整然としてゐる。二番町には農工銀行、松山中學校、松山高等小學校、伊豫教育協會、圖書館等がある。一番町には愛媛縣廳裁判所

等がある。

河原町 湊町を歩き盡さんとする前で右へ曲ると河原町がある。木原屋紙店其他の商店が軒を並べてゐる。堤には一帯の青松列をなして城山の翠黛と相對してゐる。潺湲たる流を横きつて立花橋がかかつてゐる。橋を渡ると、坦々として砥の如き大道は遙に森松を過ぎ久萬町を過ぎて、高知市に通じてゐる。

堀端 兵營を取り圍んで南と西と更に東と北の一端に濠がある。堀端とは此濠の兩側をいふのである。濠の土手には翠色滴るばかりの松が、列をなして蟠屈してゐる。兩側の町の灯が星の如く連なつて濠の水にうつるさまは。市中の一美觀である。しめやかな秋の夕暮に、夕日影が次第に消えゆく城山を仰ぎながら、堀端を散歩してゐると、營内で吹奏する喇叭の音が一種悲壯な調子を帯びて響き來る。尚この外に、榎町、出淵町、千船町、辨天町等は賑な町である。

古町

外側が松山市商業の中心であるのに對して、古町は松山市の工業及び製造業の中心となしてゐる。又一面には古町は卸商が多く、外側には小賣商が多い、松山紡績會社、松山織物會社、松山醬油會社、松山精米所等がある。それから松山の重なる酒造家は皆古町に在る。特に伊豫織物改良同業組合事務所を中心として緋問屋は皆本町、魚町、松前町に集つてゐて、伊豫緋の集散は一に古町に於て行はれる。左に重なる町を擧げてみやう。

萱町 高濱驛を發した汽車が三津驛を過ぎて松山驛に着く前に必ず古町驛を通る。古町驛を出て一二町行くと、南北に通じた長い町がある。これが萱町である。町を七丁目まで行き盡した端に松山紡績會社がある。反對に南の端近く行くと大きな建物があつた。これは公會堂だ。其の中間に税務署がある。

木屋町 師範學校の前を東に突き當てると、南北に通ずる町がある。これが木屋町である。町の北端に木屋町停車場がある。木屋町は三津街道と今治街道との交叉點にあるので交通の便利上商業は月を追ふて盛んになつて行く。

西堀端 前に外側のところで述べた堀端の西の方が即ち西堀端である。斜に城山の翠色を仰いで濠に沿ふた賑かな通りである。勸商場、伊豫日日新聞社などがあつて、商店が軒を並べてゐる。

本町 西堀端を北へ突き貫けると本町へ出る。大きな商店が立ち並んで、町の有様は凡て京都の趣きが見える。本町には仲田銀行、松山貯蓄銀行支店、松山商業銀行支店、田内緋販賣店、其他緋問屋が澤山ある。

紙屋町 西堀端を北に突き當つて左に曲つた通りが紙屋町である。この町にある伊豫農業銀行、伊豫織物改良同業組合事務所は、松山市中に有数の建築物である。尙、栗田緋問屋がある。

魚町 緋問屋玉井合名会社がある。

松前町 松山織物會社、松山醬油會社、松山精米處等がある。何れも繁華な町である。これで松山市の概観は略述し終つたが、要するに交通の便利な爲めに、松山市は商業に於ても工業に於ても其他百般の設備に於て、日進月歩の勢である。電話電燈

は勿論のこと、建築物を始め商店の飾附けから販賣法まで、追々新式を採用してゐる。更に工業は各種の工場やら製造所やらが漸次新設せられ年々に進歩發達の痕を示してゐる。

### 松山市の設備

こゝでは旅館其他の設備に關して略しく話してみやう。

旅館 市内で宿屋業を営むものは、約百二十戸ある。旅人宿と下宿屋の二種に分れてゐて宿泊料は一泊大抵六十錢から二圓位までだ。重なる旅館は、外側では三番町の城戸屋、日野辨、紀伊とく、金子、渡部、小唐人町の久保豊、叶世、湊町の白石、福田、千船町の久保田、榎町の藤岡、古町では魚町の高知屋、佐々木等である。下宿屋は旅館に比して萬事が格安であるから、學生寄留者、若くは長く滞在する旅客には最も便宜である。

料理屋 關東地方の魚は凡て大味で風味に乏しいが、關西の魚は味が繊細で風味

が豊かだ。殊に波の静かな瀬戸内海を控へた松山には四時を通じて味の美なる鮮魚の絶ゆることがない。是等の鮮魚を肴に松山城の美観を前に、淺酌微吟するも旅客に取つては一段の興趣であらうと思ふ。さて料理店や飲食店は市内到る所にあるが假に多人数の會席に應じうべき名あるものを舉げてみると、松山俱樂部（二番町）梅の家（二番町）明治樓（三番町）八百春（湊町二丁目）龜の井（柳井町）等である。

**勸商場** 三番町と湊町四丁目と魚町一丁目との三ヶ所にある。三番町の勸商場は二階建て遊技場の設けがある。湊町と魚町の勸商場は平屋建てではあるが、何れも設備は完全であつて各種の物品は悉く陳列してある。

**劇場** 市内で重なる劇場は新榮座（小唐人町二丁目）壽座（三番町）朝日座（松前町四丁目）である。何れも設備は比較的によく整頓してゐて約二千人を容るゝに足る。東京大阪の俳優が絶えず興行をしてゐる。この外に輕便な寄席はいくつもある。

**水力電気** 松山市の製造業及び設備に對して多大の關係を持つてゐるのは、伊豫水力電気株式会社である。松山市のみならず、道後、三津、高濱郡中の電燈は、悉く此

の電氣會社の供給する電力に依るのである。發電所は石手川の上流、湧ヶ淵に設けられて、水力を利用して電氣を起してゐる。この電力は市の電燈ばかりでなく、更に機械力の原動力となつてゐる。殊に精米、織布の事業は之れが爲に頗る盛大となり、年々縣外へ輸出する精米、織布は非常の多額に上つてゐる。かやうに電力を應用する製造業が益々發達してゐるにつれ、湧ヶ淵の發電所のみでは電力の不足を告げるので、更に大發電所を久萬山地方に設けんと、目下その計畫中である。それが爲め、當分の繁きとして松山驛の横に、火力發電所を設け、電力の不足を補給してゐる。兎も角、この水力電氣は地方産業の原動力となり各種の工業に利用せられてゐるので、今後この事業の益々發展擴張せらるゝにつれ、地方の産業は愈々進歩發達するのである。

### 市の交通機關

**伊豫鐵道** 松山市の重なる交通機關といへば伊豫鐵道である。高濱港に由て松山に入らんするものは勿論のこと、土佐街道、宇和島街道、今治街道、其他各方面から

松山へ来るものは、必ず伊豫鐵道の便を藉らねばならぬ。伊豫鐵道は明治十九年に創設せられたので、始めは僅に三津と松山間の連絡を保つに過ぎなかつたが、其後世運の進歩に伴ふて益延長擴充されて、本社所在の松山驛を中心として恰も五指を開いたやうな鐵道線路は、松山市を取圍みながら東西南北に延長した。今日の營業哩數は二十六哩十四鎖に達した。この中で高濱を起點として、三津、古町、松山驛、立花、久米、平井、田窪を経て横河原驛に至る十二哩六十七鎖は伊豫鐵道の幹線で讚岐街道に續いてゐる。

次に立花驛から分れて、石井を経て森松に到る二哩六十三鎖は土佐街道に沿てゐる。これは森松線である。それから松山驛から西南に進んで余戸、出合、松前、地藏町の各驛を歴て郡中に達する六哩五十六鎖は大洲、宇和島へ行く通路に當りて郡中線といふ。尙、幹線の古町驛から分岐して木屋町を経て道後に到り、更に一轉して松山市の一番町に達する三哩二十八鎖を道後線といふ。かやうに各線は道後線を除いて、皆悉く松山驛に集合してゐる。郡中線の乗降場は前側に設けてある。平時は、高濱二十

分乃至七十分、郡中線は一時二十分、横河原線は二時間、森松線は一時間毎に發着する。場合に應じては特別臨時汽車を出す。かくの如く伊豫鐵道は、専ら地方の交通運輸をば迅速に且つ正確に爲してゐるばかりでなく、尙、内海航路の各汽船と連絡を計り、帝國鐵道廳とは共同運輸の便を開き、高濱宇品間の海陸連絡は非常に整頓してゐるので、恰も我邦の幹線の一支線たるの觀を呈してゐる。

**電信電話** 電信の設備が整ふてゐることは今更いふまでもない。今年になつてから、人口の増加と商工業の發展とは遂に電話の架設を見るに到つた。電話交換所は三番町の郵便電信局内に設けてある。目下、加名者の數に制限があつて二百七十名であるが、年と共に増設せられるであらう。尙、道後、三津、高濱の三個所にも通じてゐるから、松山の商人は坐ながらにして商取引をすることが出来るやうになつた。其他人力車、荷車などの設備も充分整ふてゐる。

市 産 業

産物の主なるものは、緋、清酒、菓子、紙、醤油、指物、揚豆腐、素麺、麻裏等である。産業の種類は約三十種許りで其生産総額は實に二百四十萬圓に達する。そして是等の産物は縣内縣外は勿論のこと、遠く海外にまで輸出せられるのである。

**伊豫緋** 就中販路の最も廣いのは緋で、日本全國はいふに及ばず、布哇、滿洲、さては米國の遠きまで仕向けられて市内で消費する分は僅かに生産額の百分一にも達せないのである。松山市及市外に於ける現今一ヶ年の産額は二百五十萬反で價格は三百萬圓に達してゐる。米を除いては實に縣下第一の産業で、松山市の産業の一張一弛は殆んど緋生産の消長に依るといふも決して過言ではあるまい。又京阪地方との送金爲替の順逆の勢も皆舉げて之れにかかつてゐる。殊に品質が精良で價格が低廉で極めて實用的に出来てゐるが爲め、販路は益々擴張せられ商況は愈々旺盛を極めてゐる。緋に次で販路の廣いのは酒であつて近年銳意品質の改良に努め、輸入を防禦したばかりでなく却て中國、九州、清韓地方へ盛に仕向けるやうになつた。産額はさまで多くないが販路の廣いのは、揚豆腐で遠く米國、布哇までも輸出せられる。醤油、

指物、麻裏は近來盛に縣外へ輸出することとなつた  
 以上述べた如く、緋は産業中第一位を占めてゐるから、ここに大略の沿革を説くことにする。

**伊豫緋の沿革** 伊豫緋の沿革を叙べるに先だつて、伊豫緋の起源を記するの必要がある。といふのは現今伊豫緋に用ゐてゐる機臺機具等は、もと／＼伊豫緋の創始

者である菊屋新助の發明になつたものであるからだ。新助は舊野間郡小部村の人で、幼少の頃から貨殖に志して、松山市に來往して居た。人と爲り頗る謹直で、常に利世の志があつた。嘗て京都から絹織に使用する花機一臺を得たので、どうかして之を木綿織に應用しやうと思ひ立ち、苦慮焦思、いろ／＼と工夫を凝し、漸く一つの機械を作り出して、近隣に配布して試験せしめた。これが即ち現今高機と稱する織機の起源である。一度此便利な織機が發明せられて以來、之を織るものが段々殖えてきたので、新助は價を定めて、それを買ひとり、遠く京阪地方から其他の諸國まで賣り出して大に販路の擴張に力めたものだから、伊豫緋の名は俄に高く廣まつて、當時



有名な下總の結城縞と伯仲の間にあるほどの有様となつた。世間では之を伊豫結城と唱へ、益々需要者の好評を博することゝなつた。従て産額も頓に増加して、之を織るものは普く伊豫全土に及ぶといふ勢ひ。今では到る處、歌に和する機杼の音が聞えるやうになつた。伊豫緋の沿革史の上で新助と合せて二大明星と稱すべき人に、鍵谷カナ女といふ女がある。カナ女は文政時代に新助の高機發明と相前後して緋織を創めたのである。初めカナ女は地機といふ、極めて舊式の織機を用ゐてゐたが、高機の方が尙に地機に優つてゐるのを知つて、到頭緋織も高機に上せて織成を爲すことゝした。

鍵谷カナ女は温泉郡垣生村今出の人で、幼い時から伶俐で、殊に手藝に妙をえてゐた。嘗て讃岐金比羅宮に参詣の途すがら、ある國の人が緋織を着てゐたのを見て深く愛賞し、家へ歸つて後、木綿糸を處々縛つて、これを藍の代りに青草を搾つた汁で染めて、地機といふ織機に巻き揚げて織つてみたところが案外旨くいつたので、それから近所へ傳へ、漸次一郷一村に及び盛に織り出すことゝなつた。かくして今出緋といふ名は

近國に響き流ることとなつたのである。その後或は盛んとなり或は衰えて、種々の運命には遭遇したが、其間に織成の技術は絶えず進歩して、染色、地質、柄、模様等に一大改良を施し、遠く中國京阪地方に輸送して大に其販路を擴め需要を増加した。かく、伊豫緋が漸次販路を擴張し其産額を増加したと共に、一面に於て粗製濫造の悪弊を生じ、其聲價を墜し、隨て商況の不振を招くに至つたので有志の士は大に之を遺憾として、明治十二年編會社なるものを設立して其取締を嚴にし品質の改良を企てた。爾來一起一仆數回の變遷を経て明治十九年に至り、同業組合準則に基き、組合を組織して一の規約を結び、織物の検査を爲し、不良品に對しては嚴重なる制裁を加ふることゝなつた。降て明治三十年法律第四十七號に據つて松山、温泉、伊豫の一市二郡を區域とし、新組合を組織した。即現今の伊豫織物改良同業組合はこれである。其後伊豫緋は駁々として進歩發達し、加ふるに昨年來時勢の進歩と需要者の嗜好に鑑み、大に染色地質柄模様等に改良を加へたが爲め、現今では其製産額優に全國第一位を占め、其品質の精良なることも又前日の比でなくなつた。

上に述べた伊豫織物改良同業組合の事業に與つて最も力あつた人は、栗田卯三郎、瀬川喜七の兩氏で、共に賞勳局から勅定の緑綬褒章を賜つた。

勸業協會 尙、松山市には従來勸業委員が設けられ、常に市の商工業に對する方針經營に關して貢獻するもの頗る多大であつた。近くは松山市勸業協會が設けられて、市の産業の發展に就て劃策經營するところが尠くない。其他各種の同業組合が設けられて各々其發展を計つてゐる。勸業協會は本年五月に創立せられたもので、左に同協會々則を掲げて其事業の一斑を示すことにする。

松山市勸業協會々則

第一章 總 則

第一條 本協會ハ日本大博覽會及第十回關西府縣聯合共進會ノ事業ヲ協賛シ松山市産業ノ發展ヲ期スルヲ以テ目的トス

第二條 本協會ノ目的ヲ達センカ爲メ本協會ノ爲スヘキ事業ハ左ノ如シ

- 一、出品物ノ勸誘ニカムルコト
- 二、出品物ノ調査若クハ撰擇ニカムルコト
- 三、出品物ノ取纏メ及其運搬ニ關シ便宜ヲ計ルコト
- 四、出品物ノ陳列及裝飾ニ關シ便宜ヲ計ルコト
- 五、出品人及一般人ノ參觀ヲ勸誘シ路程及宿舍等ニ就キ便宜ヲ計ルコト
- 六、賣店ノ設置ニ關シ便宜ヲ計ルコト

七、參觀貯金ヲ勸誘シ之ニ關スル便宜ノ方途ヲ講スルコト

八、參觀人ノ買約品ニ關シ便宜ヲ計ルコト

九、他地方ヨリノ參觀人ヲ松山ニ吸集スルノ方途ヲ講スルコト

十、博覽會及共進會ノ視察調査ヲナスコト

十一、以上ノ外本協會ノ目的ヲ達スル爲メ必要ト認ムル事項

第三條 本協會ハ本會ノ目的ヲ翼賛スル有志者ヲ以テ組織ス

第四條 本協會ノ經費ハ會員ノ釀出金有志者ノ寄贈金及縣市補助金等ヲ以テ之ニ充ツ

第五條 本協會ハ明治四十一年五月ヨリ日本大博覽會事業終了マテ之ヲ設置ス

第六條 本協會事務所ハ松山市役所内ニ置ク

第二章 會員及役員

第七條 本協會ノ會員ヲ分ツテ左ノ三種トス但釀出

金ハ時宜ニ依リ二期ニ分納スルコトヲ得

一、名譽會員 金三拾圓以上ヲ釀出スルモノ

一、特別會員 金拾圓以上ヲ釀出スルモノ

一、正會員 金貳圓以上ヲ釀出スルモノ

第八條 會員ニハ會員章ヲ付與シ相當ノ待遇ヲ爲ス

第九條 本協會ニ左ノ役員ヲ置キ會員中ヨリ之ヲ選舉ス

但缺員ヲ生シタル時ハ評議員會ニ於テ之ヲ選舉ス

一、會 長 壹名 副會長 壹名

一、理 事 二十名 内四名ヲ専務理事トス

一、評議員 若干名

第十條 役員ハ總テ名譽職トス但事務ノ都合ニ仍リ報酬若クハ手當金ヲ支給スルコトヲ得

第十一條 會長ハ必要ニ應シ書記ヲ任用シ若クハ囑託スルコトヲ得

第三章 會務處理

第十二條 會長ハ會務ヲ總理ス

第十三條 副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキ

ハ之ヲ代理ス

第十四條 理事及書記ハ會長ノ指揮ヲ受ケ部務ヲ整

理ス

第十五條 評議員ハ重要ノ會務ヲ審議ス

第十六條 本協會事務整理ノ爲メ左ノ各部ヲ置キ各

部ニ理事及書記ヲ分屬ス

庶務部

出品部

貯金部

會計部

第十七條 庶務部ニ於テハ會員並ニ參觀人ニ關スル

事務並ニ他部ノ主管ニ屬セサル事務ヲ處理ス

出品部ニ於テハ出品及賣店ニ關スル全般ノ事務ヲ

處理ス

貯金部ニ於テハ博覽會ノ參觀貯金ニ關スル全般ノ

事務ヲ處理ス

會計部ニ於テハ現金ノ出納及用度等ニ關スル全般

ノ事務ヲ處理ス

第十八條 會長ハ特種ノ事業ニツキ常設又ハ臨時委

員ヲ設置スルコトヲ得

第四章 附 則

第十九條 本則ハ評議員會ノ決議ヲ以テ之ヲ修正ス

ルコトヲ得

### 市の財政

四萬人の人口を有する松山市の經濟状態に就て概要を説いてみよう。松山市の重なる財産は、有價證券が二萬五千七百餘圓、金員が四萬一千餘圓、及び不動産が二十餘ケ

所に散在してゐる。この上に在る建物の棟数は百五個ある。是等の財産は、基本、別途基本、學校基本、特別、部分及び以上に屬せざるもの、の六種に區別せられて、更に其下に教育、衛生、救恤、勸業等の資金が適當に細別せられてある。そして以上の財産から得るところの収入は、今年の豫算に依ると二千二十七圓餘である。併し市が一個の自治團體として團體各員の福利を計る爲めには尙別途の収入が必要である。この必要は四つの方面からの収入に依つて充たされてゐる。即ち第一が市税で第二が手数料及び使用料、第三が雜收入で第四が其他の收入といふ順序である。第一の市税は六萬一千圓以上あつて最高額を占めてゐる。第二のものは約一千九百圓第三中のもので重なるものは不用物の賣却代と小學校の授業料で一萬四千七百圓に達する。最後の第四のものは、國庫及び縣稅交附金、寄附金、補助金を合したたもので、五千圓計りある。之に前年度の繰越金八千三百十圓餘と公債金五千圓とを加へた總計は、十萬四千九百五十八圓で之が今年度の總收入である。さて此の歳入は如何なる方面に如何に支出せられるかといふに、役所費として一萬七千圓、教育費として三萬三千六百圓、衛

生費として六千四百圓、返償金として二千五百圓、警備費として四百六十圓、土木費として一千圓、會議費として六百三十二圓、勸業費として三百四十七圓、雜支出として一千三百四十圓、豫備費として一千三百三十圓、財産編入金として四千四百九十圓、即ち總額六萬九千二百五十圓餘が支出せられるのである。以上の中で最高額の支出は教育費で、割合からいつても經常費の五割強に當つてゐる。この一事に徴しても松山市が如何に教育事業に熱心であるかいはわかる。役所費を除いて次に位するものは衛生費である。それから勸業費が昨年度に比して三倍以上も増額したのは、市の商工業が如何に急速の進歩をなしてゐるかを證するに足る。

更に臨時費に於ても總額三萬五千七百八圓餘の中、一萬圓を教育費に七千圓を衛生費に當ててゐる。即ち兩者を合して殆んど其半を占めてゐる。其結果、教育の側に於ては學齡兒童百人に就き就學者九八、〇二といふ成績を示してゐる。(以上明治四十一年度現在の豫算に依る)

### 市の教育

中等教育の機關として公立私立を合せて十幾個の學校を有してゐる。即ち公立學校には、愛媛縣立師範學校、愛媛縣立松山中學校、愛媛縣立商業學校、愛媛縣立農業學校があつて別に私立中學校として北豫中學校がある。

更に女子の教育機關としては、愛媛縣立松山高等女學校を始め、私立女學校には勝山高等女學校、松山女學校、愛媛實科女學校、松山技藝女學校、崇徳女學校、實用裁縫女學校がある。僅に一市街にして、かかる多數の學校を有する點に徴しても如何に松山市が教育事業に熱心銳意せるかがわかる。

次に小學校は、市立として松山高等小學校と第一第二第三第四の尋常小學校とがある。其他私立の特種學校には、松山夜學校、同情館、女子夜學校、愛媛盲聾學校、愛媛教育協會教員養成所がある。私立の幼稚園には松山幼稚園、常盤幼稚園がある。

官 衙 會 社

圖書館として、愛媛教育協會の圖書館が二番町にあつて一般公衆の閲覧に供する。

- 松山聯隊區司令部 (堀の内)
- 歩兵第二十二聯隊
- 松山市役所 (出淵町二丁目)
- 松山地方裁判所 (一番町)
- 松山區裁判所
- 專賣局松山製造所
- 專賣局池田收納所松山出張所 (出淵町)
- 愛媛農工銀行 (二番町)
- 松山商業銀行 (末廣町)
- 松山商業銀行支店 (本町)
- 愛媛縣廳 (一番町)
- 縣會議事堂 (一番町)
- 松山郵便局 (三番町)
- 松山稅務署 (萱町三丁目)
- 松山警察署 (出淵町)
- 溫泉郡役所 (榎町)
- 愛媛縣立病院 (小唐人町)
- 五十二銀行 (三番町)
- 伊豫農業銀行 (紙屋町)
- 伊豫農業銀行支店 (港町)

- 松山貯蓄銀行 (三番町)
- 大野銀行 (港町)
- 伊豫鐵道株式會社 (久保町)
- 松山織物株式會社 (松前町)
- 松山醬油株式會社 (松前町)
- 松山米穀取引所 (末廣町)
- 海南新聞社 (小唐人町二丁目)
- 伊豫日日新聞社 (西堀端)
- 仲田銀行 (本町)
- 伊豫水力電氣株式會社 (三番町)
- 松山紡績株式會社 (味酒)
- 松山電氣軌道株式會社 (一番町)
- 伊豫電力織布株式會社 (南江戸)
- 伊豫織物改良同業組合 (紙屋町)
- 愛媛新報社 (港町四丁目)

神 社 寺 院

- 阿沼美神社 (宮古町に在りて地方の氏神である。縣社であつて毎年十月六七日の兩日祭典を擧げる。)
- 東雲神社 (城山東北中腹に在つて舊藩主久松家の祖先、桑名の少將定勝を祀る。社)

前には櫻樹があり、遙に道後公園と相對して景色がよい。又春秋二季に能樂の催しがある。大祭は四月の十七八の兩日、日清戰役紀念碑は社段の下に在る。

地うたひの人並びたる裕せかな  
子規

井手神社 縣社であつて立花町に在る。矢張地方の氏神で祭典は毎年十月六七の兩

日に行はれる。境内に又天神を合せ祀つて居る。毎年舊曆六月二十五日には盛なる祭

典がある。

大法寺 日蓮宗、魚町五丁目に在る。

大林寺 宮古町に在る。舊松山藩主久松家の菩提所であつて、西山を背景にした庭

園は殊に美しい。有名な河野備後守通純の墳墓は此所に在る。又日露戰役の際旅順の

捕虜は第一に此寺に收容せられたのである。

圓光寺 眞宗寺であつて百年前に明月と云ふ有名な僧が居た。門は明月が建てると

ころで今尙存してゐる。

港町圓光寺明月和尚百年忌

風呂吹を喰ひに浮世へ百年目  
子規

妙清寺 日蓮宗、出淵町二丁目に在る。こゝも俘虜收容所であつた。

善勝寺 淨土宗、辨天町にあつて松山驛前にある。日切地藏尊が安置してあつて參

詣者絶ゆる時がない。

正宗寺 臨濟宗、末廣町一丁目に在る。有名な正岡子規の碑がある。こゝも戰役中

俘虜收容所であつた。

法龍寺 曹洞宗、同上の町に在る。

ハリストス教會 一番町に在る。平和克復後俘虜であつた露人の寄附で亡者の爲め

にニコライの建設したものである。建築は頗る宏壯を極めて居る。

メソヂスト教會 二番町に在る。

基督教會 小唐人町に在る。松山市にある基督教會の嚆矢である。

松山附近の名所

石手寺

道後驛より七丁

道後村大字石手に在る。境内の三重の塔は神龜五年この寺

の創建せられた時から残つて居るものである。其他の伽藍、鐘樓、仁王門等いづれも古雅で特別保護建物となつてゐる。四國巡拜五十一番の札所であつて世俗の信仰が非常に篤く參詣者は常に堂に満ちて線香の煙は何時も絶えない。

接待の札所や札の打ち納め

子規

山越

木屋町驛より五丁

ここには長建、不退、法華、來迎、淨福、龍穩、弘願、天

德、東榮、千秋、龍泰、御幸の十二寺である。中にも長建寺は日清戦役の際捕虜收容した所で、庭園は中々趣きがある。藤の花や躑躅の花の時節には雅客の筈を曳くものが多い又收容中病歿した露兵の爲め、山の一角に立派な墓碑が設けられた。

十六日櫻

松山の北三丁餘りの山越櫻谷に在る。舊正月の十六日には必ず花が咲

くので其名が遠近にかくれない。此櫻の由來に就ては興味ある口碑が傳つてゐる。詳しい事は下に掲げた十六日櫻碑文を見ればわかる。永く荆棘の間に捨てられてゐたのを、明治十一年有志の人々が樹の周圍に石垣をめぐらし、碑石を建てた。其後に至つ

て更に保存の方法を講じ、新に石垣を設け、道路の改修をしたので見物人が群集するやうになつた。左に十六日櫻碑文を掲げる。

いつの世の事にかありけむ伊豫國和氣の郡山越の里に名を吉平とよぶいとまめまめしき民ありけり年老て家名を其子に譲り已れば草の庵に起伏して花を樂み月を憐むの外なかりしに一年正月の始め此翁病の床に打ふして今は浮世にながらへむ程も覺束なく思ひなざる、餘り家人らに語りて言へらく我病俄かに篤しくなりぬ齡既に八十にあまればいつ世を過むも露恨ならずといへども只口惜しきは庭の櫻の咲出む今年の春を待ち得ずしてよみぢにたむむことの悲しさよと涙かきたれなげきければ世つきの吉平是れなきやがて庭に在りたる櫻に向ひぬかづきていへらくや櫻よ心あらば父の此世におはする程におはれ咲出て見せ奉れよかし天地に神はまさじかわが願ふ願を今宵充て給へといのり祈りてあかしけるに雪まだ寒き櫻の梢にさしのぼる朝日と共に匂ひ出でたる花の色香のうるほしき事いふべくもあらざりけらし櫻やこゝるありけむ神や助け給ひけむわが願こそ叶ひ侍れとふしたる翁をよび起して脊に負ひつゝもとなちめぐるに翁が歎び喩へんに物なし終には重き病をさへ忘れ再び世にながらへたりしとなむ言ひ傳ふる昔より親に事ふる孝心の深き天地の神もあはれと見そなはしていと妙なることのあるが中にもわきて目出度きは此花のいひの傳へになんありけるさるは花孝子の願をうけひきしだにあるをそれを例に年ごころの睦月十日まり六日の日はかならず花さき出づること千とせの今にかはる事なきは奇しとくすしき櫻ならずやかればなべてならず珍らしきなもてあそび今も尙ちかきあたりのみやびなら木かげにつとひてこれをめづるも年あるないとくはるけき大御代には

かしこしともかしこきおほむ

帝のものよつひでに玉の御輿をだによせさせ給ひてあはれ寂感まし／＼けむも皆これ孝子の傳世に名たかき  
績になんありけるかよるくすしき故よしある事な間かむ人は孝子の心を心にくみて涙に袖をしぼらざらめや  
昔を今に忍ばざらめやしがあるに其櫻も年を経て老ひくち其傳へも共にうせはて霜おく草の跡なくなりゆか  
む事を惜み同じ心の人々ら力を合せて其根に培ひうなひ千どもの戯にも枝は折らせし柴こる童が利録にも傷  
はしめじとてあたりには石垣をさへめぐらし其事のあらましを石に彫りてかく物するは明治十一年一月十六日  
なり歌曰

つくしけむ人のまことをにははせて

咲くかむ月のほつきくらばな

題 額

從五位大教正

千 家 尊 福

孝子櫻の碑文

明治三十九年一月建碑

此地爲ニ往昔孝子感レ櫻之處ニ也世故桑滄一旦爲ニ官設ニ且爲ニ樵夫牧豎所レ侵殆將レ歸ニ  
荒廢ニ其後官貨レ之山本君盛信恤ニ其名跡湮滅ニ喜而購レ之屬ニ諸我等ニ以圖ニ永存ニ余大  
嘉ニ其美舉ニ因募ニ同志ニ求ニ贊助ニ遂得ニ許多義捐者ニ且村人亦奔走頗有レ所竭焉乃誅ニ

穢草ニ斬ニ惡木ニ鏟ニ高垣ニ卑以闢ニ後路ニ更栽ニ櫻梅數株ニ環以ニ石欄ニ工告レ竣適會ニ征露  
凱旋ニ乃併ニ其紀念ニ勤ニ義損者氏名ニ建レ碑以表レ之

不退寺座主 長谷川良藏識

●●●●● 松山市の南十丁温泉郡石井村に在る。平坦な田圃の中に數個の小丘が龜の  
脊のやうに蹲つてゐる。里人は五つが森と呼んでゐる。いづれも遠近の眺望がよい。  
元弘三年閏二月、後醍醐天皇船上山に據り給ふた時、河野の一族、土居通治、得能通  
言の二人が義兵を擧げて、西海から戦艦三百餘艘を率ゐて攻め來た北條時直の大軍を  
打破つた古戦場、山上には表忠碑が建ててあつて、松風の音今も尙昔を語つてゐる。

### 松山附近の名邑

松山市を要として開いた扇は、東に道後、西に三津高濱、南に郡中の扇骨を形造る。  
松山市を説いた後には自ら是等の町に就て語る必要がある。

道 後



道後は松山市の東北十餘丁のところにある。戸數五百餘、人口二千餘、有名な温泉の  
あるところで各處から集り来る浴客が非常に多い。町の東端には松ヶ枝町と言つて遊  
廓が二十四軒ある。道後温泉は、歴史の由緒あること、湧き出る湯の清いこと、  
更に建物の宏壯な點に於て、日本國中殆んど其比を見ない。道後驛から二丁の處にあ  
る。神代では大己貴、少名彥命のとき既に民をして浴せしめたと言傳へて居る。降つ  
て孝靈、景行、仲哀、舒明、齊明、天智、天武諸帝の行幸もあり、又聖德太子の行啓  
もあつたらしい。碑を伊佐庭の岡に建て給ふたことが歴史に傳はつて居る。近くは明  
治三十六年皇太子殿下の行啓あり其前後皇族方も度々御出になつて居る。  
温泉 温泉浴場は靈の湯(男女二室)、神の湯(男女三室)、養生湯(男女二室)にわ  
かれてゐる。浴室には二階三階の設けがあつて、茶菓等を饗するやうになつて居る。  
殊に神の湯の三階には浴客倶楽部の設けがあつて、揚弓、碁盤其他遊技の具が備へて  
ある。浴槽は何れも花崗石造り、湯は絶へず湯口から流れ落ち、温度は人體に適し且  
つ極めて清潔透明である。醫治効能の著しい事は廣く世人の知る通りであるが左に其

試験成績表を掲げておく。

温泉の試験成績及醫治効能

靈の湯

一 理學的性質

- (一) 温度 攝氏四十五度八、氣壓七五七、氣温一九、九
- (二) 外觀 淡黄色を帯び殆んど透明なり。
- (三) 臭味 極微の異臭を有し收味を帯ぶ。
- (四) 比重 一、〇〇二七(攝氏一五、〇)

二 化學的性質

- (一) 反應 亞爾加里性
- (二) 蒸發残渣 七八、九八五
- (三) 酸素消費 五、八六五
- (四) 成分 化學的原則に據り結合せしめたるもの

硫酸那篤留膜  
 格魯兒那篤留膜  
 硫酸加爾留膜

一八、九九三  
 一六、三二八  
 一三、五二二

炭酸加留謨	七、四二七
硫酸那篤留謨	一、二、八五六
硫酸麻留謨	五、二九七
重碳酸那篤留謨	二、〇六五
煖酸加爾叟謨	一、三四〇
硼酸那篤留謨	一、一六二
游離及半飽和炭酸	五、九八七
亞酸鐵	少量
硝酸	痕跡

合計

◎醫治効能 (内服外用)

- 第一 貧血症、慢性腸胃加答兒、慢性癱瘓質斯及胸膜炎、肋膜炎、心臟の諸病、皮膚病、
  - 第二 神經衰弱症、諸種の肺病、氣管支加答兒、男女生殖器諸病、貧血より來る腦の諸病、
- 神湯第一第二第三室
- 一 本泉理學的性質 (略す)
  - 二 本泉化學的性質 (略す)
- ◎醫治効能 (内服外用)

- 第一 慢性癱瘓質斯及痛風、慢性肋膜炎及腹膜炎、貧血症、腺病、皮膚の慢性炎症、
  - 第二 慢性腎炎及膀胱加答兒、婦人生殖器の慢性諸病、神經衰弱症、歇私的里、重病後の恢復期、下痢症、
- 養生湯第五第六室

- 一 本泉理學的性質 (略す)
  - 二 本泉化學的性質 (略す)
- ◎醫治効能 (内服外用)
- 第一 慢性胃加答兒及慢性腸加答兒、下腸充血、肝臟充血、貧血、萎黃病肺炎及胸膜炎、喘息、
  - 第二 喉頭咽頭の慢性加答兒、慢性氣管支加答兒、一般神經病、痔疾、腺病、梅毒性諸病、子宮炎、便秘
- まつ湯

- 一 本泉理學的性質 (略す)
  - 二 本泉化學的性質 (略す)
- ◎醫治効能

- 第一 梅毒、疥癬、疥癬其他慢性皮膚病、癩病、腺病、軟下疳、硬下疳
  - 第二 多血症、五痔症、肥胖病、尿道膀胱及腎盂の加答兒、子宮腫脹、水腫病、黃疸病、
- △まつ湯は決して内服すべからず

入浴の注意

- 一 入浴は一日三四度を適度とすれども老人及衰弱者は一度又は半身浴脚湯をなす方安心なり

- 一 入浴時間は大抵十五分より二十分以内を適度とす
- 一 出浴の後は能く身體を拭ふべし
- 一 食後直に入浴するは宜しからず
- 一 裸體にて風の吹く處に居るは宜しからず
- 一 湯口にて清湯にかゝるは順番にて一度に二分間を過ぎざるべし

温泉碑 この碑は、昔厩戸皇子か温泉へ行啓なされた時、建て給ふたものであるが、いつの頃からか埋没して見えなくなつた。碑文は續日本紀に見えてゐる。文に曰く

法興六年十月歲在丙辰、我法王大王與惠總法師及葛城臣、遣遙夷與村正觀神井、歎世妙驗、欲叙意聊作碑文一首、惟夫日月照於上、而不私神井出於下、無不給萬機所、以妙應百姓所、以潜扇若乃照給無偏私何異、于壽國隨華臺而開合沐、神井而瘞疹詎升于浴、花池而化溺、窺望山岳之巖嶠、反冀子平之能往、椿樹相蔭而寫、篠實相五百之張蓋、臨朝啼鳥而戲、吐下一何曉、亂音之聒耳、丹花卷葉映照玉菓珍葩、以垂井經、過其下、可優遊、豈悟洪灌霽庭意、與才拙實慚、七步、後定君子幸無虫吟也

(法興舊本作弘興)

旅館 旅館は同盟の上専ら旅客の便利を計つて居る。重なる旅館は、鮎屋、茶金、梅木、村兵、大和屋、濱庄、川吉、三浦、野本、白石屋、岩井屋、常磐旅館、島屋、門半、等で、皆温泉場の附近にある。

物産 重なる物産は、扶桑木彫刻品、湯晒艾、道後煎餅、湯栴節、五色素麵などである。

道後公園 道後驛より一丁 建武年中河野通治の築いた湯月城をば、天正年中小早川隆景が攻め落した。以後荒れはて、竹藪となつてゐたのを近年伐り拓いて公園にしたのである。昔の名残の外濠と内濠は今も尚、二重に繞りて周圍は凡そ五百間ある。山には一面四季折々の花樹が植えてある。山に登ると、三方に平野が開けて遙に松山の城下に對し、更に遠く三津沖の小富士(興居島)を望むことが出来る。山の下には馬場があつて、運動會、競馬などに適して居る。中腹の平地に在る北方の四阿は曾て東宮殿下の御休息があつた處で、其傍には殿下御思召の紀念松がある。園内には聚樂館、風詠

館其他の建物があつて貸席などもある。  
水草の花まだ白し秋の風

子規

道後附近の名所

伊佐爾波神社 道後驛より二丁 昔仲哀天皇が神功皇后と共に温泉へ行幸のあつた舊跡である。神社のある湯月谷御假屋は石壇を登ること百二十級、境内廣く老樹鬱蒼としてゐる。本殿には比賣大神、中殿には應神天皇、左殿には仲哀天皇、右殿には神功皇后が祀つてある。今の殿は寛文七年石清水八幡に倣ひて、飛驒の良匠を招いて改築せしめたものである。千六百年を経た舊社で延喜式内温泉郡四社の一つである。寶物には四帝一后の宸翰、信宗皇帝の額等である。  
鷺谷寺 道後十六谷の内鷺谷と云ふ所にある。麓に鷺の井といふ名泉がある。傳説によると、昔温泉の湧き出した時、脚が片輪になつた鷺が常に茲へ來ては脚を浸してゐたが、幾程もなく平癒したので飛去つたとのことである。寺は廢絶してしまつた。

鴉溪(新紅葉) 道後驛より二丁 道後十六谷中最も名高い勝地だ。天保年中松山の藩士大高坂舍人が此地を拓いて亭を設け、五清淨室と呼び自ら樂んで居つたといふ事であるが、今は河畔の丘上に澤山小亭が出来て、清流が潺湲と緑林を縫ふて流れてゐる。花月樓其他の旗亭がある。

義安寺 道後驛より四丁 道後村字戒能に在る。天文八年河野彦四郎義安の建立した寺で螢の名所。

岩腹 道後驛より十丁 石手を出で東に距る二丁の處にある。奇岩怪石に激して奔流する水は、或は泄へ、或は道巻き、響々として萬鼓を亂れうつやうである。

湧ヶ淵 道後驛より一里半 岩堰から一里餘を遡つた、石手川の上流、温泉郡湯山村大字末に在る。雲を呼ぶ奇岩は高低参差として其上に老松が蟠つてゐる。碧玉をのべたやうな淵は忽ち珠簾の飛瀑となつて適まに落下する。快絶奇絶の状は言語に絶する程である。この水力を利用して電氣を起し、松山、三津、高濱、道後に電燈を點じ又機械力を供給して居る。

この外に尚、温泉の開基大巳貴、少彦名命を祀れる湯神社、一遍上人の生れた寶嚴寺、景行天皇の行宮跡等がある。

高濱

松山市を距る西一里、伊豫鐵道高濱線の起點のある處は即ち高濱港である。伊豫の小富士の名ある興居島は、直ぐ眼の前に横はつてゐる。後には松山を負ひ、海上には四十島とか九十九島とか、繪のやふな小さな島が浮んでゐる。港内は水が深いから、風波の憂は更にない、船舶の寄泊には極めて便利な港である。港内には南と北に二つの棧橋があつて、汽船は皆爰へ横附けにする。それ故乗降は至つて安全である。大阪商船株式會社其他の各船は皆支店や代理店をおいてゐる。船客無料待合所其他種々の設備は充分に整てゐる。海陸連絡の便に於ては、我國でも稀な所である。それ故近來此地に移住するもの益々多きを加へて、今や縣下第一の要港となつた。旅館料理屋では城戸屋別館、新玉樓、小富士亭、有信館、東雲亭等が就中有名で、海水浴場としても

遊覽地としても、實に有數の地である。尚、魚市場及び果物市場がある。

高濱十勝

高濱虚子選

埠頭の網引

四十島の落潮

白石の漁舟

興居島の燈火

太山寺の仰望

新荊屋の漁村

魚市の白砂

棧橋の波濤

波上の夕焼

蛭子神社の小幟

薰風や裸の上

松の影

梅津寺濱 少さい丘を一つ越えて南は、海水浴場として名高い梅津寺濱である。砂

白く、松青く、前には、鏡の如き海を控えてゐる。海水浴客のために設けた休憩所を

始め各種の運動遊戯の器械が設けてある。非常に賑かだ。

貝のつきし岩

あらはるる沙干哉

子規

興居島海上西二十丁

高濱の前面に横はつて居る島で、伊豫の小富士の稱がある。人口

は約一千餘、泊は島中で尤も賑かな處だ。昔宇都宮の餘黨が數代住んでゐたことである。全島桃と林檎を栽培してゐる。收穫も多ければ、花の時分は、極めて美しい泊の山上には嚴島神社がある。

長師の濱 高濱の北西の東中島にある濱で、白砂青松遠く連つてゐる様は舞子の濱に似て居る。興福寺、三島神社等がある。

太山寺 高濱驛より北東十丁

天平十一年僧行基が聖武帝の勅命を奉じて建立した寺で、

温泉郡和氣村の太山寺山に在る。豊後國の眞野長者といふものが近海を航行して居る時分暴風に遭ふて此寺に祈願を籠め、大伽藍を建立した。其が現在の堂宇で一千三百餘年の星霜を経てゐる。拾間四面の本堂は一も貫楔を用ゐてゐない稀有の建物で、今は官から特に保存費が下つて居る。尚行基自作の十一面觀音と弘法大師の大門の額面とは共に有名なものである。四國靈場五十二番の札所で參拜者の絶えた事がない。

蒟蒻につゝじの名あれ 太山寺 子規

三津濱

三津濱は縣下第一の古い要港で、高濱港と相俟つて、瀬戸内海往來の通路に當つてゐる。戸數二千五百、人口壹萬、貨物は常に輻輳して商業頗る盛んである。物産には竹細工、二名煮等が尤も有名である。

官衝公署會社(三津驛よりの距離を示す)

警察署	榮町(六丁)	三津濱銀行	三穗町(七丁)
町役場	新町(四丁)	五十二銀行支店	三穗町(六丁)
魚市會社	榮町(八丁)	煉化製造所	御釜場(九丁)
海務署	榮町(六丁)	郵便局	榮町(五丁)
鹽務官署	新地(七丁)		

朝市 三津驛の西北八丁に魚市場がある。毎朝爰に集つて來る漁師、肴賣りは何百人といふ數で、近海の肴は皆一應爰に集まつて、それから、松山、道後其他附近の各地方に送らるのである。船に積んで縣外に輸出するものも少くない。町内唯一の

盛観で、魚市場としては關西第一の稱がある。元和二年に創立されたとのこと。

魚市に魚の少ない餘寒かな 子規

烈女松江の墓西南十丁 松江は隣瀆大洲の浪士井の口瀬兵衛の女である。文化十年或無頼漢の爲めに辱められんとした時、織手よく之と闘ふて其男を殺し、自分は父の刃に伏した。時人之を大加賀の地に葬つて縁切り佛と崇め、今に至る迄尙香花の絶ゆる事が無い。碑は松山婦人松操會で建設したのである。

郡中

郡中町は松山を距る六哩餘、北豫海岸の名邑で、湊町、灘町の二區に分かれ、伊豫低陶器、砂糖、米、材木等の物産が輻湊するので商業は盛である。港には船舶の出入繁く、海陸共に運輸交通の便尠なくない。郡役所、町役場、警察署、會社、銀行等がつて戸數は一千餘。旅館などの設備も整つてゐる。

彩濱館西南五丁 町の西端松林の中に在る。松青く沙白く、前は一望際涯なき海原で遠

く白鷗の飛びかふのが見える。彩濱館の名は此邊を五彩の濱といふから出たのである。炎暑の候來り遊ぶものが最も多い。館は貸席を業として有志の建設する所である。

源範頼墓 郡中村大字上吾川字十合に在る。以前五層の石碑があつたといふことだが今はない。附近に侍者の墓十六七基ある。範頼が頼朝の爲めに死を命せられた時爰まで逃げて來たといひ傳へて居る。

後藤又兵衛基次之墓 南伊豫村大字宮の下長泉寺の北にある。長泉寺の住職は又兵衛の伯父であつたが、基次大阪落城の後此地に來て死んだものともいひ、又は臣下が其首級を携へて來て此寺に葬つたものともいふ。

伊豫鐵道

幹線

高濱驛起點、公衆電報を取扱ふ、連絡切符を發賣す 高濱港は松山を去ること五哩四十九鎖である。

●三津驛 高濱より一哩四十九鎖、連絡切符を發賣す 温泉郡古三津村に在る。丁度三津市街の東端に當つて居る。

●古町驛 高濱より四哩四十四鎖、連絡切符を發賣す、公衆電報を取扱ふ、途中下車驛 松山市の西北の入口になつて居る。此驛は道後線に接続する所で道後線に行く人は皆此處で乗り換へるのである。古町方面へ行かうと思ふ人は此驛から乗降するのが便だ。

●松山驛 高濱より五哩四十九鎖、途中下車驛連絡切符を發賣す 松山市港町に在つて伊豫鐵道の本社は此所にある。道後を除いた他の四線は皆此驛に集まるのである。

●立花驛 高濱より六哩三十七鎖、途中下車驛 松山市の東南、土佐街道の入口に在る。温泉郡素鷲村大字立花に屬して居るが殆んど松山市と連つて居て、軌道は爰から二條に分れて、東方横河原に向ふものは本線、南方森松に向ふものは森松線である。

●久米驛 高濱より八哩四十一鎖 温泉郡久米村大字南久米に在る。一寸した市街で附近には日尾八幡神社、淨土寺、西林寺等の名所がある。

●平井驛 高濱より九哩七十五鎖、公衆電報を取扱ふ 温泉郡小野村大字新屋に在る。こゝから東

南の山々には澤山の松茸を産する。中にも津吉上村は最も著名である。尙これ等の松茸山へは次の田窪驛からも行ける。

茸狩や浅き山々女連れ 子規

●田窪驛 高濱より十一哩六十七鎖 温泉郡南吉井村大字牛淵に在る。附近には播磨塚、香積寺、齋藤別當乃墓、浮島神社等の名所がある。

●横河原驛 高濱より十三哩六十七鎖、公衆電報を取扱ふ 温泉郡北吉井村大字志津川に在る。本

線の終點で讃岐街道に沿ふて伊豫の東部へ往復する關門である。此驛から重信川を渡つて十八丁行くと川上へ出る。川上はこの街道筋の宿驛で、商家なども澤山ある。更に東に進むと所謂櫻三里と呼ぶ坂路にかゝるのであるが、今では立派な街道が出来たので、腕車が自由に通ずるやうになつた。櫻三里は溪流に沿ふた坂路で、路の兩傍には櫻の樹があつて、山水の景、頗る見るべきものがある。坂を通り抜けるとやがて來見、大頭の諸邑を歴て小松町、西條町に達するのである。近傍の名所としては惣河内神社、金毘羅寺、などがあるが、殊に白猪唐岬の二瀑布は尤も名が高い。驛を去る東



南二里の山中に在つて、櫻によく、紅葉によく、夏は涼を探る觀瀑の客が常に絶ゆる事がない。白猪は前に在つて高さ四十八間(五段)幅、廣き所にて十八間。唐岬は奥に在つて高さ五十二間(九段)幅、廣き所にて十二間ある。

森松線

石井驛立花驛より一哩二十六鐵 温泉郡石井村大字居相に在る。松山驛を發した汽車は立花驛を過ぎて此驛へ着く。史上に名高い天山や星か岡は何れも此驛の附近にある。尙、俗に椿森といつて伊豫豆比古命を祭れる有名な神社がある。

森松驛立花驛より二哩六十三鐵、公衆電報を取扱ふ、温泉郡浮穴村森松に在る。土佐街道に沿ふてゐて、南方久萬山或は砥部方面に行くのには此驛からするのである。久萬山附近は奇勝の地に富むで居る。菅生山の杉の森、岩屋寺の巨岩、羅漢穴の鐘乳洞の類人目を驚かすに足る。又此地方は産物に富み、材木、茶、紙、椎茸、伊豫麩等最も著名なものである。森松驛を距る南方一里の伊豫砥部村に砥部陶器物がある。驛の南一丁

計りの所に、重信川が流れゐて、兩岸の風景善く又鮎が名産である。

郡中線

余戸驛松山より二哩十一鐵 松山市の西南方面に當り、温泉郡余土村大字余戸に在る。此附近の地は著名な緋燕の産地である。沓脱天満宮、勅使橋、瑞應寺等の名所は皆この附近にある。それから、伊豫緋の産地として有名な今出は、こゝから西の方十丁の垣生村の海岸にある。昔菅公が筑紫へ流謫の途すがら、此地を發する時、敬ひ親しんで居つた村の老幼は深く別れを惜んだ。菅公も今此地を出れば何れの日にも再會せうと同じく別れを惜まれた。其言葉に因んで地名を今出と呼ぶやうになつたのである。國內第一の物産である伊豫緋は、もと此地に始まるので、今より百年前此地の鍵谷カナといふ婦人が始めて織り出したのである。伊豫緋を一名今出緋といふのも此爲である。

出合驛松山より三哩八鐵 伊豫郡岡田村大字西高柳に在つて重信川の西南岸に位して居

る。出合河原は石手川と重川信との出合つてゐるところで、兩岸には松林が帯を爲して遙に海に向つて走つて居る。河原を横ぎつて伊豫鐵道の鐵橋は長蛇の如く懸つて居る。夏時の納涼と月夜の清賞には尤も適した場所である。殊に四五月の候には香魚釣りによい。

若鮎の二手になりて上りけり 子規

●松前驛 松山より四哩七十五鎖、公衆電報を取扱ふ、伊豫郡松前村大字濱に在る。松前港は西二丁の處に在る。戸數八百餘、重もに漁りを業として居る。土地の風、男子は海で漁りを爲し、女子は魚を桶に盛り之を頭に戴いて松山其他近傍の地から二十里もある處迄賣りに行く。是等の女子を松前の賣魚婦といつて、頗る有名なものである。其頭に戴いて居る桶を五郎櫃と稱へる。港は漁利の外、地方物産の輸出多く、常に船舶が輻輳して居る。それから松前城は慶長七年に加藤左馬助嘉明が取り毀つて全く松山へ移した爲め今は城址が田圃の中に存する許りである。次に有名な義農作兵衛の墓は驛を距る北三丁の處にある。享保十七年の饑饉に作兵衛といふ百姓が麥一俵を枕にして俄

死した。死ぬる前に人々が其麥を食ふ事を勸めたけれど、之を食ふたらこの村に麥の種が無くなるといつて終に食はずに死んだ。其爲め翌年麥の種に事を關かなかつた。時の藩主之を聞いて碑を建て義農の墓と刻した。明治十四年になつて義農神社を建てて之を祭るやうになつた。松前村大字筒井に在る。

●地藏驛 松山より五哩二十九鎖 伊豫郡松前村大字南黒田に在る停車場である。牛子ヶ原

といふのは左右の松原で、舊松山藩、大洲藩の境界を爲して居る。罪人は此地を境にして追放したものである。

●郡中驛 松山より六哩五十六鎖 伊豫郡中村大字下吾川に在る。郡中線の終點である。町は停車場を下りてすぐである。

道後線

●木屋町驛 古町驛より五十三鎖、途中下車驛 温泉郡朝美村大字味酒に在る。松山市の入口で木屋町に接するので此名がある。堀江風早地方から陸路今治町へ行く要路で松山市の

北門である。練兵場、北豫中學校に近い。  
 道後驛古町驛より二哩八鎮、途中下車驛、公衆電報を取扱ふ、道後湯の町の入口に在る。温泉場へは僅かに三丁、其他公園を始め名所舊跡は此驛から餘り遠くない。  
 一番町驛古町驛から三哩二十二鎮 松山市一番町に接し、市から道後へ行く要路に當つて居る。大街道(小唐人町)一番町二番町等に近い。又市の東北部から三津高濱へ往復するのは此驛によるのが便利である。

伊豫鐵道沿線十二景

井手 眞 掉 選

小富士の夕照 四十嶋の孤松  
 高濱の百千船 梅津寺の湖浴  
 江戸山の姥櫻 松山城の晚霞  
 湯築岡の鐵泉 星岡の古戰場  
 小野谷の梨花 中野原の楓葉  
 重信川の秋月 彩濱館の眞砂

伊豫鐵道十二勝

村上 霽 月 選

奥居嶋の舟遊 梅津寺の海水浴  
 西山の野遊 城山の雪見  
 拓堤の散步 道後の入湯  
 公園の花見 出合の月見  
 彩濱の納涼 小野の紅葉見  
 森松の鮎釣 津吉の蟹持

伊豫鐵道唱歌

(大和田建樹作)

- 一、名も常磐なる松山の  
市街を中に取り巻きて  
葛の如く縦横に  
蔓さし延ばす伊豫鐵道
- 二、先づ乗り出だす高濱の  
港の海の朝げしき  
船を押して連れて出で、行く  
船は落葉か笹の葉か
- 三、波なき水に影ひたす  
伊豫の小富士の奥居島は  
桃の産地の名も高く
- 四、夏は賑はふ汐あみの  
客もて埋む梅津寺  
過ぐればこゝぞ朝毎に  
魚市ひらくる三津が濱
- 五、濱の松原はや跡に  
なりて迎ふる古町驛  
まちかく仰ぐ勝山の  
城に昔ぞ忍ばるゝ
- 六、伊豫鐵道の本社ある  
松山驛の近くには  
役所兵營女學校  
出で入る列車の數繁し

七、間もなく渡る石手川

左右の廣き堤には

枝さしかはす木々高く

さながら自然の公園地

八、立花出で、久米の驛

名高き神社佛閣は

日尾の八幡三藏院

四國靈場西林寺

九、送り迎ふる程もなく

平井田窪打ち過ぎて

片手の薬師浮島の

社も跡になりにけり

一〇、津吉上村松茸の

産地とかねて音に聞く

處はあれぞあの山ぞ

秋は来て見ん打ち連れて

二、終點驛の横河原

おりて進めば讃岐道

夏白糸を繰り出だす

白猪唐岬瀧近し

三、立花驛に立ち戻り

森松線に乗り換へて

南に向へば星の岡

勤王義士の古戦場

三、椿の森に神さびて

祭られ給ふ伊豫豆比古

立つや石井の石鳥居

居ながらそれと拜み行く

一四、森松下るれば土佐街道

伊豫名産の一つなる

雪より白き砥部焼の

産地南に約一里

一五、郡中線は松山を

出で、余戸驛出合驛

余戸には履脱天神と

日招八幡名も高し

一六、出合は石手重信の

二流出で合ふ處にて

河原は白く水清く

青きは岸の松林

一七、夏は涼みに秋は月

柳の花の散る頃は

鮎釣る人の影見えて

景色ぞあかぬ四つの時

一八、松前の港賑はひて

妻も乙女も朝毎に

いたゞき出づる御用櫃

賣り行く魚は何魚ぞ

一九、松前の城は田の中に

埋れて跡も知らぬと

しるきは義農作兵衛の

譽れを残す墓處

二、砂糖の出づる地藏町

過ぎて下車する郡中の

濃は五色の名も高く

一望はてなきわたの原

三、名残は残れど松山に

歸りて城の西北を

古町木屋町打ち過ぎて

行けば道後の温泉場

三、代々の帝の大行幸

ありし歴史をいたゞきて

浴室清く町廣く

天下に知らるゝ湯の驗

三、浴後の散歩試むる

道後公園あたゝかに

春風木々を吹く時は

満山さくら満地雪

二、花の木の間に見渡せば

たゞ一幅の圖となりて

ながめやらるゝ松山市

あれ見よ三津も興居島も

三、湯の神社にも詣でたり

いざ又汽車に打ち乗りて

一番町に疾く行かん

約せし友も待つべきに

松山土産

松山道後を遊覧する旅客が、國への土産とすべきものは先づ左の如きものであらう。何れも松山土産として誇るに足るべきものである。

砥部陶器 製造場は伊豫郡砥部村に在る。安永年間大洲藩主加藤侯が其臣加藤三

郎兵衛に命じ伊豫砥石の屑で製造せしめたのが初まりで、文化年間向井源次郎といふ

人が、白石を用ゐて製法を改良し、爾後漸く發達して今日に至つたのである。現今は

主として淡黄磁器の製造をやつてゐる。従來は産出高も僅少であつたが、近來は聲價

頗る上つて地方有名の物産となつた。

伊豫絣 詳細は松山市の産業に盡してある。

五色素麵 絲のやうに細い素麵で、五色に染めてあるから非常に美しい。

竹細工 多く三津濱で作られる。一名お船手細工といつて、以前はお船手といふ船頭が内職にやつてゐたものである。頗る巧妙に出來てゐる。

二名貴と干海老 共に乾燥した一種の佃煮で風味は頗るよい。  
 此外まだ數へたてると種々あるが、是等は何れも市の商店で鬻いでゐる。  
 名物の次に松山の俗語を紹介する。松山の名所名物を巧に歌ひ込んで聲調又輕快圓轉、頗る聞くに足るものがある。

いよぶし

伊豫の松山名物名所、三津の朝市、道後の湯、音に名高き五色素麵、十六日の初櫻、  
 吉田さし桃、小若杜、高井の郷のていれぎや、紫井戸の片目鮎、薄墨櫻や緋の蕪、  
 ちよと伊豫緋。

松山名所づくし

さて目出度は松山の、氷とけなば山越の餅世櫻も咲きそめて、薫りも吉田のさし桃  
 や、見渡す伊豫の小富士山、浪に浮ぶや風早の、腰折山や善應寺、太山寺の御寺は、  
 眞野の長者が建て給ふ。さて又伊臺の御寺は薄墨櫻これ名所、古跡といひし江戸山  
 の、姥櫻とて今もなほ、枝葉榮へし松の色、佐々木の宮や保免の名も天満る勅使橋

こゝに今出と殘されて、建立ありし御寺は、玉の御殿の金蓮寺、光をのこす龍燈の、  
 松の榮ぞ目出度けれ、扱其後の賑ひは、花は櫻木人は武士、河野の城趾よしやすの、  
 文字を遺せし義安寺の石手の流れ前は川、爰に螢の名所あり、湯月の御社打過ぎて、  
 所鷺谷春は又櫻の林今こゝに紅葉の秋に異ならず、彼の唐土の菊の水、病を治する  
 効能は、ほとりに立てし玉の石、これを神代のしるしかや、誠に目出たう候ける。

# 松山市商工人名

(70)

松山案内

## イの部

印刷業 (活版)  
 住所 兼業 商號 氏名  
 榎町 銅、石版、筆、墨 向陽社 岡野 音彌  
 魚町二 銅、石版、筆、墨 福新 福田新十郎  
 榎町 石版 大竹 喜藏  
 石工  
 港町一 金錢貸付 鴻田 佐太郎  
 南八坂町 佐伯鐵工所 岡田 兵馬  
 唐人町二 高木や 豊田 季吉  
 鍛冶屋町 三原や 井上喜一郎  
 唐人町二 三宅 力

## 絲類

三番町 岡 吉隆  
 同 尾田 正太郎  
 魚町二 勝岡 茂市郎  
 港町二 井上 久吉  
 末廣町一 島屋 佐伯 久太郎  
 木屋町四 綿 坂井 大太郎  
 港町三 垂水 幾太郎  
 千船町 太田 雄三郎  
 港町二 越智 才三郎

## 口の部

蠟燭、油製造  
 泉 佐古川 慶次  
 米 平柏井 龍藏

## ハの部

(71) 附録

紙屋町 三原屋 井上 茂三郎  
 港町一 露口 幸次郎  
 唐人町三 山 萬 山本 萬次郎  
 港町四 家木 庄吉  
 同三 山本 菊太郎  
 末廣町二 加藤 安太郎  
 港町二 山本 菊太郎  
 同三 越智 萬次郎  
 小唐人町一 橋本 岩次  
 同三 須山 忠政  
 同二 露口 幾太郎  
 末廣町二 つるや 三好 夕カ  
 小唐人町一 一色 常七  
 港町三 東 梅 吉

## 二の部

辨天町 吉金 善次郎  
 木屋町五 種油 山本 卯太郎

## 木の部

三番町 脇島 信太郎  
 唐人町三 山下 熊藏  
 小唐人町一 牛皮 岡本 半次郎  
 同 野本 伊勢次  
 同二 井上 德太郎  
 港町二 田卷 千代吉

## 紡績

松山紡績株式會社

## トの部

陶器類

松山案内

三番町	樋口正義	藤原	河合金五郎
小唐人町一	洲之内又次郎	唐人町三	山本春五郎
港町四	井上萬助	辨天町	白石坂藏
同	高橋權平	唐人町二	重川信次郎
港町四	セメント石灰		
千船町	時計		
西堀端町	金錢貸付		
港町四	竹内了		
同	越智章		
三番町	眼鏡類		
千船町	わしや		
道後町	櫻田安次郎		
木屋町三	飯泉馬次郎		
荻町二	三好一義		
	大和ミツ		
	新海辰見		
	吉田藤十郎		
	田中熊太郎		
	松谷藤太郎		
	白方米五郎		
	陸軍用達		
	土木受負業		
	旅人宿		
	キドヤ		
	城戸民志		

チの部

茶類

三浦源十郎  
山下長太郎  
柏井ミツ  
友近彌平

リの部

陸軍用達

篠崎謙九郎

土木受負業

城戸民志

附録

魚町二	高知や	大岩萬次郎	港町二	八百春	井上ヒサ
港町四	對勝館	白石兵太	藤原	龜の井	龜井ジュウ
三番町	紀伊とく	紀伊マサ	港町二	味酒	河本伊作
同	日野辨	平野チカ	小唐人町二	魚類	戒野菊藏
港町四	久保豐	渡部桂三郎	魚町三	魚道	天野クマ
三番町	久保豐次郎	藤岡嘉喜生	末廣町二	みよしや	光岡ヒサ
小唐人町二	金子ツ子	叶世嘉一郎	板町		三好熊太郎
板町	久保田ツヤ	勝佐々木共同旅館合資會社	南京町		柴田清七郎
魚町二	梅のや	石川茂	小唐人町二		橋本格太郎
二番町	龜や	二宮禮三	一番町		宇和川周平
港町二	明治樓	岩田ハル	千船町		永井富五郎
三番町	松山俱樂部	武政卯之助	一番町		堺國一郎
二番町					伊澤春吉

ヲの部

公ナル周旋業

織物類



松前町五	魚町二	木屋町三	木町一	紙屋町	木町二	同 一	同 二	同 一	同 二	同 一	同 二	同 三	木町一	坂町二	南八坂町	春日町
(伊豫耕卸問屋)																
○イヨ	松山織物株式会社	玉井合名會社	田内機織所 販賣店	田内榮三郎	村上孝次郎	栗田卯三郎	綿 榮	室 吉	河 儀	龜 作	數 勘	室 常	野中彌三郎	河井市太郎	兼久元次郎	大西 熊吉
港町一	同	南八坂町	柳井町	魚町四	萱町二	松前町五	港町一	春日町	南八坂町	唐人町一	西町	松前町五	唐人町一	柳井町	北八坂町	同
小崎寅吉	吉岡道貫	口中寅之助	西原淺次	矢野菊次郎	松本寅吉	笹池新太郎	武井茂三郎	有馬菊太郎	玉井重清	池ノ内彌三郎	柳田音五郎	中野仲次	倉橋源七	和田榮太郎	久門準太	河野丑造

港町二	同 二	南八坂町	並町七	南八坂町	千船町	南江戸	千船町	港町二	松前町四
(木綿製造)									
酒井定次郎	竹内サダ	池内喜太郎	渡部勝次郎	河口芳治	柳瀬義迪	伊豫電力織布株式会社	二宮峰三郎	加藤房次郎	佐伯徳太郎
港町四	府中町三	港町三	河原町	榎町	魚町二	持田	水屋町五	唐人町三	同 二
(絹織製造)									
松原鶴次郎	後藤龜太郎	叶マサ	掛川屋	木原屋	向陽社	岡野音彌	福新	伊豫製紙合資會社	仲野政五郎
渡邊太平	福新	福田新十郎	丸	河合長次郎	黑田桃次郎	櫻井清與	中村忠隆	米屋世良然次郎	米周長坂信忠

ワの部  
綿  
力の部  
硝子類

紙類  
金物類  
形紙



ソの部

染物

西堀端町

末廣町二

港町二

小唐人町二

同

わしや

日吉屋

みよしや

昇鶴堂

鷲谷辰五郎

本田友次郎

湯山吉五郎

三好馬五郎

賀谷定吉

葬具類

河原町

木屋町五

孝摺機販賣

田村角太郎

村上儀十郎

三番町

府中町三

鉄製造

五色素麵

小西久次郎

桐田貞助

ツの部

漬物

三津口町

魚町三

港町四

薪炭

泉

中山正五郎

島本甚松

和泉仙太郎

ナの部

仲買業

(米穀仲買)

末廣町二

同

同

同

同

同

同

同

同

長島新三郎

大岩萬次郎

中野廣衛

大西源藏

田村政太郎

仲屋丑太郎

香川熊太郎

長谷部喜平

藤井道藏

末廣町一

同

同二

本町二

松前町五

萱町二

魚町三

萱町二

花崗町二

萱町一

(餅仲買)

むろかく

野中覺一

郷田藤次郎

藤田相次郎

高本喜太郎

永木源太郎

大塚金五郎

青野喜助

乗松良太郎

篠永城助

木村吾助

仲立業

(餅綿子ル)

本町二

末廣町二

天鶴

天野鶴十郎

宇坪彌太郎

ラの部

(米穀)

ウの部

魚類

雨堀端町

港町二

木屋町三

小唐人町二

餛飩蕎麥類

製粉販賣

味酒

久保町

千船町

松山停車場

古町停車場

ラム子製造

唐人町三

小唐人町一

皮革

鈴木秀助

宇佐美權平

菊地巳之作

龜屋

二宮禮三

山田梅太郎

和泉佐太郎

植木商

植政

植山政吉

運送業

同

同

伊豫鐵道株式會社

橋本爲次郎

松山荷捌所

古町荷捌所

内國通運株式會社

松山取引店

大阪商船株式會社

高松出張所

團扇製造  
 三番町 陶器上齒  
 魚町三 同引札  
 森柄竹三郎  
 宮川昌矣  
 小唐人町二  
 唐人町一  
 西堀端町 麴麴  
 花園町二 同  
 唐人町一  
 港町三  
 同四  
 小唐人町二  
 河原町  
 立花町  
 辨天町  
 小唐人町二 釣道具  
 紙屋町  
 蕨町五  
 末廣町二  
 小唐人町一  
 辨天町  
 豐國堂 坂本 虎吉  
 山重 山崎助次郎  
 田村 忠藏  
 越智 嘉一  
 茶 金 兒島龜太郎  
 中野元三郎  
 相原光太郎  
 百華堂 山内 龜吉  
 天野助三郎  
 白石 嘉市  
 大野 正雄  
 榊鏡宇三郎  
 崎山 卯七  
 古川 半次  
 友近林三郎  
 釣道具 渡部 キタ  
 森辰次郎

クの部

屑物

車 (自轉車)

菓子製造

松 山 案 内

唐人町一 古物  
 中村  
 唐人町三  
 前田竹次郎  
 田淵榮次郎  
 鈴木正次郎  
 村上芳五郎  
 夏井政秀  
 三好正春  
 岸節三郎  
 家木喜又

西堀端町 木屋町五 紙屋町 千船町 小唐人町三 府中町二  
 靴製造  
 三番町 皮革  
 三番町  
 出淵町  
 港町四 馬具  
 八百屋  
 南堀端町 港町三 三番町  
 大川 丑吉  
 松本 武正  
 井手 喜作  
 清水 清七  
 佐治ヨシノ  
 山内 廣吉  
 三好 カ子  
 大野 綱衛  
 静岡 徳照  
 二宮 常男  
 港町三 樂器機椅子  
 同二  
 同四  
 河原町  
 小唐人町一  
 木屋町二  
 辨天町  
 三番町  
 本町三  
 唐人町一  
 小唐人町二  
 港町四  
 柳行李、支那靴製造  
 高久保 恭  
 大川 丑吉  
 松本 武正  
 井手 喜作  
 清水 清七  
 佐治ヨシノ  
 山内 廣吉  
 三好 カ子  
 大野 綱衛  
 静岡 徳照  
 二宮 常男  
 港町三 ときや  
 同二  
 同四  
 河原町  
 小唐人町一  
 木原屋 渡邊 壯造  
 月 井 戸井ヒサエ  
 和田 佐七  
 家木清次郎  
 白井半吉郎  
 燒田 源藏  
 今村 マツ  
 加賀屋 岡 市郎  
 河 良 小倉益太郎  
 木原屋 渡邊 壯造  
 酒井守三郎  
 戸井ヒサエ  
 和田 佐七  
 家木清次郎  
 白井半吉郎  
 燒田 源藏  
 今村 マツ  
 向井禎次郎  
 岡 市郎  
 小倉益太郎  
 渡邊 壯造  
 酒井守三郎  
 戸井ヒサエ  
 和田 佐七  
 家木清次郎  
 白井半吉郎  
 燒田 源藏  
 今村 マツ  
 燐寸製造

ヤの部

八百屋

マの部

燐寸製造

附

録

港町四

フの部

重松重太郎

港町四

丹下政七郎

白方彌三郎

川上文次郎

木村忠近

新矢ナカ

山形彦太郎

渡部高太郎

中山親家

文具類

窪田徳次郎

千船町

紙屋町

荻町二

港町二

乾物

繪はがき

繪はがき

文成堂

三好フデ

乃萬源三郎

辻井金次郎

光本彌三吉

柳原義三郎

武智麟十郎

伊藤龜吉

山岡徳太郎

松田保次郎

魚町三

三番町

三番町

港町三

三番町

小唐人町二

千船町

小唐人町二

蒲團

木屋町二

港町二

荻町一

古道具

古着

金忠

藤本好五郎

秋田作太郎

渡部精一

浅野富三郎

武西長次郎

矢野常二郎

永井愛次郎

矢野直市

金錢貸付

同

同

同

同

同

魚町四

港町一

木町二

同

同

港町一

本町二

本町一

辨天町

本町一

本町二

同

同

港町四

同

同

同

同

同

金錢貸付

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

忽那啓三郎

脇長好五郎

大岩重次郎

中村傳次郎

榎垣彦太郎

脇長千壽三郎

松村孫一郎

山下熊吉

久今井高次郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

本町一

小唐人町一

港町二

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

大丸渡部卯平

高田末吉

京屋村井大次郎

龜屋龜井兼藏

龜屋龜井兼藏

都屋石丸常五郎

かみつる神谷鶴之助

小倉屋小倉長太郎

佐賀金佐賀金吾

室榮永井平藏

永井孝三郎

佐賀喜佐賀喜平

みきや御木龜太郎

三國屋瀬川喜七

二神數代

岡田善作

大和屋大森平七

物品貸付業

米

茶

辻

辻

辻

辻

辻

辻

辻

辻

辻

辻

辻

辻

辻

コの部

吳服太物

米

米

米

米

米

米

米

米

米

米

米

米

米

米

米

藤世良 藤藏

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

米周合名會社

紙屋町

港町二

本町一

小唐人町一

三番町

木屋町三

御木龜太郎

瀬川喜七

二神數代

岡田善作

大和屋大森平七

河原町	持田	本町二	三番町	同	本町二	紙屋町	千船町	本町一	港町一	荳町七	河原町	同	新町二	木屋町五	江戸町
井手徳太郎	河合金五郎	南條次郎	西野マキ	増岡清三郎	友近寅吉	小玉九平	渡部松吉	戸田多喜次	松原龜吉	平田筆次郎	武智政藏	武智兵次郎	佐伯藤次郎	木村周藏	大西コメ
一萬町	壹町一	港町四	港町四	木屋町四	港町三	小唐人町一	唐人町三	同	港町四	同三	本町三	小唐人町一	唐人町二	小唐人町一	港町二
小間物	卸	同花結卸	樂器	玉柳	天狗屋	米平	泉儀	宮屋	米源	富田喜平	二神彌吉	森清次郎	加藤直次郎	檜垣峰吉	山下倉太郎
宇野岩吉	岩井福太郎	野本秀次郎	松原松五郎	田村信次郎	和泉乙三郎	柏井善十郎	和泉フサ	水口通義	富田喜平	二神彌吉	森清次郎	加藤直次郎	檜垣峰吉	山下倉太郎	大丸寅次郎

辨天町	河原町	湊町三	同四	小唐人町二	河原町	港町二	唐人町三	小唐人町一	松前町三	河原町	河原町	魚町二
石丸鹿太郎	宮内ラン	二神金兵衛	末政又太郎	河本龍藏	富永政吉	古泉キク	鈴木秀助	宇佐美權平	大森元太郎	宮本壽輔	橋本丑之助	五百木荒三郎
出淵町二	坂町	持田	唐人町二	府中町四	府中町四	港町二	辨天町	唐人町二	北八坂町	持田	河原町	北夷子町
田村岩太郎	森川重留	三原松太郎	加藤右三郎	白石庄衛	後藤元五郎	渡部イマ	大泉福太郎	野村愛次郎	野間春次郎	梶野平次郎	梶野實	津吉久吉
米紋	鍛冶問屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋	掛川屋
田村岩太郎	森川重留	三原松太郎	加藤右三郎	白石庄衛	後藤元五郎	渡部イマ	大泉福太郎	野村愛次郎	野間春次郎	梶野平次郎	梶野實	津吉久吉

工の部

米穀類

氷

石鹼製造

森宗

大森元太郎

宮本壽輔

橋本丑之助

五百木荒三郎



松 山 案 内

河原町 穀物  
 御寶町 穀物  
 港町四 乾物  
 河原町 糸  
 持田 金  
 河原町 久米照久  
 花園町二 鷲尾馬次郎  
 小唐人町二 木和村利平  
 花園町二 菅秀次郎  
 小唐人町三 勝田直義  
 末廣町二 玉井源次郎  
 山田啓次郎  
 栗田文五郎  
 油揚製造  
 唐人町二 川田馬太郎  
 壹町一 程野兵次郎  
 河原町 荒井豊吉  
 中村 能島房太郎  
 餠製造  
 彌弼  
 來島屋

今平 今村忠三郎  
 尼子半藏  
 豐田音次郎  
 久米照久  
 鷲尾馬次郎  
 木和村利平  
 菅秀次郎  
 勝田直義  
 玉井源次郎  
 山田啓次郎  
 栗田文五郎

壹町四  
 河原町  
 木屋町五  
 農具  
 辨天町

サの部

清酒醸造

松前町三 康屋 栗田幸次郎  
 本町三 加賀屋 岡酒造合名會社  
 水屋町四 三好藤次郎  
 松前町三 友近力子  
 壹町一 中矢音五郎  
 唐人町一 辻田鶴次  
 一萬町 小笠原董  
 北夷子町 川上仲市  
 酒類販賣  
 辨天町 河上ヒサ

附 録

港町二 加賀屋 村上芳五郎  
 唐人町三 岡支店 村上米次  
 港町四 池田清二郎  
 同三 佐伯祐三郎  
 北京町 馬越七藏  
 花園町二 渡部勘三郎  
 松前町二 池田喜平  
 港町二 小野健助  
 末廣町一 村山キサ  
 河原町 榊崎忠太郎  
 同 小野馬太郎  
 唐人町三 中川兼吉  
 北京町 渡部友市  
 辨天町 菅重五郎  
 壹町四 須賀淺次郎  
 中村 越智吉兵衛  
 新町一 平野三喜藏

小唐人町二  
 唐人町三  
 小唐人町三  
 壹町六  
 河原町  
 千船町  
 同  
 魚町二  
 河原町  
 港町三  
 唐人町三  
 本町三  
 唐人町一  
 持田  
 千船町

文具  
 醬油  
 醬油  
 同  
 醬油  
 砂糖  
 製粉販賣  
 金錢貸付製粉販賣  
 製粉販賣  
 材木商

家久音次郎  
 山本溫和  
 酒井幸三郎  
 水沼卓次郎  
 村上米治  
 矢野德太郎  
 井手荒三郎  
 勝岡茂市郎  
 松浦大治郎  
 神田常義  
 藤崎德太郎  
 大本定太郎  
 松島政太郎  
 眞部政太郎  
 吉田藤十郎







河原町 持田  
河原町 同  
持田 同  
江月町 同  
木屋町四 同  
木屋町四 同  
府中町二 同  
登町一 同  
紙屋町 同  
持田 同  
木屋町五 同

油

木原屋 渡邊 壯造  
米 紋 三原松太郎  
今 平 今村忠三郎  
森 源 高市 國定  
森 源 次郎  
三好喜八郎  
井上 兼吉  
山本卯太郎  
加藤 コト  
津守房五郎  
德丸 利一  
前川 ツ子  
穂坂 テル  
吉野 寅藏

精米業

セの部

辨天町 松前町二  
河原町 北京町  
南夷子町 木屋町二  
南夷子町 南夷子町  
河原町 鐵砲町  
本町四 唐人町一  
府中町二 港町四  
末廣町二

精米機販賣

製粉販賣

石油

紙、油種

蠟燭、種油、煙草  
種油  
石鹼

酢製造

金錢貸付

高橋正次郎  
株式松山精米所  
大森 壽吉  
合名武德精米所  
土岐 德造  
篠田松太郎  
山内市太郎  
渡邊 太平  
加藤啓次郎  
加藤 コト  
黒川 正澄  
津守房五郎  
矢野 眞柴  
高本喜太郎

同 文具類 大和屋 土肥 與平  
同 文具類 文海舎 世良織次郎  
小唐人町一 文具類 末政久次郎  
港町二 文具類 加賀屋 岡 禎 吉  
紙屋町 文具類 末政久次郎  
シヤツ、莫大小、裨物類  
木屋町四 綿子ル卸 村上 新藏  
港町三 足袋 重松 ツ子  
同 足袋 越智常次郎  
小唐人町一 足袋 光岡彌之助  
港町三 足袋 白石 熊吉  
河原町 綿子ル卸 山本幸五郎  
港町三 渡部幸三郎  
同 九尾健一郎  
木屋町四 三津愛太郎  
西堀端町 梶 トヨ  
味酒 太物 光田傳三郎

河原町 小唐人町三  
新聞發行及賣捌  
小唐人町二  
西堀端町  
港町四  
同 三  
小唐人町二  
三番町

寫真

肥料

豐田岩太郎  
高本富太郎  
海南新聞株式會社  
伊豫日日新聞社  
愛媛新聞株式會社  
新聞賣捌合資會社  
赤松 重老  
宇野 和吉  
高橋正次郎  
伊豫肥料販賣合資會社  
佐 古川 慶次  
橋本丑之助  
米 平 柏井 龍藏

附 録 (三)

銀 行

●株式會社愛媛縣農工銀行 二番町(二)

(創立明治三十一年七月)

三番町	頭 取	清水 隆德
府中町二	取締 役	仲田傳之助
宇和島町	同	玉井 安藏
今治町	同	阿部光之助
二番町	同	窪田節二郎
伊豫郡南伊豫村	同	玉井健次郎
新居郡中萩村	同	廣瀬 滿正
三津濱町	同	近藤貞次郎
南宇和郡御莊村	監 查 役	岡原 丈一
喜多郡大洲町	同	村上 丈夫
宇摩郡土居村	同	山中 好夫

●株式會社五十二銀行 三番町(五三)

(創立明治十一年九月)

東宇和郡野村	同	緒方 陸朗		
新居郡中萩村	同	木原 喜作		
唐人町三	頭 取	石原 操		
三番町	取締 役	藤野 漸		
港町一	同	岸 重		
港町四	同	吉野 一清		
柳井町	同	八束 喜藏		
今治町	支 配 人	伊藤榮太郎		
今治支店支配人	監 查 役	池内 久親		
東京市	同	渡部 正		
溫泉郡道後村	同	原 信正		
●株式會社松山商業銀行 末廣町(二二〇)				
(創立明治二十九年二月)	同	柳井町	頭 取	木村 利武
柳井町	取締 役	井上 要		

●株式會社伊豫農業銀行

(創立明治三十年十月)

紙屋町(五〇)

府中町二	同	仲田傳之助
榎町	同	山本 盛信
魚町二	同	福川新十郎
中歩行町	支 配 人	櫻 井 滯
魚町二	監 查 役	大岩萬次郎
港町四	同	世良 藤藏
大阪市	同	賀田金三郎
溫泉郡垣生村	頭 取	村上 半太郎
同郡余土村	取締 役	二神 精一
同郡湖見村	同	清水 義彰
同郡味生村	同	清水大三郎
溫泉郡粟井村	同	大森 盛直
荳町三	支 配 人	逸見安太郎
二番町	監 查 役	村瀬 正敬
溫泉郡和氣村	同	矢野市三郎

●合名會社大野銀行 湊町(二六)

(創立明治三十三年六月)

同郡雄群村	同	德本 良一
港町二	頭 取	大野 侗吉
同	副頭 取	大野熊太郎

●合名會社仲田銀行 本町(二八)

(創立明治四十年十一月)

府中町二	代表社員頭取	仲田傳之助
同	代表社員	仲田林太郎

●株式會社松山貯蓄銀行 三番町(二一四)

(創立明治二十九年二月)

府中町二	頭 取	仲田傳之助
松前町三	取締 役	栗田幸次郎
府中町二	同	仲田林太郎
三津濱町	監 查 役	向井團四郎

●伊豫鐵道株式會社 久保町(七)

(創立明治二十一年十月)

豊坂町二 取締役社長 井上 要  
 一番町 取締役 松下 信光  
 港町四 同 八束 喜藏  
 大阪市 同 内藤爲三郎  
 同 同 賀田金三郎  
 同 同 監査役 吉川 久七  
 南江戸 同 才賀 藤吉  
 二番町 同 村瀬 正敬  
 玉川町 同 大西和一郎  
 ●伊豫水力電氣株式會社 榎町(一五)  
 (創立明治三十四年十二月)  
 南江戸 取締役社長 才賀 藤吉  
 北京町 取締役 小林 信近  
 松前町三 同 栗田幸次郎  
 三番町 同 清水 隆徳  
 港町四 監査役 世良 藤藏

廣島市 同 桐原恒三郎  
京都市 同 奥野市次郎

●松山電氣軌道株式會社 一番町(五五)  
(創立明治四十年四月)

三番町 取締役 清家久米一郎  
 大阪市 同 渡邊 修  
 三津濱町 同 宮崎 張儀  
 一番町 監査役 夏井保四郎  
 末廣町二 同 高本喜太郎  
 ●松山紡績株式會社 味酒(一〇)  
 (創立明治二十五年十二月)  
 本町一 取締役社長 瀬川 喜七  
 溫泉郡三津濱町 取締役 石崎平八郎  
 本町一 同 佐賀 金吾  
 豊坂町一 同 田内榮三郎  
 松前町三 同 栗田幸次郎  
 柳井町 監査役 三好 祐直

●松山織物株式會社 松前町五(一〇五)

(創立明治二十九年三月)

魚町二 同 福田新十郎  
 港町二 同 井上 久吉  
 紙屋町 取締役社長 栗田卯三郎  
 一萬町 取締役 白石徳次郎  
 新玉町 同 手島 正誼  
 松前町二 同 堀内胖治郎  
 港町四 監査役 世良 藤藏  
 松前町三 同 栗田幸次郎  
 ●伊豫電力織布株式會社 南江戸(二二七)  
 (創立明治四十年五月)  
 北京町 取締役社長 小林 信近  
 南江戸 取締役 才賀 藤吉  
 松前町三 同 栗田幸次郎  
 溫泉郡雄雄村 支配人 鹽崎 千尋  
 府中町二 監査役 仲田傳之助

●株式會社松山米穀取引所 廣町二(一九)

(創立明治二十七年八月)

港町四 取締役 世良 藤藏  
 一番町 理事 八束 喜藏  
 溫泉郡垣生村 同 松下 信光  
 港町四 同 新野伊三郎  
 三津濱町 同 清水藤三郎  
 榎町 監査役 近藤貞次郎  
 溫泉郡浮穴村 同 山本 盛信  
 府中町二 同 豐島 直行  
 ●松山醬油株式會社 松前町二(四五)  
 (創立明治三十一年六月)  
 府中町二 取締役 津守善五郎  
 松前町二 同 堀内胖治郎  
 榎町 同 山本 盛信  
 出淵町二 監査役 山本 義晴

●銚石鑛業株式會社 魚町三

(創立明治二十七年六月)

榎町 同 二宮 精一  
木屋町四 同 松原松五郎  
松前町三 頭 取 栗田幸次郎  
府中町二 取締役 仲田傳之助  
末廣町二 同 藤岡勘左衛門  
府中町二 監查役 仲田林太郎  
同 仲田友太郎

●株式會社松山精米所 松前町二

(創立明治三十三年十一月)

松前町二 取締役社長 堀内胖治郎  
出淵町二 取締役 田村岩太郎  
壹町二 同 德丸 忠造  
松前町三 同 大森元太郎  
新町二 監查役 玉井重太郎  
●海南新聞株式會社 小唐人町二(一六八)

(創立明治九年九月)

一番町 取締役社長 藤野 政高  
杉谷町 取締役 生島 經則  
新玉町 同 岩崎 一高  
中歩行町 監查役 櫻井 瀧  
一番町 同 松下 信光  
溫泉郡相生村 同 新野米太郎

●愛媛新報株式會社 湊町四(五三)

(創立明治三十八年十二月)

二番町 取締役社長 高須 峰造  
榎町 取締役 天野義一郎  
西町 同 山本 盛信  
同 監查役 御手洗忠孝  
●玉井合名會社 魚町二(六五)  
(創立明治三十九年四月)  
業務執行者 玉井 重吉  
府中町二 同 小村節次郎

西堀端町

●米周合名會社 湊町四(一三六)

(創立明治三十六年九月)

泉 安太郎  
港町四 代表者 長坂彌三郎  
同 同 長坂 周助

●合名會社長井商會 三番町(一四八)

(創立明治三十六年十月)

南八坂町 代表者 長井 政光  
二番町 同 村瀬 正敬

●伊豫肥料販賣合資會社 末廣町一

(創立明治三十六年七月)

溫泉郡余土村 代表者 池内 清間  
同郡雄群村 業務擔當者 栗田松太郎

●瀧本足袋合資會社 木屋町四(二一九)

(創立明治三十九年六月)

木屋町四 代表者社長 龜井 兼藏  
同 業務擔當者 松原松五郎

溫泉郡湖見村

同 同 玉井 鹿藏

●醬油味噌釀造合資會社 湊町四

(創立明治三十五年四月)

岡山市 同 藤原 役藏

●合名會社武德精米所 北京町

(創立明治三十九年十二月)

港町四 代表者 山本光太郎

港町二

代表者 德丸 忠造

●新聞雜誌賣捌合資會社 湊町三

(創立明治三十八年三月)

港町三 業務擔當者 向井藏次郎

榎町

同 同 山本 盛信

同

同 同 高橋 居廣

港町三

同 同 向井豐太郎

杉谷町

同 同 生島 經則

●伊豫製紙株式合資會社 持田(二〇四)

(創立明治三十八年二月)

北京町 代表者 小林 信近

組 合

南八坂町 監 査 役 長 井 政 光  
 豐坂町二 同 同 井 上 要  
 二番町 同 同 村 瀬 正 敬

●伊豫織物改良同業組合 紙屋町(二四八)  
 紙屋町 組 長 栗田卯三郎  
 溫泉郡北伊豫村 副 組 長 渡部鶴五郎  
 同郡生石村 同 垣 生 丈  
 同郡垣生村 組合會議長 村上平太郎  
 新玉町 同 副 議 長 手 島 正 誼  
 花園町二 評 議 員 廣 田 方 知  
 溫泉郡和氣村 同 矢 野 市 三 郎  
 玉川町 同 大 西 和 一 郎  
 西堀端町 同 三 村 正 藏  
 溫泉郡雄群村 同 八 木 藤 太 郎  
 同郡味生村 同 藤 田 正 作

魚町二 同 玉 井 重 吉  
 一萬町 同 白 石 德 次 郎  
 伊豫郡岡田村 同 河 野 安 太 郎  
 豐坂町一 同 田 內 榮 三 郎  
 溫泉郡伊窪村 同 松 本 紋 次  
 同郡和氣村 同 岡 本 利 藏  
 同郡余土村 同 兼 久 太 藏  
 同郡垣生村 同 二 神 大 五 郎  
 伊豫郡北伊豫村 同 本 田 百 太 郎

●松山機業協成會 豐坂町一  
 理事 長 田 內 榮 三 郎

●松山酒造組合 魚町一  
 組 長 沼 田 覺 太 郎  
 溫泉郡河野村 副 組 長 武 智 良 太 郎  
 伊豫郡松前村 副 組 長 武 智 良 太 郎

●松山味噌醬油釀造組合 松前町(四五)  
 松前町二 組 長 松 山 醬 油 株 式 會 社  
 木屋町四 副 組 長 木 村 和 市

●松山市溫泉郡茶業組合 末廣町一  
 小唐人町二 組 長 友 近 彌 平  
 末廣町一 副 組 長 垂 水 近 賢

●松山市材木商同業組合 河原町  
 河原町 頭 取 窪 田 百 藏

●愛媛皮革商工同盟會 三番町  
 三番町 會 長 三 好 岩 五 郎  
 同 副 會 長 大 野 綱 衛

●松山活版印刷同業組合 榎町  
 榎町 管 理 人 岡 野 音 彌  
 同 同 大 竹 喜 藏

●松山染物同業組合 西堀端町  
 西堀端町 組 長 鷺 谷 辰 五 郎

●松山外側吳服商組合 港町四  
 港町四 組 長 長 坂 彌 三 郎  
 同 副 組 長 世 良 藤 藏

●松山洋服商組合 港町三

港町三 組 長 尾 崎 豐 次 郎  
 三番町 副 組 長 千 葉 萬 次 郎

●松山古物商組合 本町二  
 本町二 頭 取 檜 垣 彦 太 郎  
 千船町 副 頭 取 武 西 長 次 郎

●松山外側質屋組合 千船町  
 千船町 組 長 土 屋 忠 壽

●有限責任松山購買組合 出淵町一  
 柳井町 理 事 長 谷 場 圭 介  
 同 同 力 石 安 夫  
 二番町 同 同 赤 木 幹  
 通町 同 同 武 內 鼎 吉  
 御寶町 同 同 武 田 文 五 郎  
 港町四 監 事 森 山 根 虎 藏  
 港町三 同 同 山 根 虎 藏

●松山喜賓會 三番町  
 三番町 組 長 城 戶 民 志

官廳公署

- 愛媛縣廳 一番町(一一)
  - 出淵町一 知事 安藤 謙介
  - 同 内務部長事務官 西久保弘道
  - 三番町 警察部長事務官 脇田 琥一
  - 同 學務課長事務官 竹井貞太郎
  - 立花町 庶務課長事務官補 近藤 忠敏
  - 中歩行町 水産課長事務官補 齋藤 基良
  - 持田 土木課長技師 宮川 清
  - 三番町 衛生課長技師 矢野 静哉
  - 柳井町 會計課長 加藤 莊次郎
  - 通町 農商課長技師 武内 鼎吉
  - 春日町 警務課長警部 國安 清治
  - 孫町 保安課長警部 富海住太郎
- 松山市役所 出淵町(一一)
  - 南八坂町 市長 長井 政光
- 溫泉郡役所 榎町
  - 助 役 三神 仲太
  - 收入役第四課長 鴨川 正幸
  - 第二課長 内藤丈太郎
  - 第一課長 岡本 格銈
  - 第三課長 西山 正史
- 松山稅務署 登町三(四九)
  - 署 長 森 亘
- 松山郵便局 三番町(五九)
  - 局 長 中本章三
- 專賣局松山製造所 出淵町(二三六)
  - 小唐人町(久保旅館)所 長 平野 捨三
- 松山地方裁判所 一番町(六八)
  - 新玉町 所 長 高橋 克親
  - 同 檢事 正上川 正一
- 松山區裁判所 一番町

諸學校、圖書館

- 縣立學校
  - △愛媛縣師範學校 府中町一 校 長 伊野宮茂長
  - 出淵町二 校 長 廣田 一乘
  - △松山中學校 二番町 校 長 渡部 明綱
  - 出淵町一 校 長 陶山斌二郎
  - △松山高等女學校 末廣町一 校 長 菊地 謹彌
  - 港町一 校 長 清水 則備
  - △農業學校 持田 校 長 山内 鶴吉
  - △松山商業學校 持田 校 長 山内 鶴吉
  - △松山第一尋常小學校 二番町 校 長 山内 鶴吉
  - 通町 校 長 山内 鶴吉
  - △松山第二尋常高等小學校 木屋町一 校 長 山内 鶴吉
  - 港町二 校 長 山内 鶴吉
- 市立學校
  - △松山第一尋常小學校 二番町 校 長 山内 鶴吉
  - 通町 校 長 山内 鶴吉
  - △松山第二尋常高等小學校 木屋町一 校 長 山内 鶴吉
  - 港町二 校 長 山内 鶴吉

- 港町四 監督判事 瀧本駒太郎
- 松山警察署 出淵町(一一五二)
  - 出淵町一 署長警視 黒田懿十郎
- 松山監獄 藤原(二六九)
  - 藤原 典 獄 柿木原政澄
- 松山一等測候所 持田
  - 一萬町 所 長 廣江 方正
- 愛媛縣工業試驗場 持田
  - 北八坂町 場 長 小林 欽一
- 步兵第二十二聯隊 堀ノ内(二七一)
  - 二番町 聯隊長步兵大佐 奥村 信猛
- 松山聯隊區司令部 堀ノ内
  - 松前町一 司令官步兵中佐 田林 七郎
- 松山衛戍病院 堀ノ内
  - 南歩行町 院長三等軍醫正 莊司森之助
- 松山憲兵分隊 西堀端町(二二九)
  - (廣島定住) 分隊長憲兵大尉 中村孝三郎



- △松山第三尋常小學校 南八坂町 校長 影浦未知滿
- 永木町 校長 影浦未知滿
- △松山第四尋常小學校 喜與町 校長 高田正久
- 港町四 校長 高田正久
- △松山高等小學校 二番町 校長 久保儀平
- 北京町 校長 久保儀平
- 私立學校
- △私立松山幼稚園 榎町 校長 木村利武
- 柳井町 校長 木村利武
- △私立常盤幼稚園 宮古町 校長 栗田幸次郎
- 松前町三 校長 栗田幸次郎
- △北豫中學校 味酒 校長 白川福儀
- 中步行町 校長 白川福儀
- △勝山高等女學校 一番町 校長 片岡雋彌
- 南步行町 校長 片岡雋彌
- △私立松山技藝女學校 二番町 校長 湖見琢磨
- 壹町六 校長 湖見琢磨
- △私立松山實用裁縫女學校 琢磨

- △愛媛實科女學校 二番町 校長 主村井トメ
- 久保町 代表者 澤田カメ
- △崇徳女學校 西堀端町 校長 船田ミサホ
- 通町 校長 石丸芳太郎
- △私立松山女學校 二番町 校長 コルチリガ、シヤシソソ
- △私立松山夜學校 永木町 校長 西村清雄
- 永木町 校長 西村清雄
- △私立同情館女子夜學校 倉屋町 校長 大本新太郎
- 倉屋町 校長 大本新太郎
- △私立愛媛盲啞學校 二番町 校長 露口悅次郎
- 通町 校長 露口悅次郎
- 東宮殿下 行啓紀念 愛媛教育協會圖書館 二番町 館長 廣田一乘
- 出淵町一 館長 廣田一乘

名譽職員

- 衆議院議員
- 港町四 (大阪在住) (市選出) 加藤恒忠
- 一番町 (郡選出) 夏井保四郎
- 南江戸 (同上) 才賀藤吉
- 縣會議員
- 新町二 縣參事會員 大政章津
- 小唐人町二 仙波良太郎
- 二番町 富田嘉吉
- 市參事會員
- 西町 御手洗忠孝
- 豐坂町二 田内榮三郎
- 榎町 山本盛信
- 松前町二 堀内胖治郎
- 魚町二 玉井重吉
- 港町一 山本昌信
- 市會議員
- 二番町 議長 天野義一郎

- 壹町三 議長代理者 逸見安太郎
- 三番町 城戶民志
- 壹町三 垂水幾太郎
- 魚町二 大岩萬次郎
- 港町四 林常直
- 港町二 井上久吉
- 一番町 野本半三郎
- 榎町 山本盛信
- 豐坂町二 井上要
- 府中町二 小村節次郎
- 唐人町一 岩田正雄
- 一萬町 小笠原董
- 同 白石徳次郎
- 末廣町一 郷田藤次郎
- 本町二 檜垣彦太郎
- 港町三 田村安八郎
- 木屋町四 木村和市

●勸業委員  
 末廣町二 高本喜太郎  
 本町一 佐賀金吾  
 魚町二 福田新十郎  
 港町三 世良然次郎  
 府中町二 津守善五郎  
 新町二 大政章津  
 豐坂町一 田内榮三郎  
 西堀端町 鷺谷辰五郎  
 二番町 村瀬正敬  
 河原町 渡邊太平  
 木屋町四 三好藤次郎

●學務委員  
 委員長 田内榮三郎  
 豐坂町一 日野國治  
 港町四 林常直  
 永木町 久保儀平  
 影浦未知滿

●衛生委員  
 委員長 堀内胖治郎  
 松前町二 田内榮三郎  
 豐坂町一 伊藤榮太郎  
 柳井町 福田新十郎  
 魚町二 逸見安太郎  
 港町三 井上久吉  
 府中町二 小村節次郎  
 河原町 渡邊太平  
 魚町二 五百木荒三郎

委員長 三神仲太  
 岩田正雄  
 津守善五郎  
 清水政則  
 菅井昇平  
 小倉益太郎

病院、醫師

●縣立松山病院 小唐人町三(二五三)

院長外科擔任 醫學士 津下壽

內科主任 同 粒良仙藏

婦人科主任 同 龜倉靈鏡

●醫師 (イロハ順)

內科 千船町 伊奈信次

內科 唐人町二 磯崎是知

內科 港町四 石川襄

齒科 松前町三 服部博

齒科 三番町 西田福十郎

內科小兒科 通町 新江泰藏

內科小兒科 末廣町二 醫學士 新野良隆

內科 千船町 豐田繁

內科 三番町 大内通

木屋町五

米田常五郎

齒科 千船町 大塚直太郎

同 三番町 小山武文

眼科 千船町 笠置達道

眼科 二番町 加藤正邦

內科小兒科 二番町 吉野一知

道後町 醫學士 武智岩太郎

唐人町三 高橋恒磨

內科 千船町 伊達邦人

外科 出淵町一 添田芳三郎

外科 唐人町三 永井整一

外科皮膚病 御寶町 永井政忠

梅毒諸病科 港町一 成谷喜三郎

眼科 三番町 向井源九郎

眼科 辨天町 村上鳳梧

齒科 出淵町一 宇都本市藏

產科婦人科 唐人町三 內田友政

産科婦人科 二番町 醫學士 久保藤溪  
 同 出淵町一 山内正雄  
 同 同 安井雅一  
 耳鼻咽喉科 同 安井正信  
 同 同 山本信弘  
 内科 港町一 山崎集  
 齒科 榎町 矢野弼  
 二番町 真部正敏  
 耳鼻咽喉科 榎町 松崎宗信  
 港町二 益精一  
 眼科 榎町 古川唯次郎  
 皮膚病梅毒諸病科 出淵町一 兒玉鼎  
 唐人町二 近藤重義  
 小兒科 二番町 兒島辰三郎  
 三番町 醫學士 安達茂夫  
 小唐人町二 安倍義任  
 柳井町 結城道明

松前町三 美濃鼎  
 眼科 西町 三好徳治郎  
 同 南堀端町 美濃信哉  
 同 千船町 美濃軒司  
 外科 二番町 鹽崎市次郎  
 末廣町二 清水政則  
 千船町 白井滿  
 新町二 檜野貞一  
 西堀端町 平松清五郎  
 眼科 出淵町一 望月大祐  
 本町一 毛利文啓  
 魚町二 菅井重良  
 耳鼻咽喉科 南夷子町 菅井昇平  
 同 同 杉山晋

辯護士 (イロハ順)  
 辯護士公證人及執達吏

公證人  
 小唐人町二  
 御寶町  
 鮎屋町  
 二番町  
 一番町  
 一番町  
 一番町  
 一番町  
 一番町  
 二番町  
 二番町  
 二番町  
 二番町  
 二番町  
 三番町  
 三番町  
 二番町

岩城之翰  
 富田嘉吉  
 大關信一郎  
 高須峰造  
 辻進  
 夏井保四郎  
 宇和川濱藏  
 野本半三郎  
 野間恒太  
 藤野政高  
 天野義一郎  
 白岩景行  
 勝田久敬  
 仙波良太郎  
 隅田稜威太郎  
 西村壽雄

●執達吏

港町一 安田岩尾  
 永木町 其阿彌元治郎

新聞

●海南新聞 小唐人町二、電一六八  
 一番町 社長 藤野政高  
 新町二 主幹 大政章津  
 西堀端町 主筆記者(舊月) 鹽崎滿彦  
 北步行町 記者(香月) 丸山常次  
 永木町 同 (蛙堂) 田中七三郎  
 一萬町 同 (玉骨) 神谷良直  
 松前町一 同 (劍巖) 松本巖  
 二番町 同 (テツヤ) 二神徹彌  
 一萬町 同 (建海) 三宅謙四郎

●愛媛新報 港町四、電五三  
 二番町 社長 高須峰造

●松山商工會

三番町	同	城戸民志
本町二	同	檜垣彦太郎
登町七	同	三神仲太
南八坂町	同	鴨川正幸
通町	同	内藤丈太郎
南八坂町	同	岡本格銚
豊坂町一	會長	田内榮三郎
湊町三	副會長	田村安八郎
柳井町	相談役	木村利武
榎町	同	山本盛信
紙屋町	同	栗田卯三郎
末廣町二	同	藤岡勘左衛門
港町三	同	中野元三郎
府中町二	同	仲田傳之助
本町一	同	佐賀金吾
港町三	同	向井藏次郎

末廣町二

同四	相談役	世良藤藏
魚町二	同	福田新十郎
中歩行町	幹事	櫻井謙
港町二	同	井上久吉
登町三	同	垂水幾太郎
松前町二	同	堀内胖治郎
港町四	同	世良作藏
本町二	同	檜垣彦太郎
小唐人町三	同	筒井覺太郎
河原町	同	窪田儀造
府中町二	同	津守善五郎
二番町	同	村瀬正敬
登町三	會計	逸見安太郎
木屋町四	同	木村和市
三番町	同	城戸民志
愛媛縣農會	會長	門田晉
溫泉郡素戔村	同	

●愛媛縣農會

三番町(一五六)

●伊豫日日新聞

西町	編輯主幹	御手洗忠孝
港町四	主筆記者	林常直
北京町	記者	小林幸直
中歩行町	同	野本氏久
出洲町一	同	進藤喜志路
倉屋町	同	高木勝太郎
南夷子町	同	日新國政
一番町	社長兼主筆(極堂)	柳原正之
出洲町二	記者(江南)	木原正博
同	同(露村)	栗本諒二
港町一	同(無名子)	田邊才二郎
出洲町一	同(玉灣)	神田秀一
松前町一	同(天眠)	平部幹一
鐵砲町	同	齋藤巳己

西堀端町電一六三

●松山市勸業協會

出洲町一市役所内	會長	長井政光
南八坂町	副會長	堀内胖治郎
松前町二	理事	井上久吉
港町二	同	伊藤榮太郎
柳井町	同	五百木荒三郎
魚町二	同	逸見安太郎
登町三	同	渡邊太平
河原町	同	田内榮三郎
豊坂町一	同	垂水幾太郎
登町三	同	田村安八郎
港町三	同	中野元三郎
同	同	向井藏次郎
同	同	栗田卯三郎
紙屋町	同	山本盛信
榎町	同	福田新十郎
魚町二	同	小村節次郎
府中町二	同	

喜多郡三善村 副會長 龜岡 哲夫  
 ●松山武揚會 出淵町一 會長 長井 政光  
 南八坂町 副會長 三神 仲太  
 蓋町七 理事 鳴川 正幸  
 南八坂町 同 內藤丈太郎  
 通町 同 伊藤榮三郎  
 新玉町 同 田內榮三郎  
 豐坂町一 同 馬島 爲之  
 北步行町 同 宮內 安貞  
 柳井町 同 天野義一郎  
 二番町 同 堀内胖治郎  
 松前町二 同 小村節次郎  
 府中町二 同 河本傳三郎  
 一萬町 同  
 ●松山在郷軍人團 出淵町二 團長 伊東榮三郎  
 新玉町 事務理事 安岡 徳常  
 鐵砲町

港町二 同 吉岡久太郎  
 出淵町二 同 岡田源之助  
 ●愛媛教育協會 二番町 會長 安藤 謙介  
 出淵町一 副會長 竹井貞太郎  
 三番町  
 ●愛媛教育協會松山部會 二番町 會長 長井 政光  
 南八坂町 副會長 露口悅次郎  
 通町  
 ●日本赤十字社愛媛支部 一番町(二二三) 支部長 安藤 謙介  
 出淵町一 副支部長 西久保弘道  
 南步行町 副支部長 莊司森之助  
 ●同上松山市委員部 出淵町一 委員長 長井 政光  
 南八坂町 支部長 安藤キク子  
 ●愛國婦人會愛媛支部 一番町 副支部長 西久保ミサ子  
 出淵町一 同

●同上松山市幹事部 出淵町一 幹事部長 長井シユウ子  
 南八坂町  
 ●愛媛頌功會 一番町 會長 安藤 謙介  
 出淵町一 副會長 藤井 幸槌  
 二番町 同 田林 七郎  
 松前町一  
 ●大日本武德會愛媛支部 一萬町 支部長 安藤 謙介  
 出淵町一 副支部長 脇田 琥一  
 三番町  
 ●日本海員救濟會愛媛支部 一番町 支部長 安藤 謙介  
 出淵町一 副支部長 西久保弘道  
 ●同上松山市部會 出淵町一 委員長 長井 政光  
 南八坂町  
 ●愛媛慈惠會 府中町三 理事長 仲田傳之助  
 府中町二 理事 本城 徹心  
 府中町三

松前町三 同 栗田幸次郎  
 ●愛媛保護場 鐵砲町 總理 野田 直幹  
 二番町  
 ●松山同郷會 二番町 會長 野田 直幹  
 二番町 副會長 村井 俊明  
 柳井町  
 ●帝國軍人後援會愛媛支會 南堀端町 支會長 安藤 謙介  
 出淵町一









清酒釀造  
穀物委託

販賣業

三津濱町須先町

商號唐津屋事

金松田定五郎商店

發電器號(マツ)

157  
番

商品目錄

正椿油	白入諸油
正白絞油	蠟燭色々
正種子油	煉油種々
正井筒油	廣價販賣

米

番

番

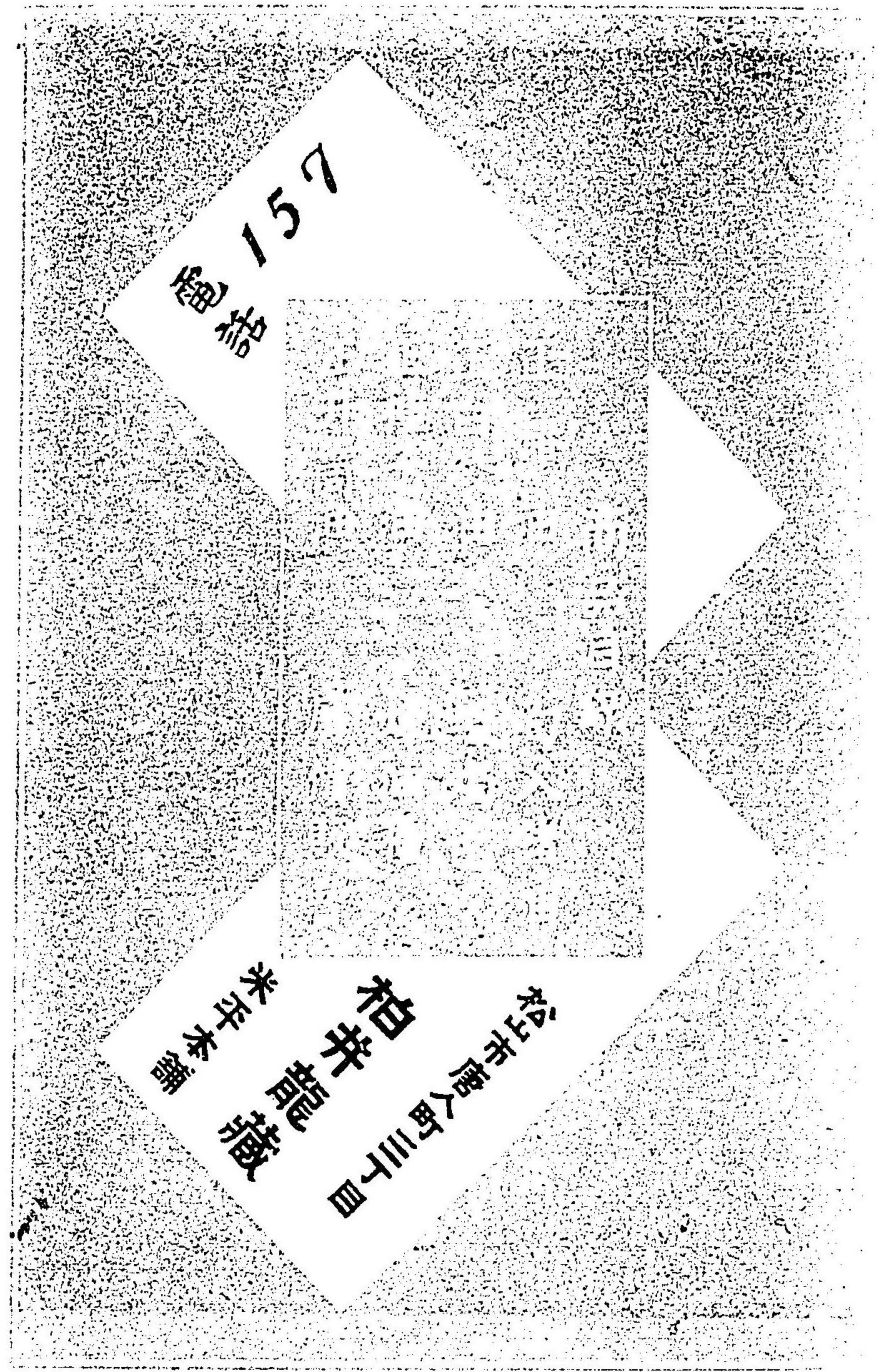
清酒釀造  
穀物委託  
販賣業

三津濱町須先町

商號唐津屋事

# 金松田定五郎商店

發電器號(マツ)



各博覽會共進會優等賞受領

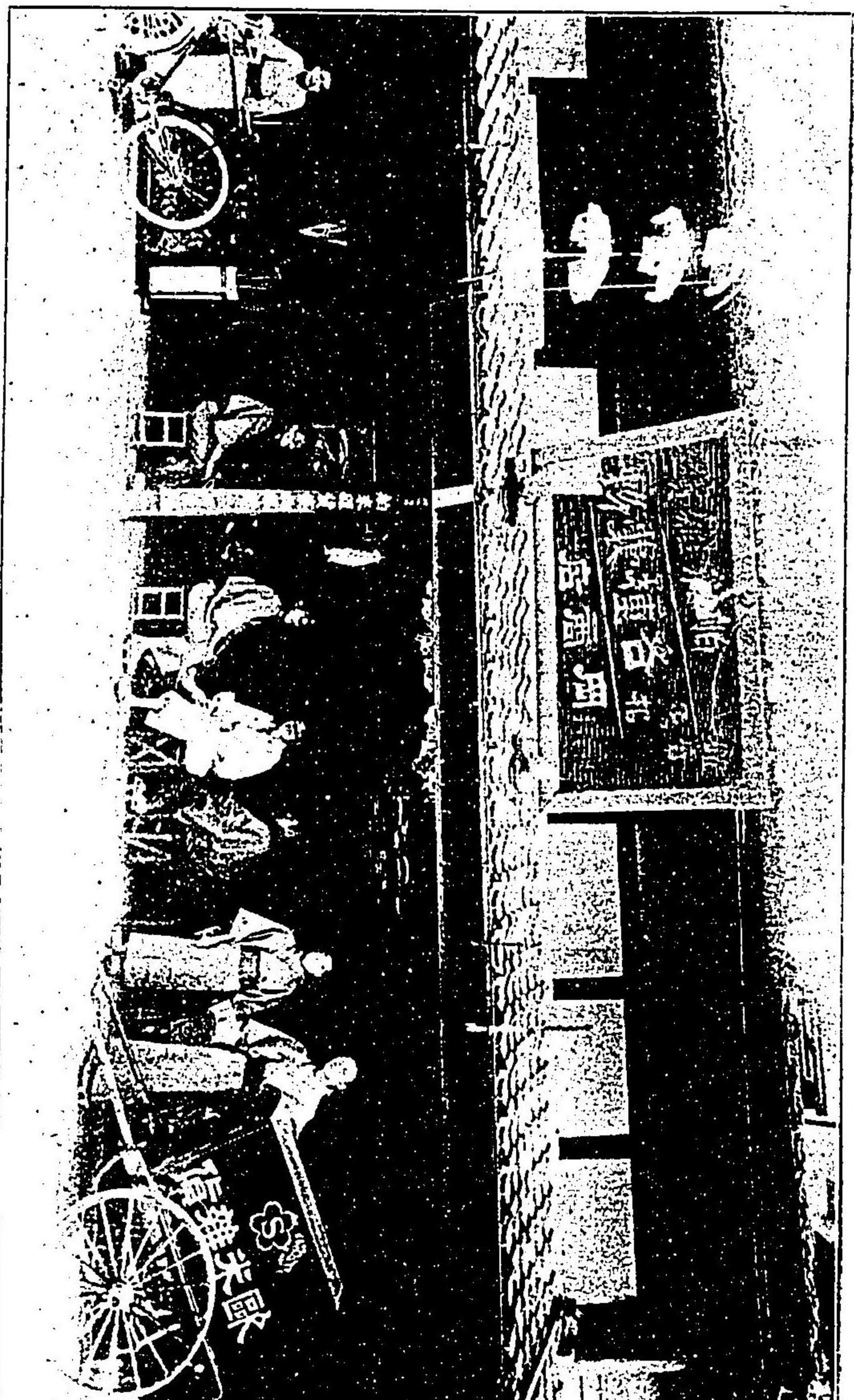
# 伊豫かすね

松山市本町二丁目

河村儀三郎

電話百七十二番

商 鏡 眼 物 袋 貨 雜 米 歐



電 話 壹 壹 壹 番

發 電 器 號 才 之

店 商 耶 次 千 岡

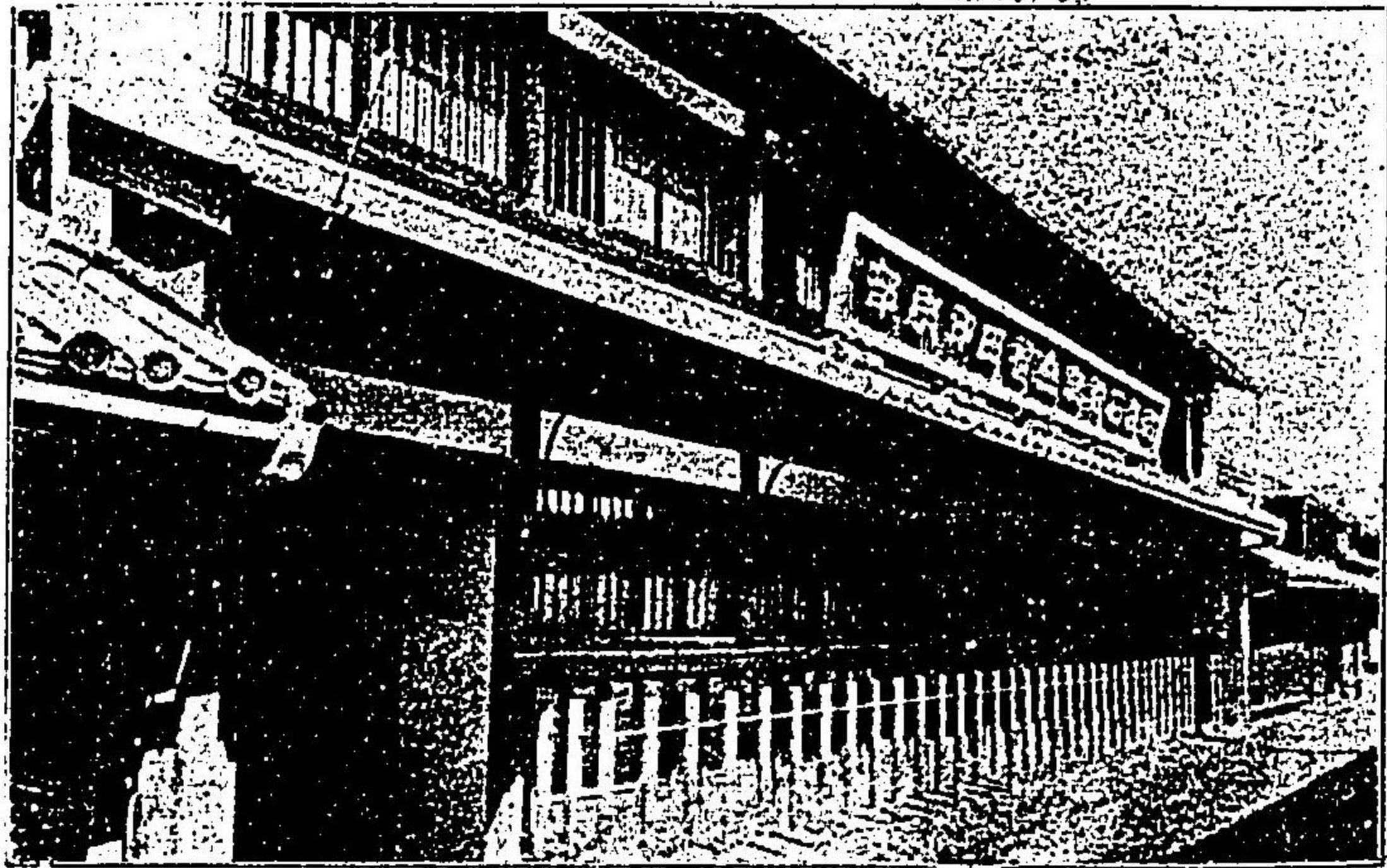


目 丁 二 町 湊 市 山 松

種各  
印刷業

松山市魚町二丁目  
福田印刷部  
(電話本社共通)

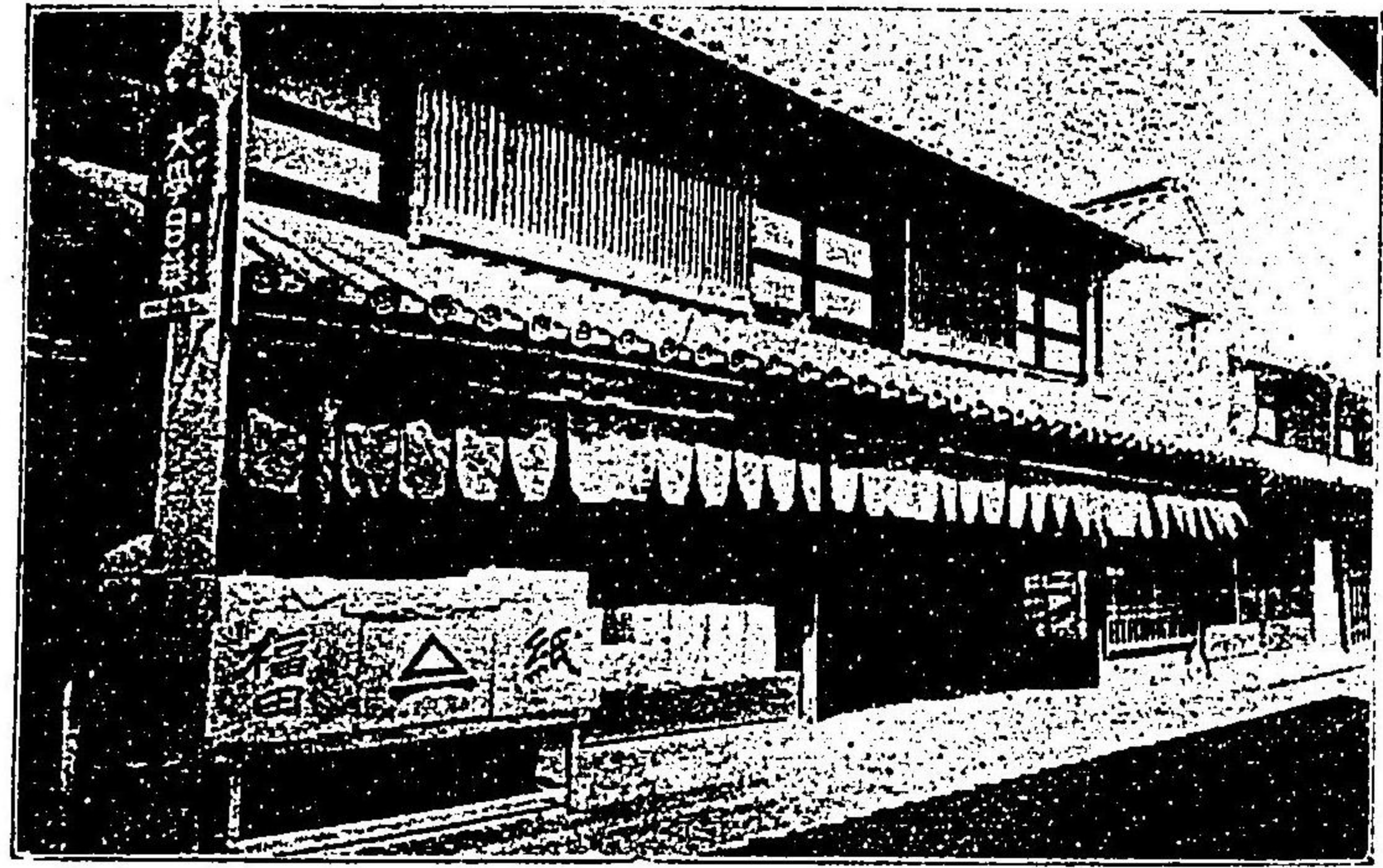
特色  
印刷鮮明  
意匠最新  
期日正確



和洋紙類販賣業  
諸官衙御用

松山市魚町二丁目  
福田合名會社

電話 三三二番  
電略 フクダ



商標



### 商業書紙

- 和洋諸紙
- 印刷用品
- 官衙用品
- 學校用品
- 毛、鐵筆謄寫版
- 金庫販賣

# 向陽社

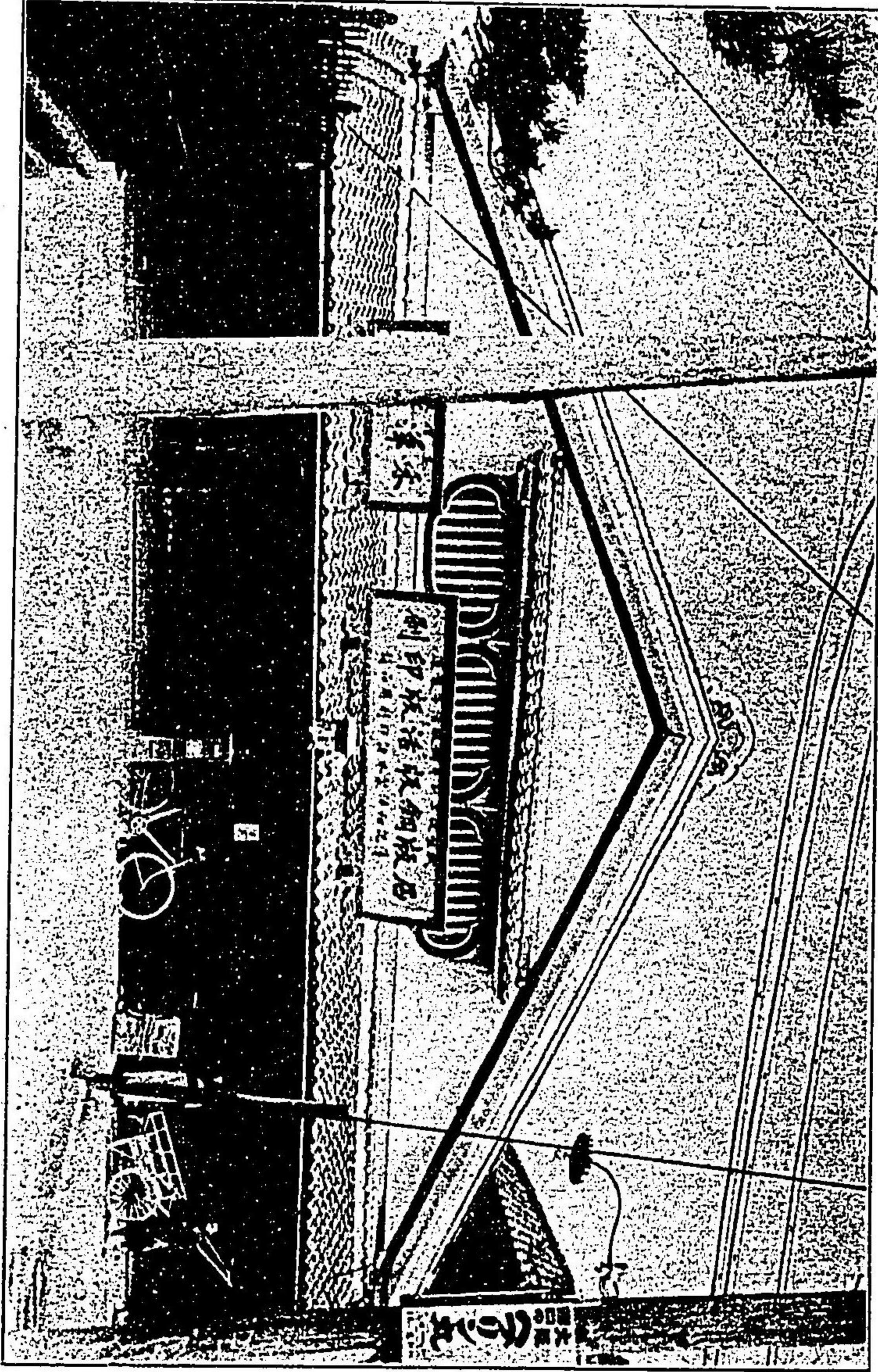
松山市櫻町

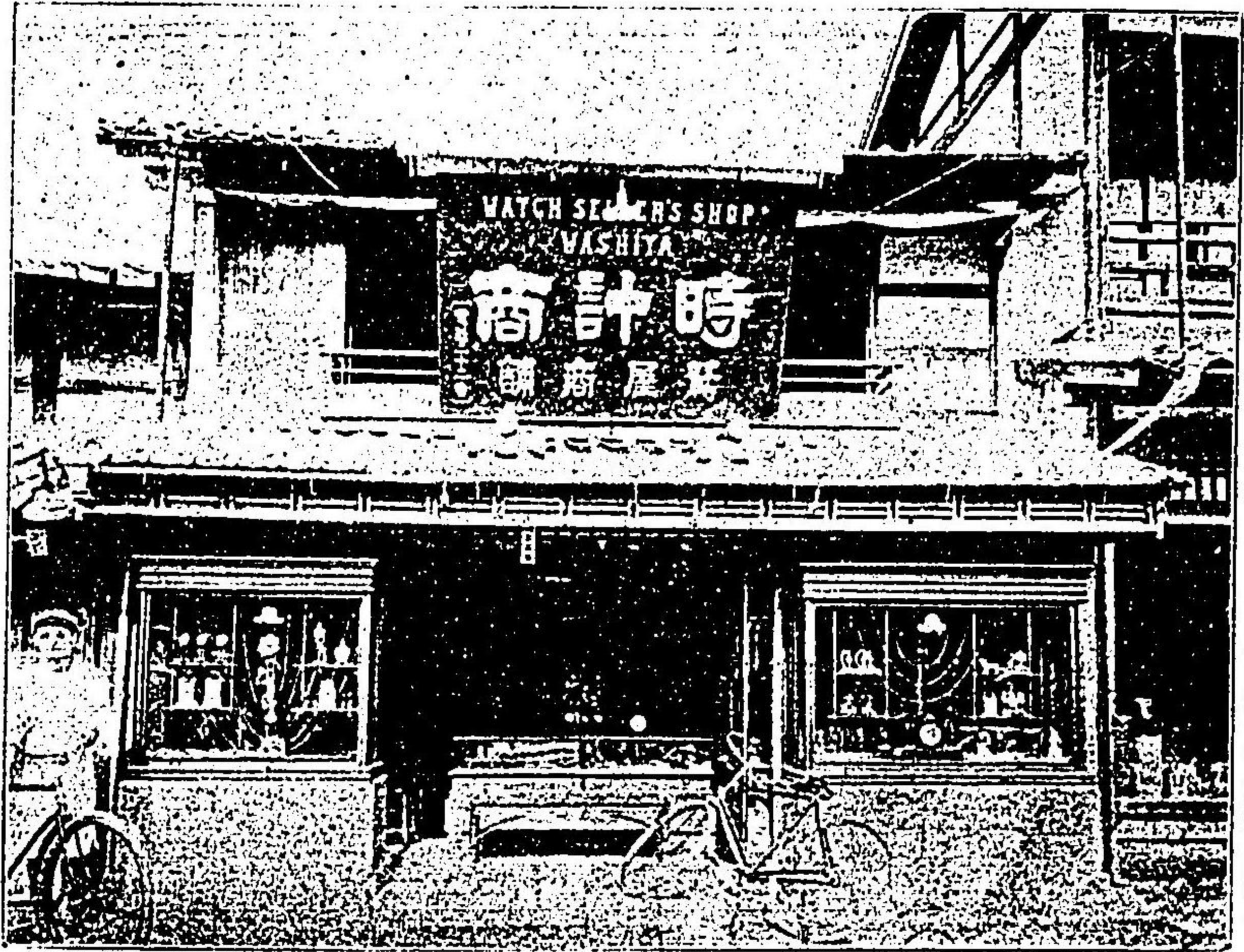
### 工業諸印刷

- 石版銅版
- 活版印刷
- 活字鑄造
- 紙型鉛版
- 簿記製本
- 製紙

電話一四二〇  
電話二〇〇〇

向陽社





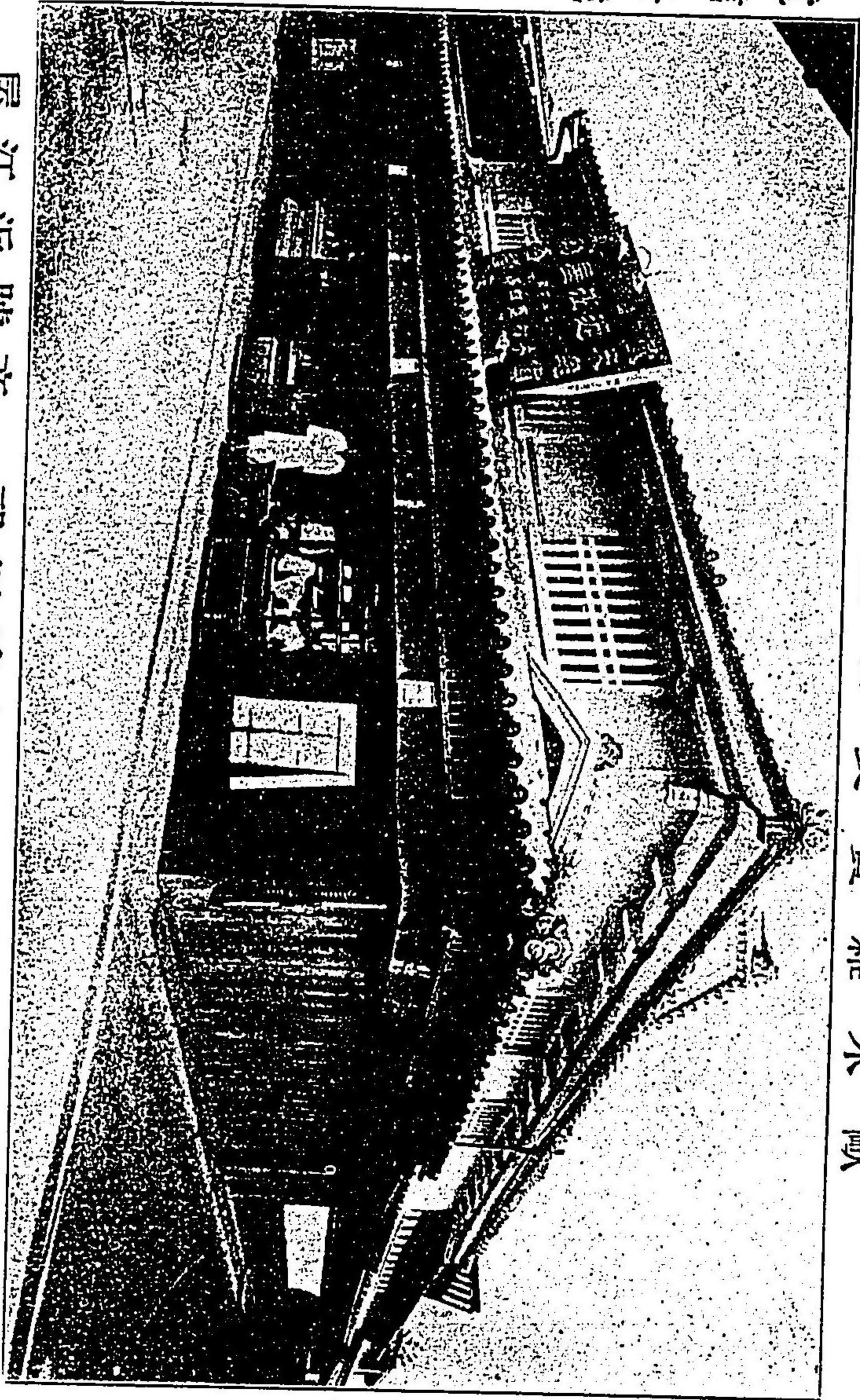
各種時計  
貴金屬  
美術品  
眼鏡類

松山市西堀端町

鷺屋時計商舖

電話貳拾貳番

電信略號 七二



商具草煙物袋貨雜米歐

電話 三十四番

屋江近號商 郎四直村木 三町湊市山松

道後温泉  
鮎屋旅館

道後停車場ヨリ僅カ三丁

伊豫特産  
美術陶磁器

磁部焼



目品

花瓶 水鉢 火鉢 煎茶器 番茶器 ビール器 珈琲器 酒器 菓子器 食器 其他種々

發賣元

樋口商店

伊豫松山市三番町

○ 隔地歩は又小包郵便(普通又代金引替)之便法あり  
破損の慮なき様確實より荷造り上送附仕仕間  
續々新用命に程奉願候也

# 耐屋旅館

道後温泉

道後停車場三丁目三丁

伊豫特産  
美術陶磁器

## 砥部焼



### 目品

花瓶 水鉢 火鉢 煎茶器 番茶器 ビール呑 珈琲器 酒器 菓子器 食器 其他種々

### 發賣元

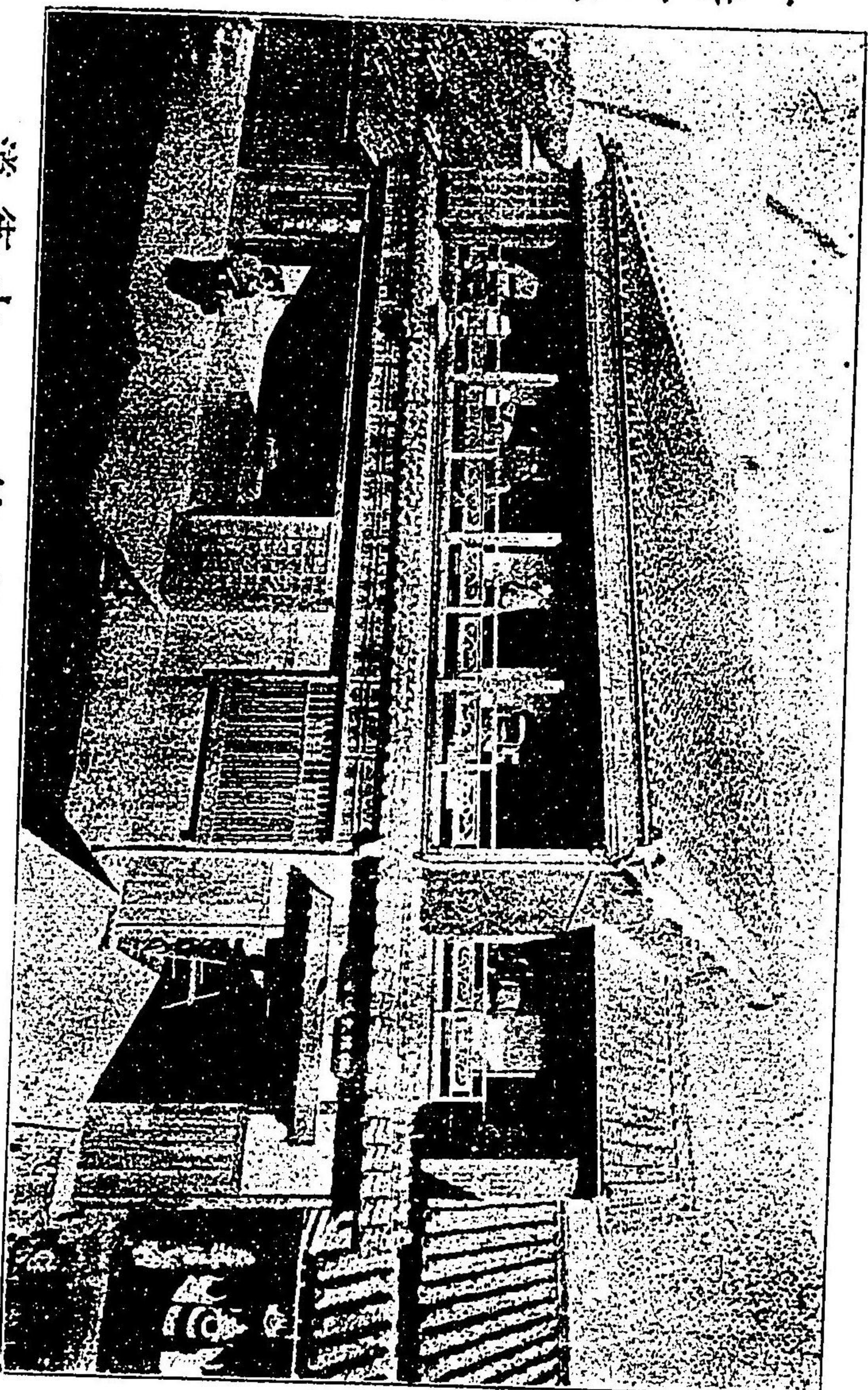
樋口商店

伊豫松山市三番町

○ 隔地歩、注文、小包郵便（普通又は代金引替）之便法あり  
破損の慮なき様確實より荷造り上と送附仕度間  
續々亦用命に程奉願候也



一番町停車場八半丁



電話 六拾四番

道街大 館旅豐保久 市山松

釀造元

沼田覺太郎

愛媛縣温泉郡河野村柳原

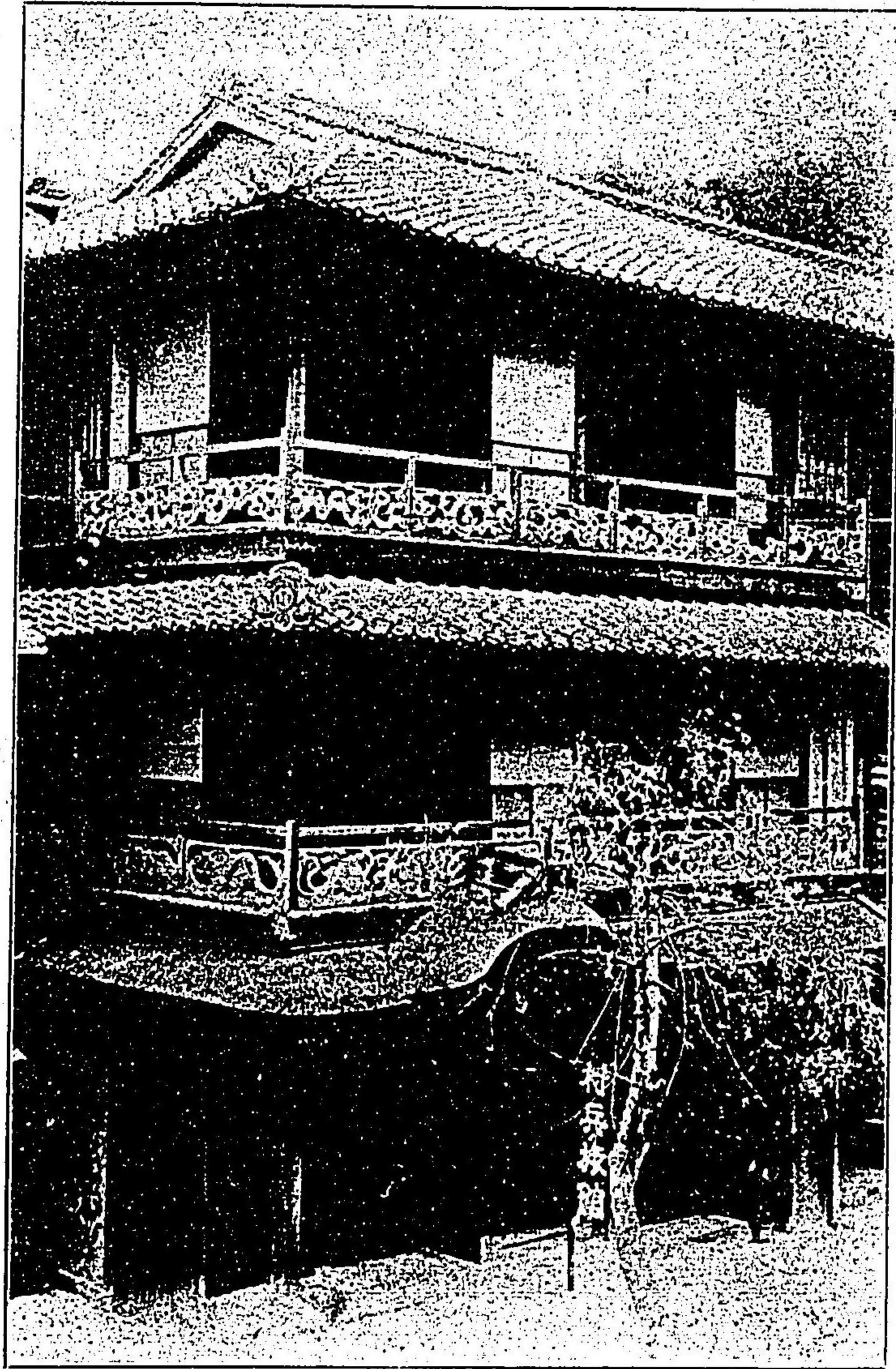
# 高野日長醇

愛媛名産



愛媛名産

伊 豫 道 後 温 泉 前



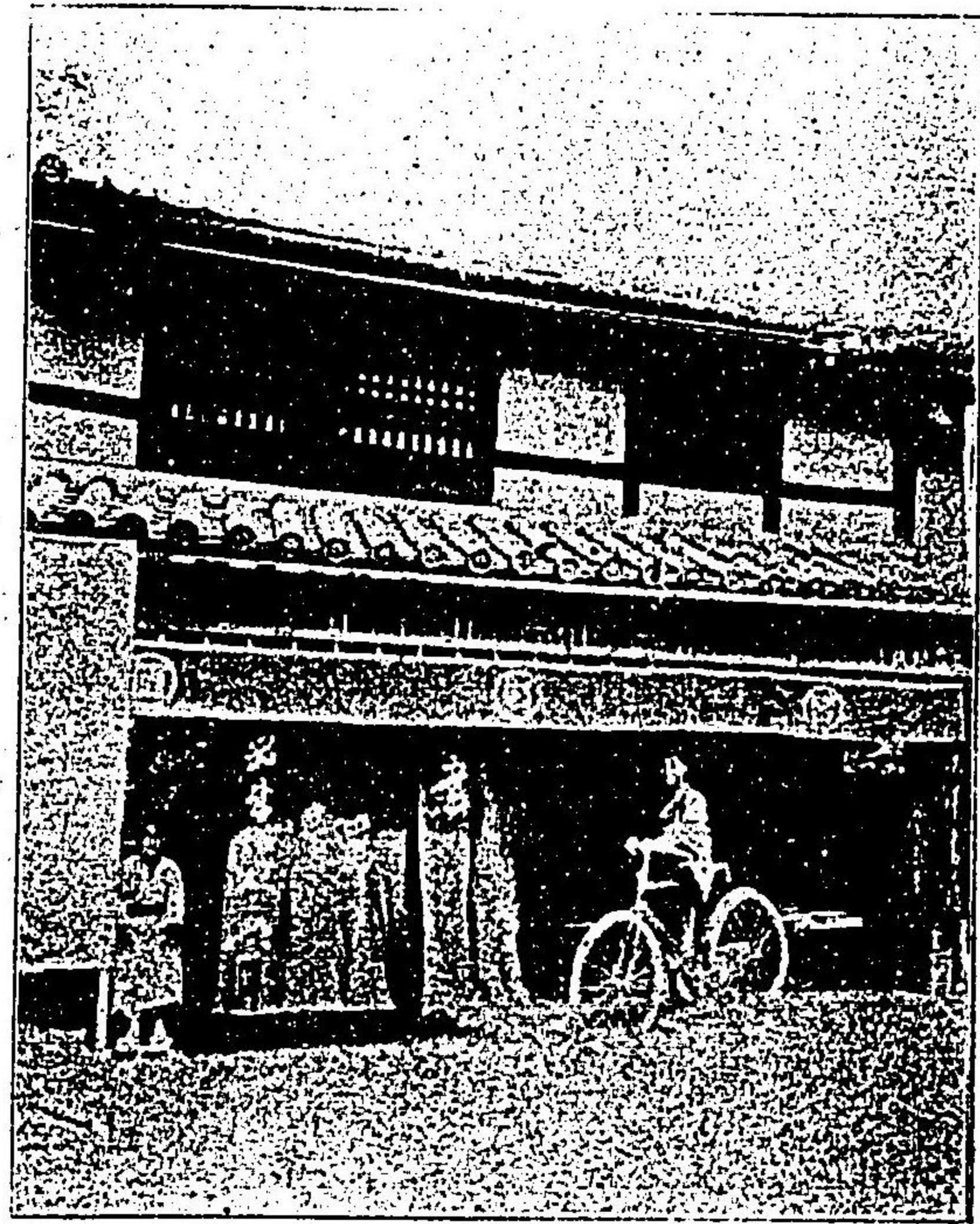
村 兵 旅 館

電 器 (ムラ)

電 話 架 設 中

# 內 外 書 籍

諸 雜 誌 俳 書 類 專 賣

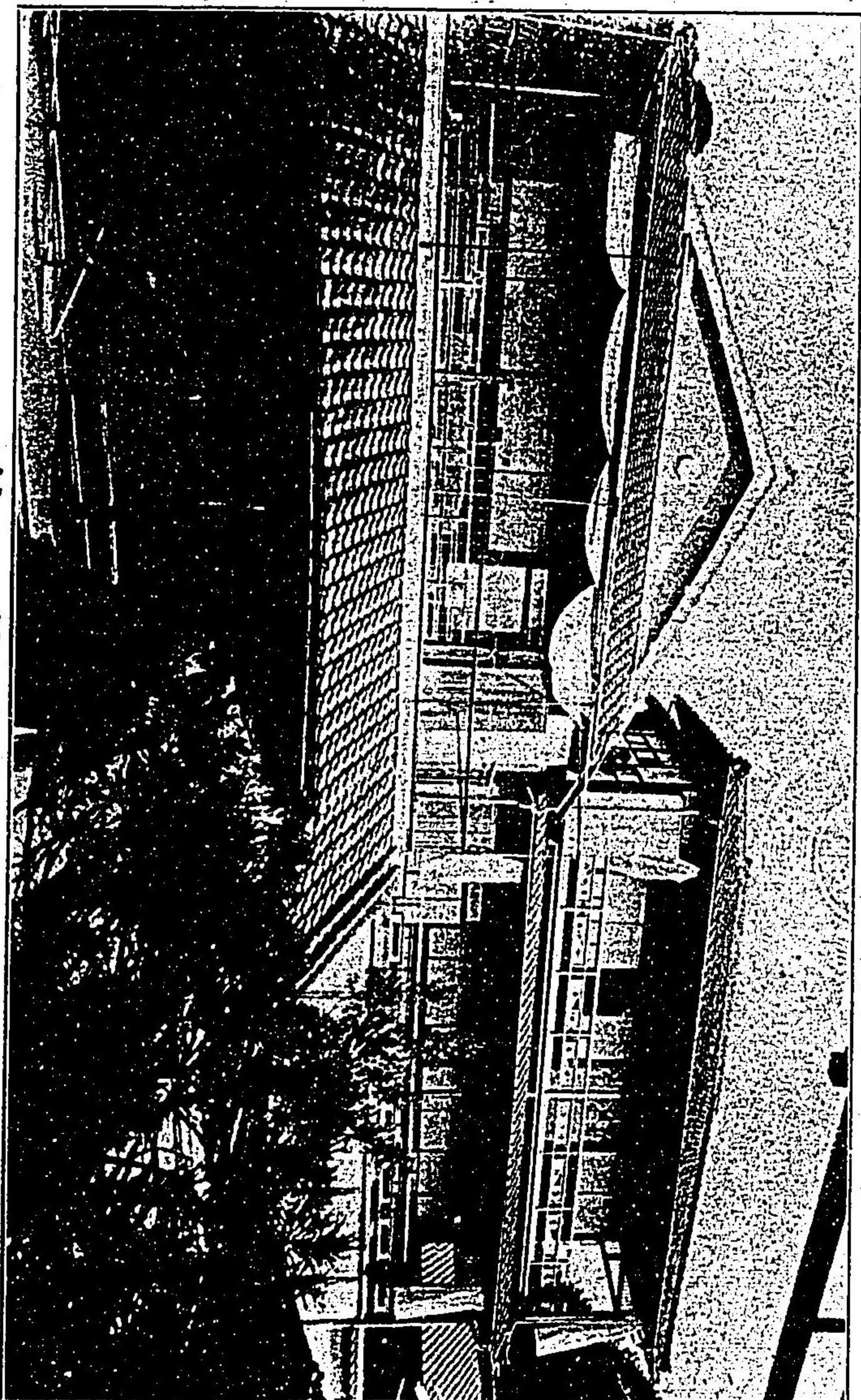


松 山 市 湊 二 丁 目

## 岡 汲 堂

電 話 貳 六 壹 番

伊豫道後靈の湯前



靈の湯南二間上り冠山下八雲館

電話架設中

梅木旅館

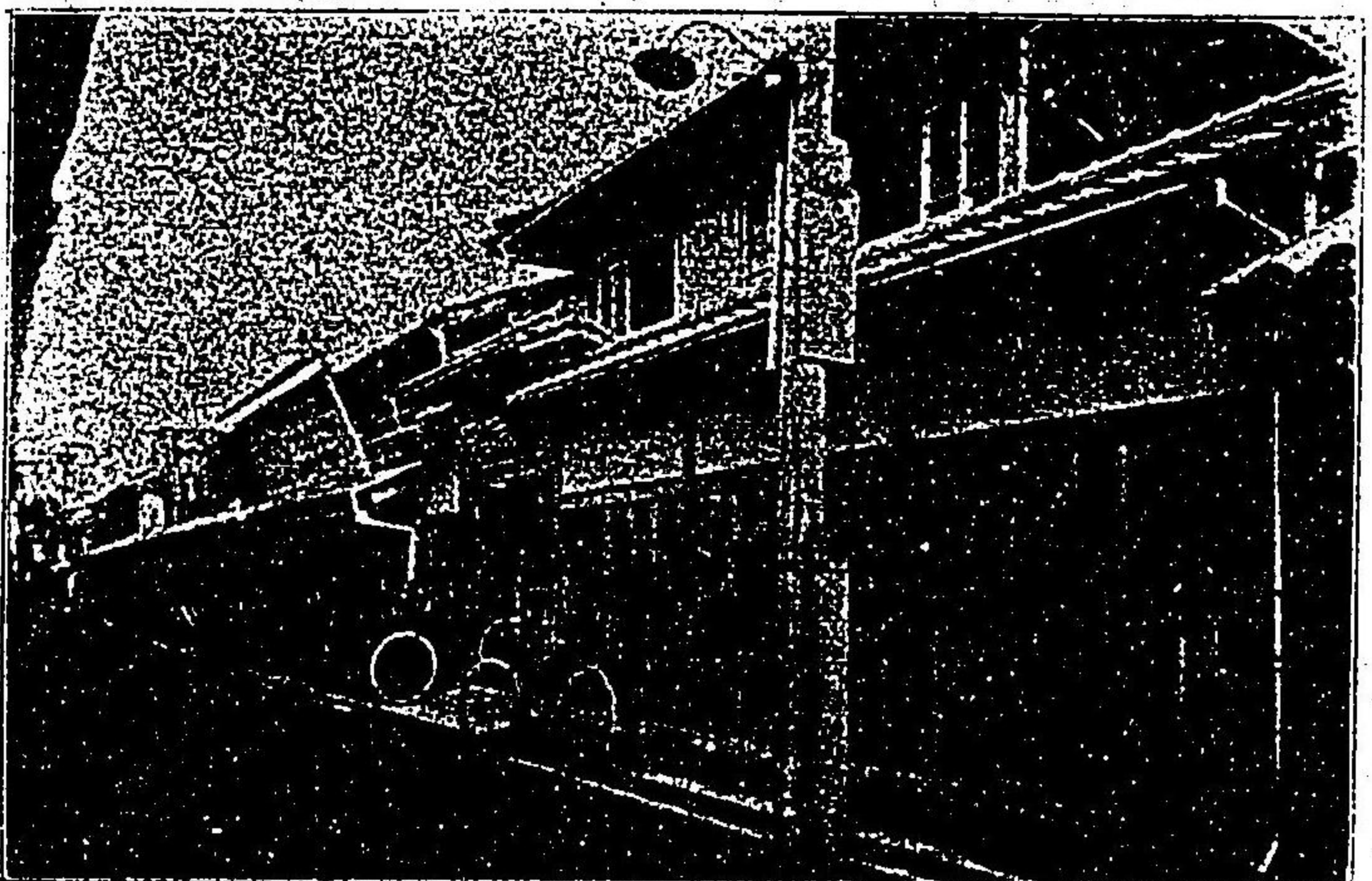
(古町停車場ヨリ貳丁)

# 御旅館

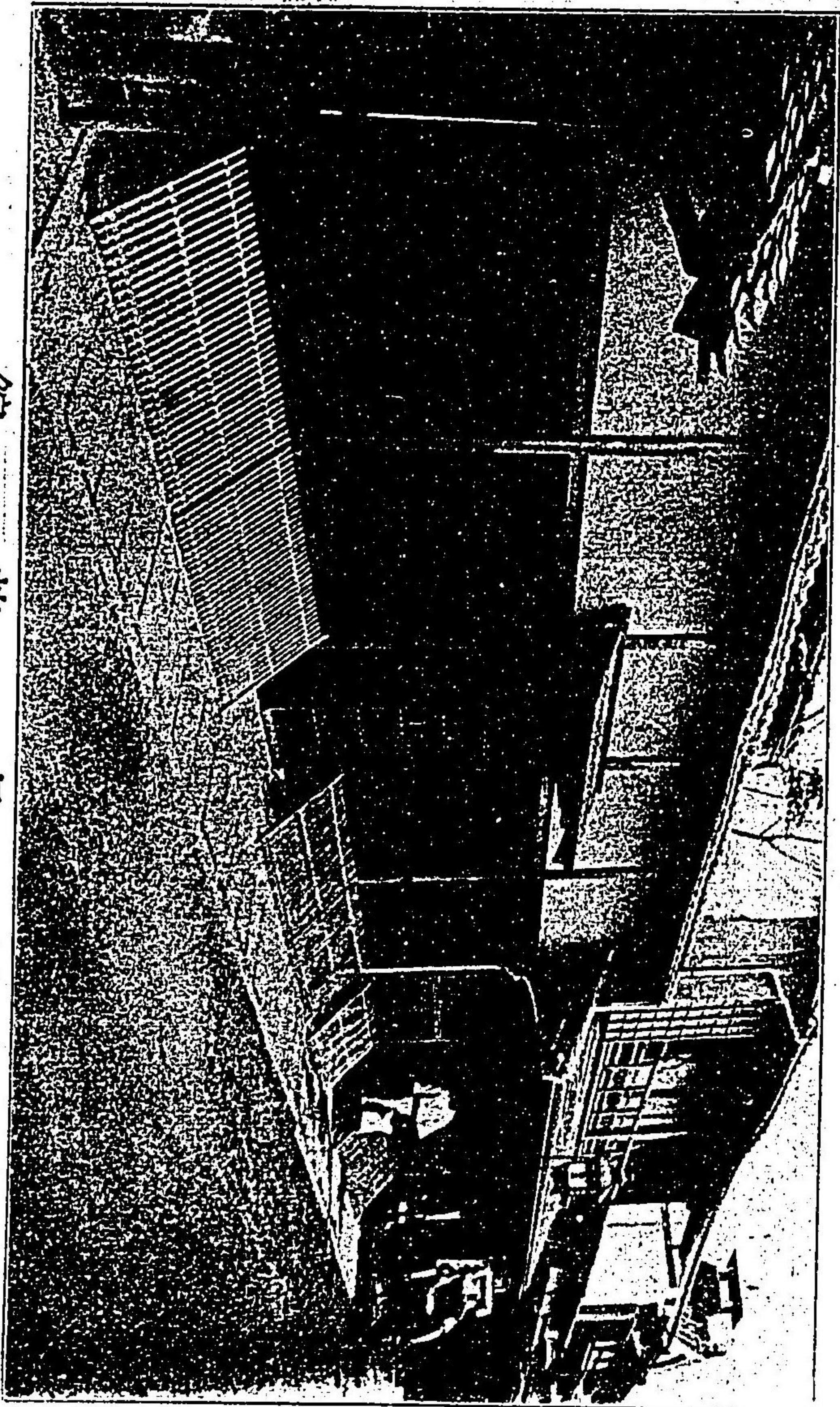
松山市魚町貳丁目

## 谷 佐々木

電話百七十番  
電信略ヤマ○



電話七拾五番

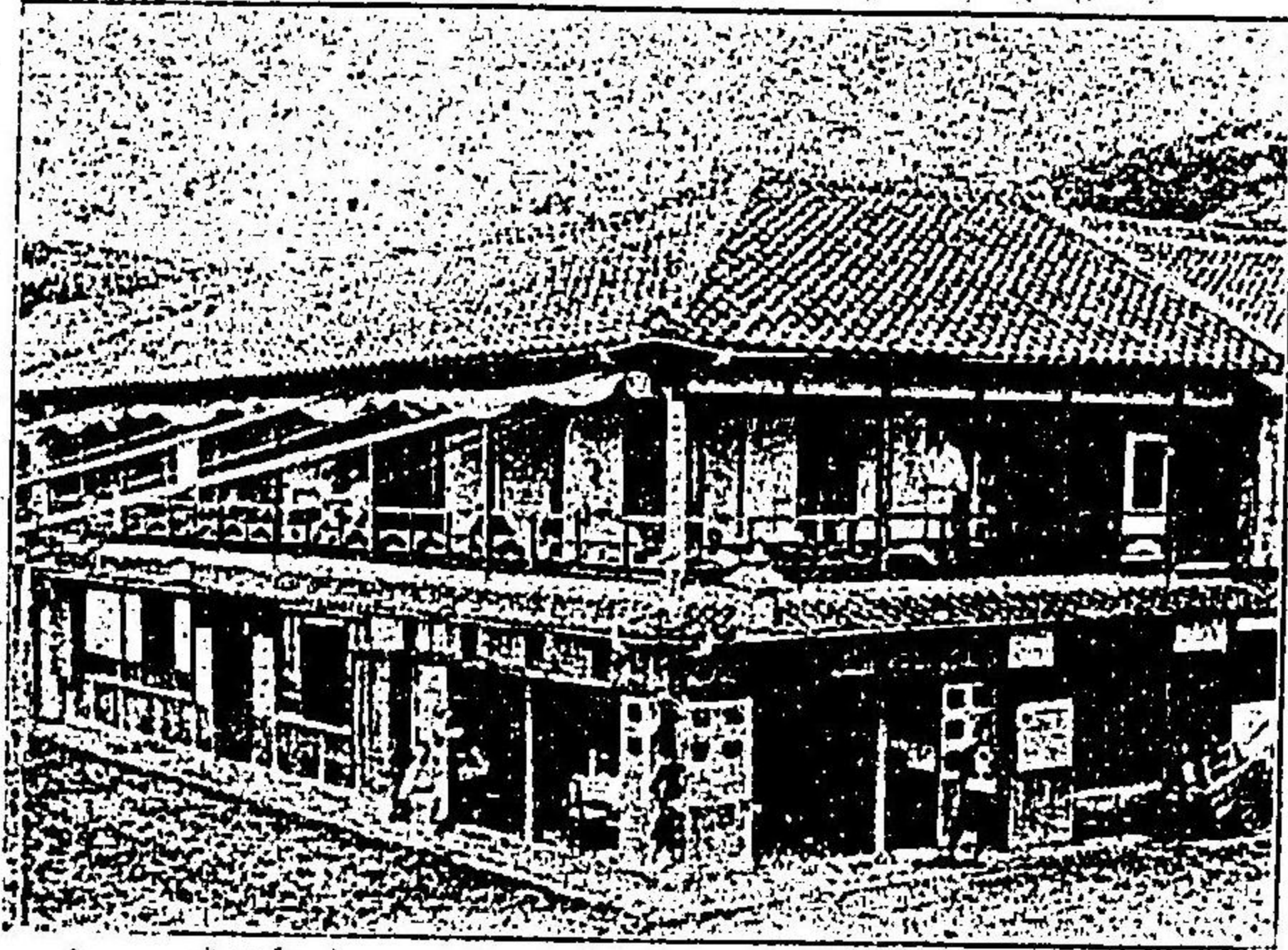


松三井三番号

伊 旅 館 紀

伊 豫 高 濱 港

高濱停車場前



高濱北棧橋前

誠 實 至 廉

旅館兼和洋御料理

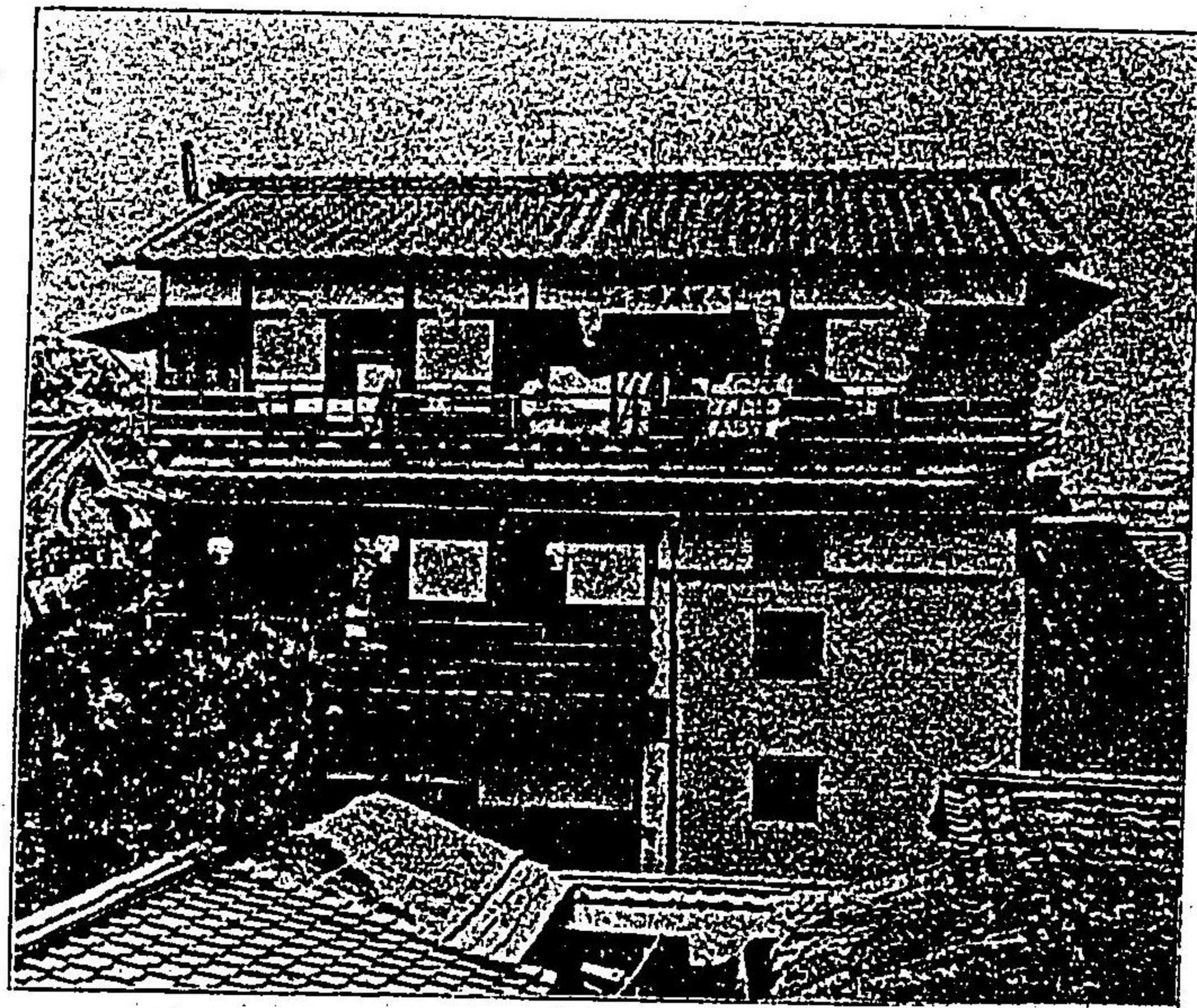
有 信 館

船車貨物運送業開運舎

特設電話第 番

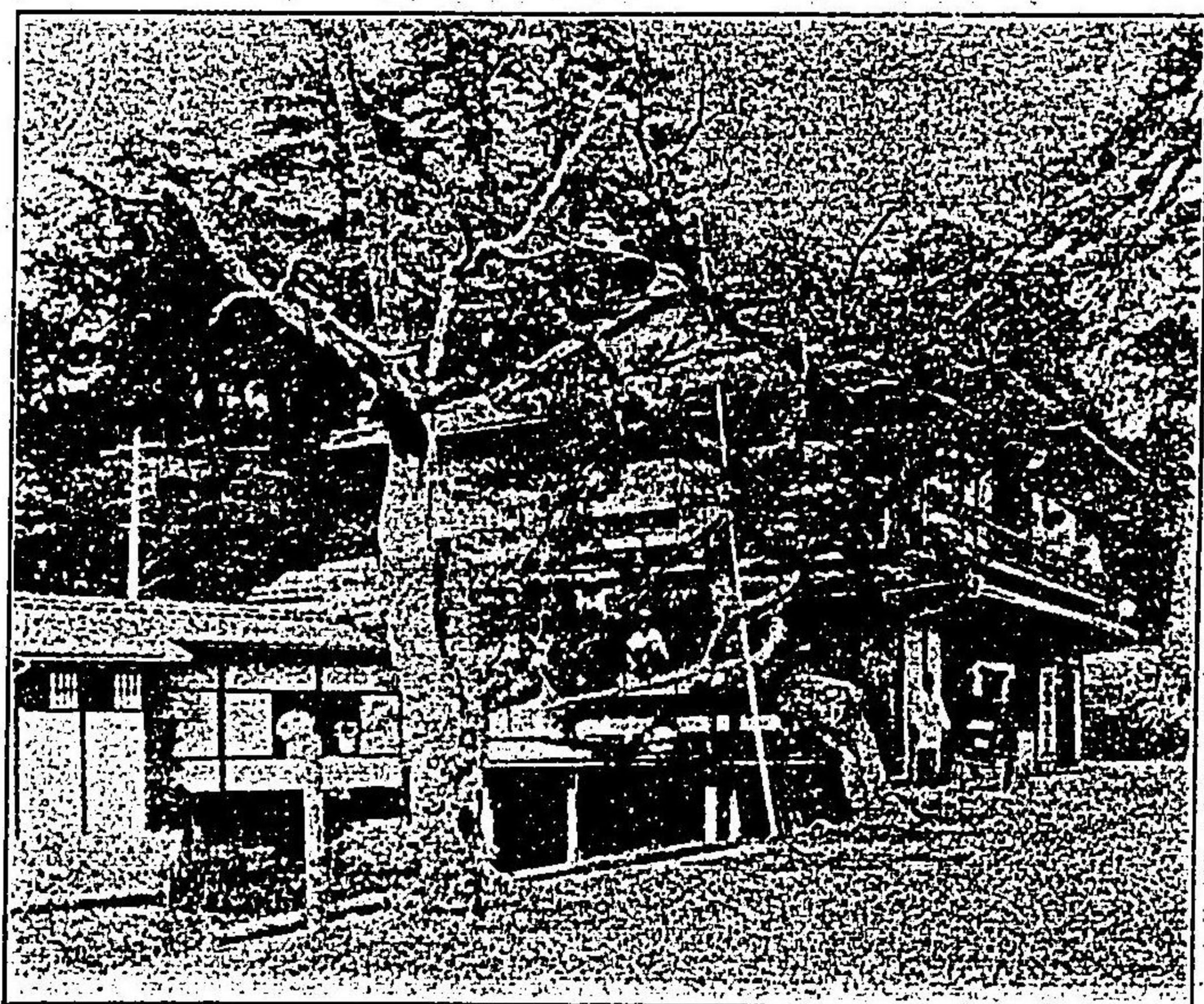
風 景 絕 佳

會席仕出し



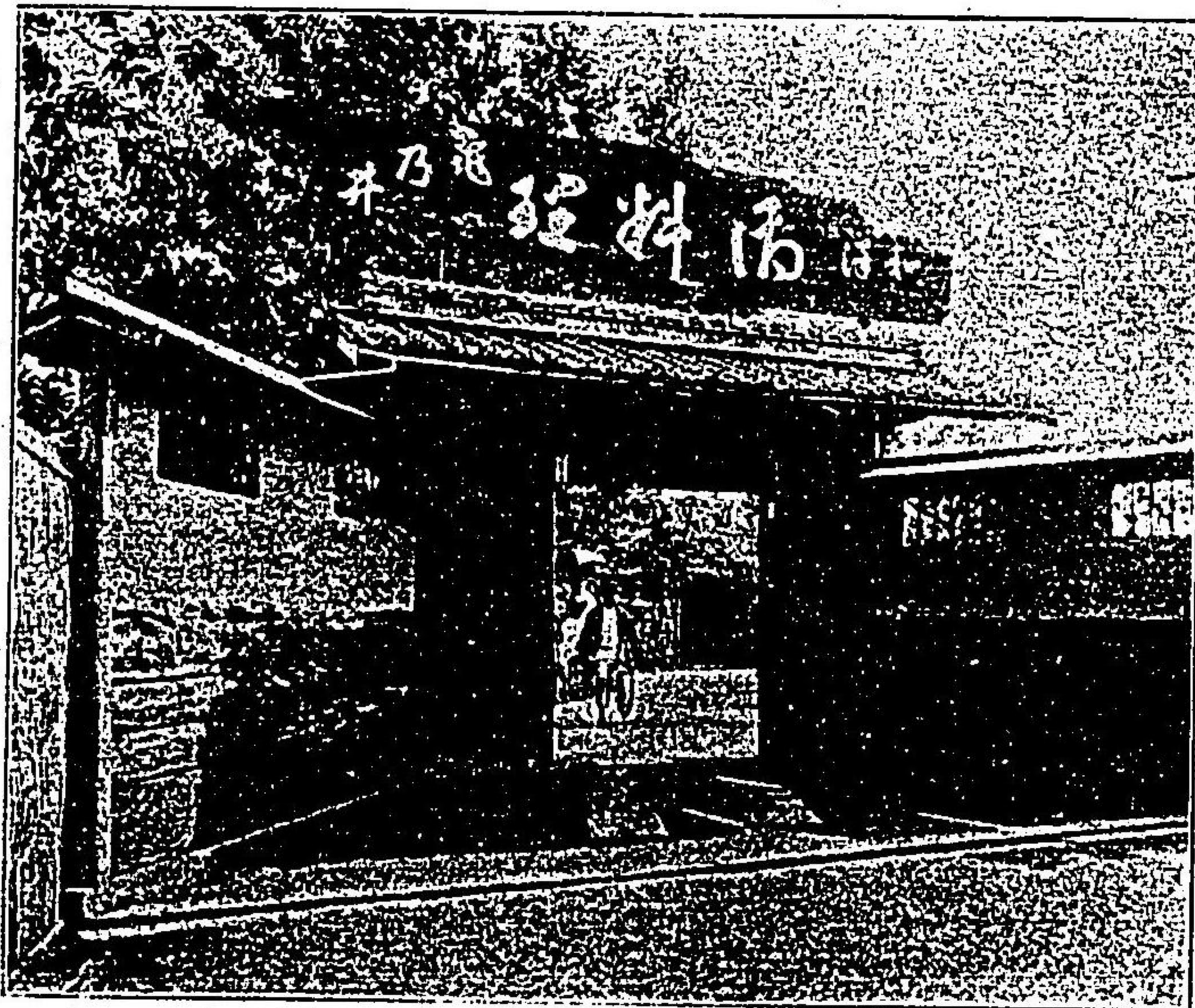
和洋御料理

番參壹貳 話電 樓春百八 町寺安正市山松



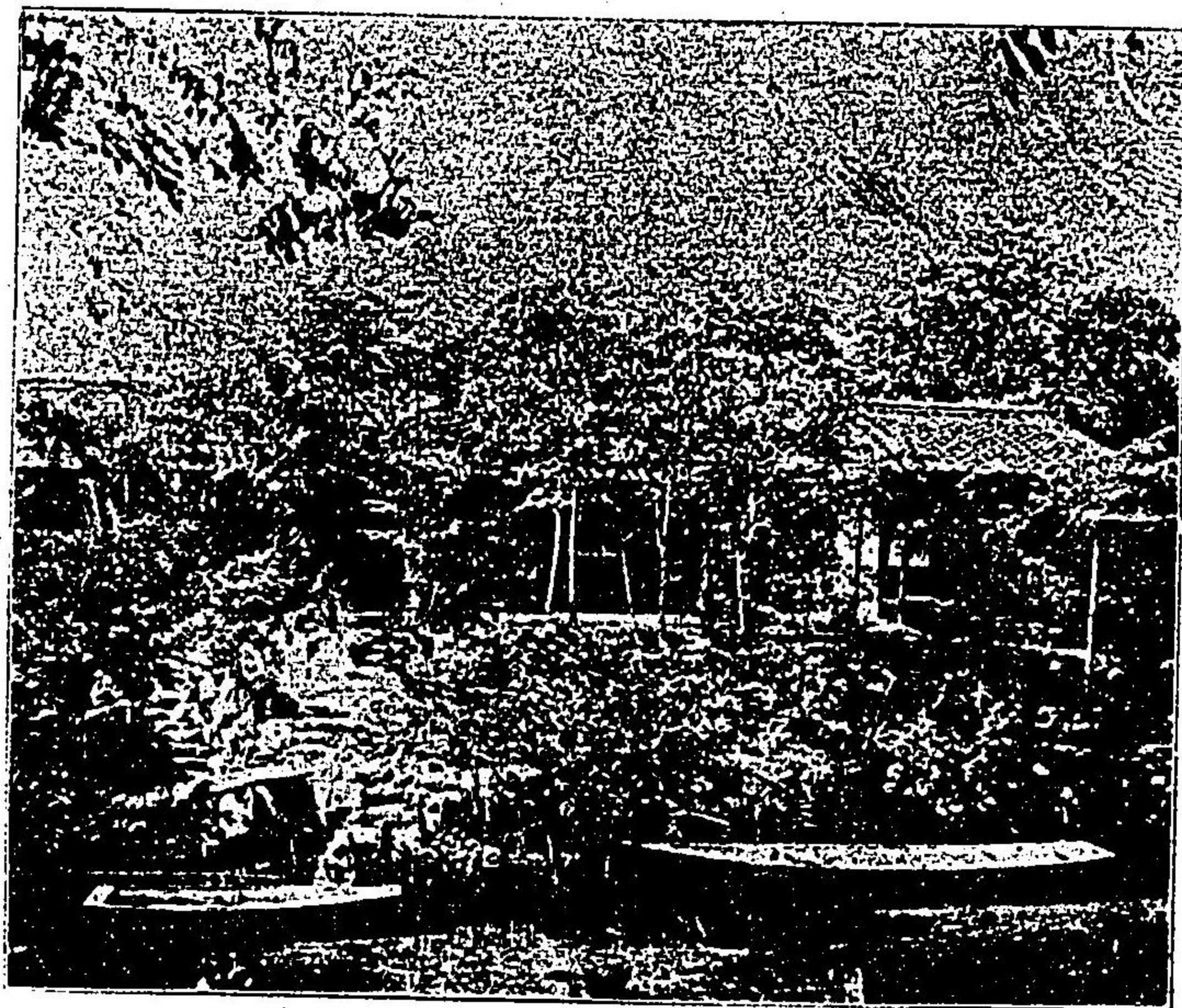
前場車店支樓春百八停後道

電話 貳壹五番



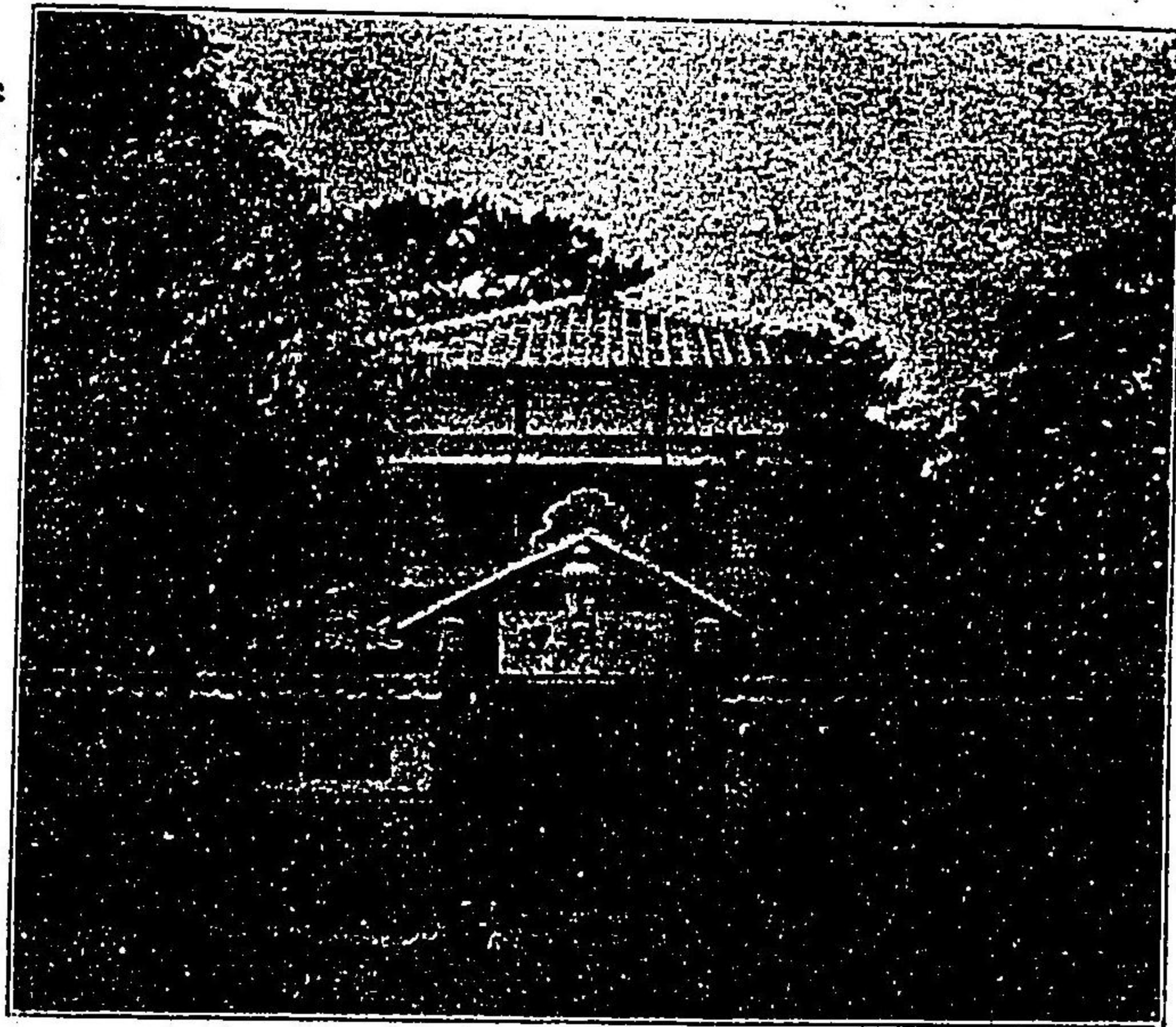
和洋御料理

町坂豐市山松



井乃龜

席貸仕出し



前場車停 菊し壽 町古市山松

和洋御料理

# 西 洋 御 料 理

町 番 二 市 山 松

## 松 山 俱 樂 部

武 政 卯 之 助

番 壹 參 壹 話 電

營 業 百 有 餘 年

松山名物かめやうどん

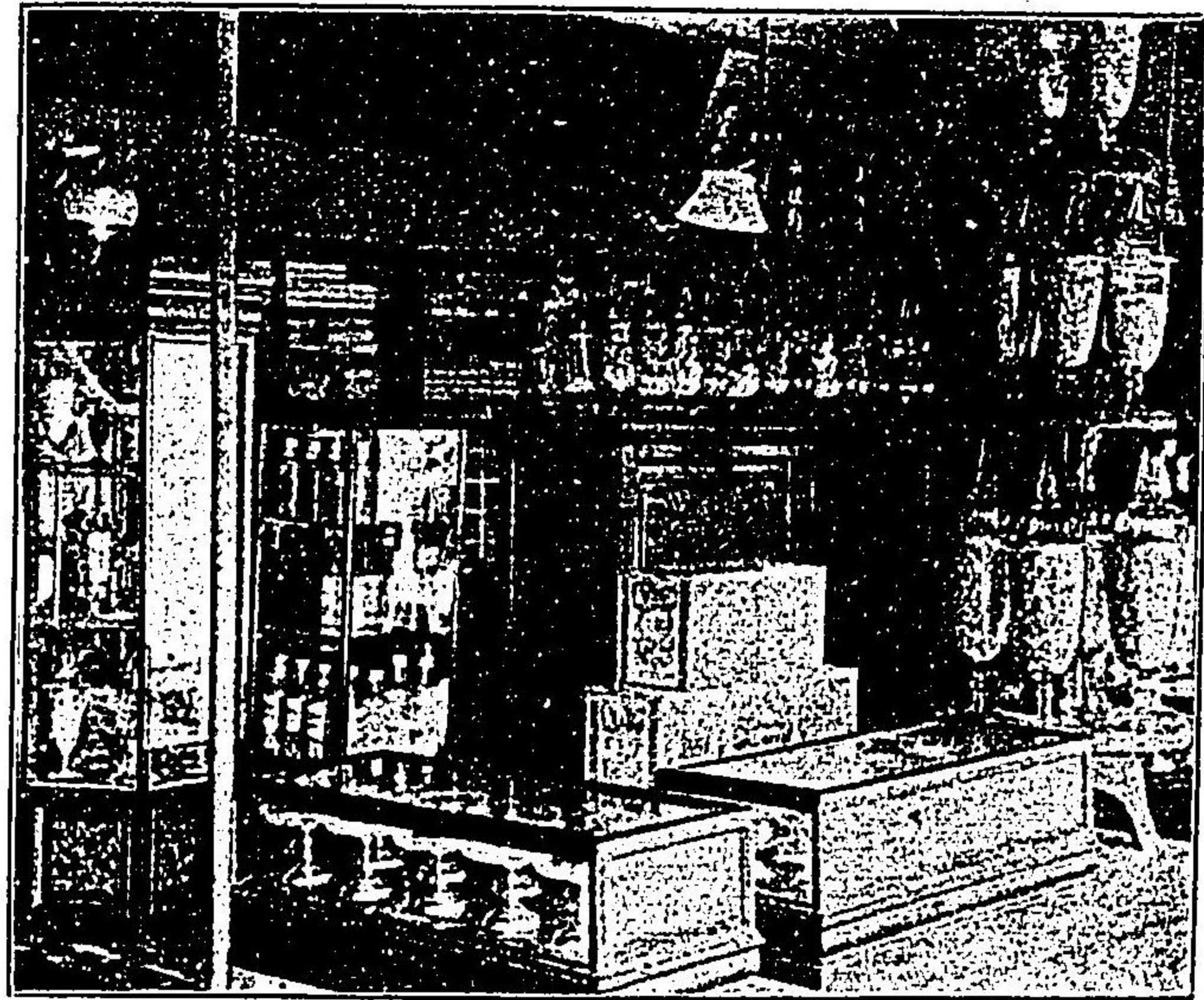


和洋會席御料理すき焼

松山市湊町二かめや電話一七四番



電話 百五拾壹番



豐國堂

和洋菓子製造販賣

松山市大街道新榮座南隣



黒田新榮堂

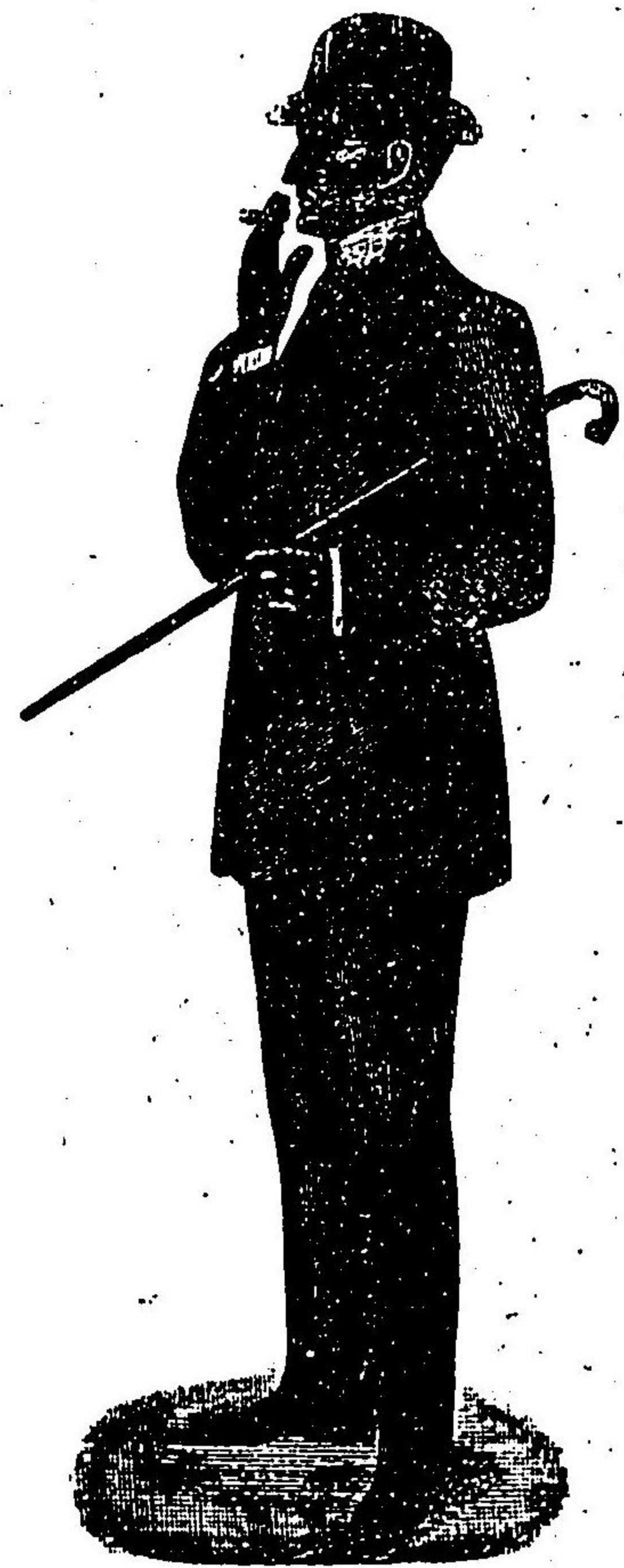
和洋菓子製造販賣

商號

玉良洋服店

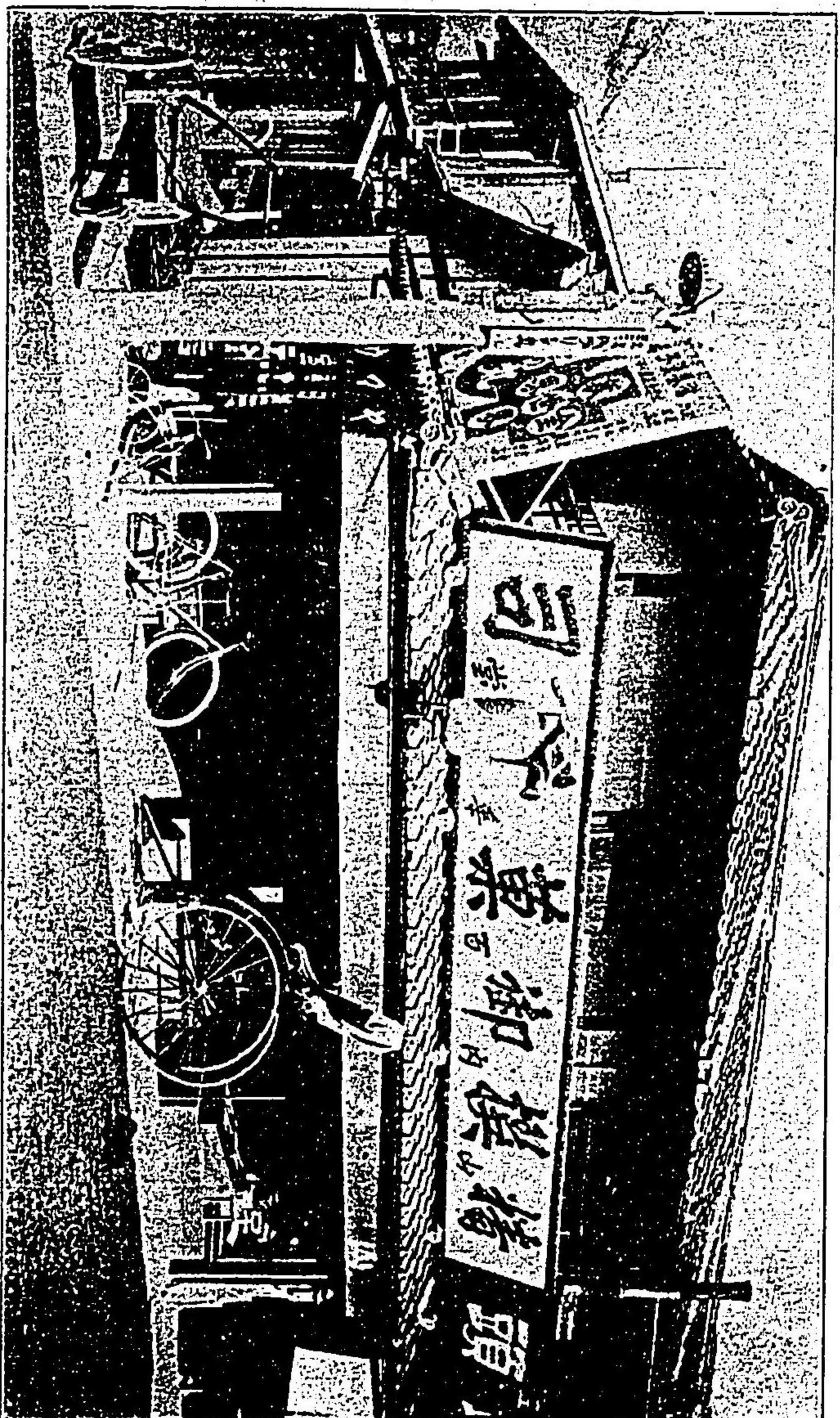
松山市湊町三丁目

電話貳四四番





角町番二道街大市山松



和洋菓子製造

山内百華堂

藥品賣藥製藥  
寫真機械材料一式

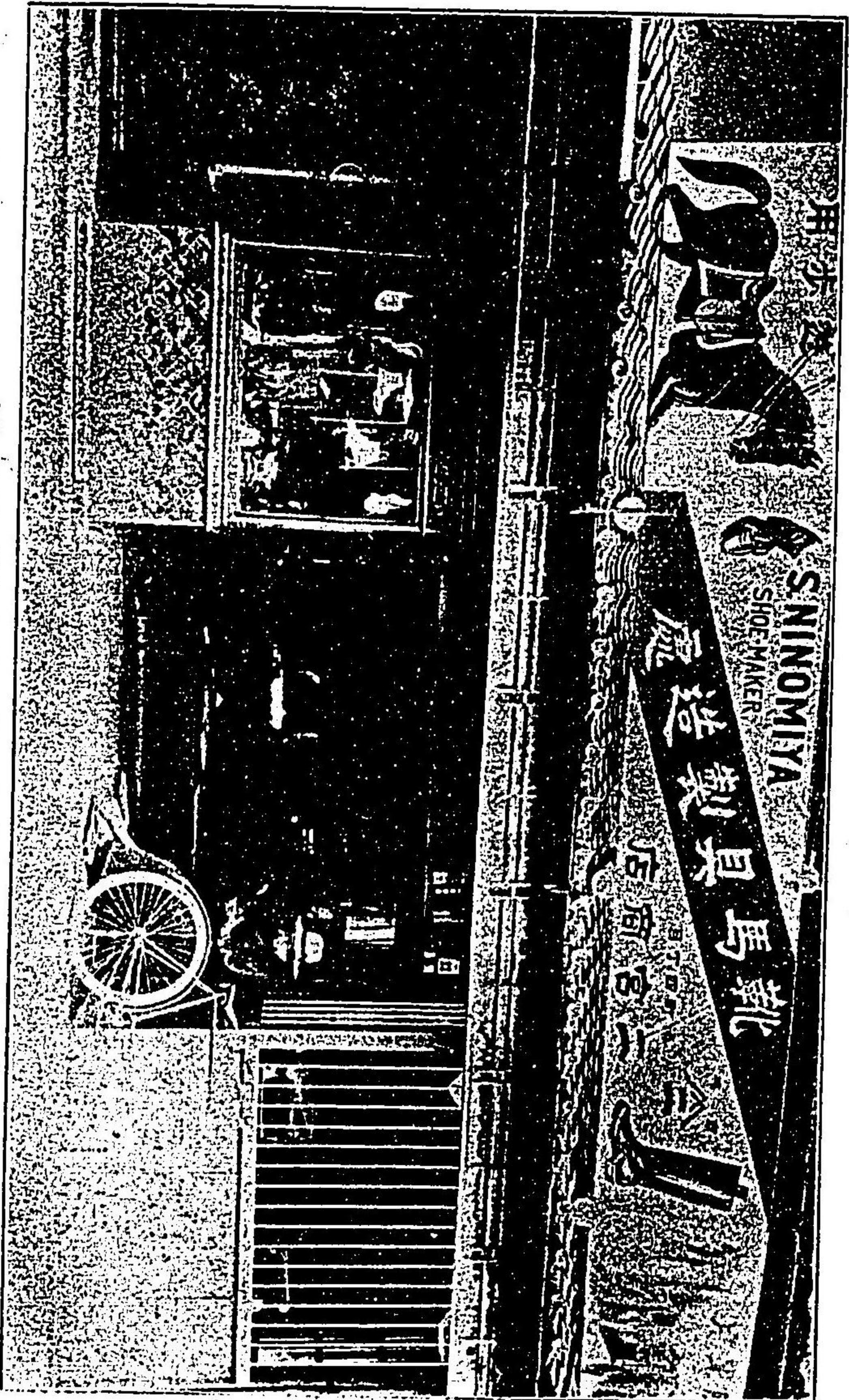
松山市湊町貳丁目

岡市郎

電話 六拾壹番  
振替口座參六八五番

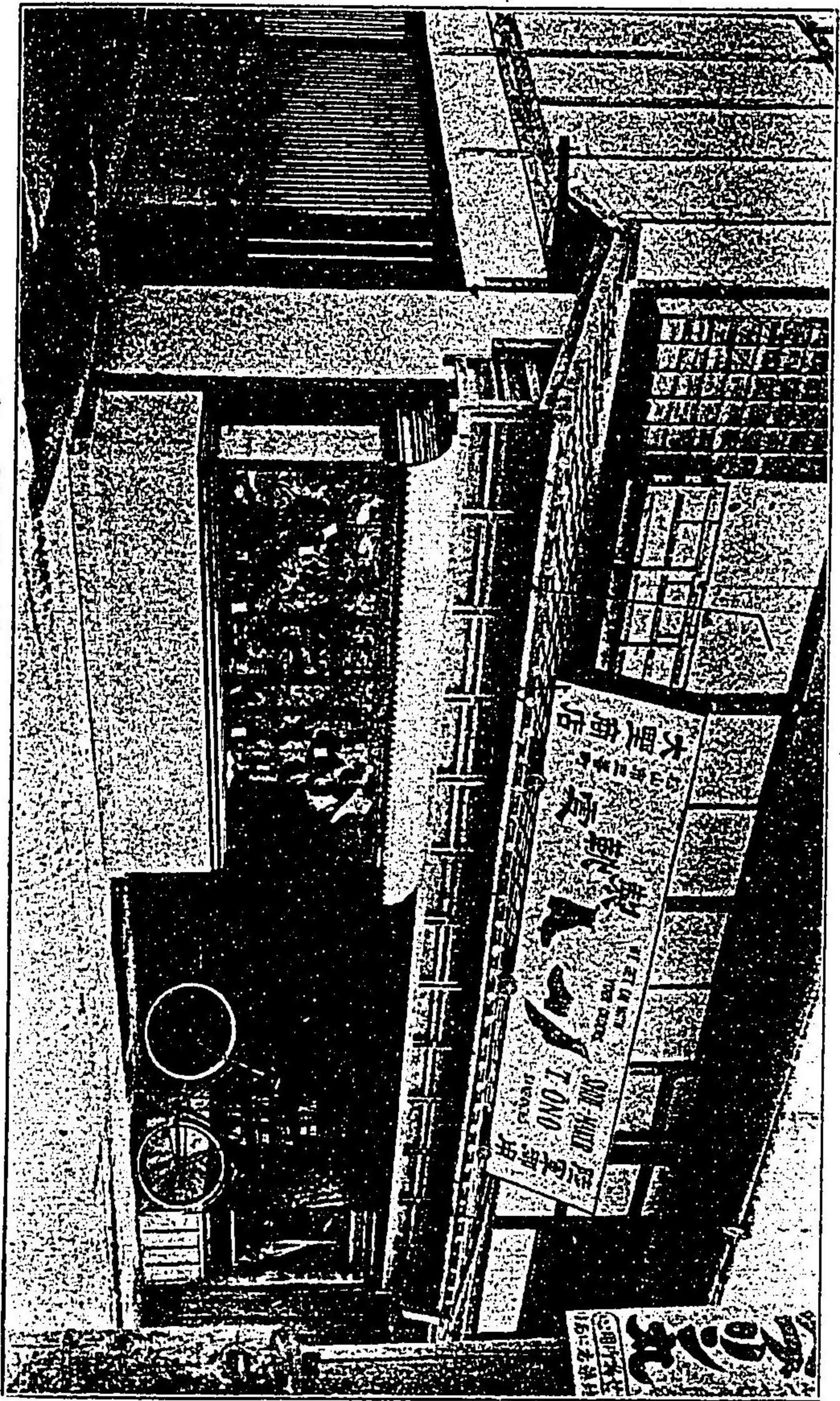


店靴製男常宮二



目丁四町湊市山松

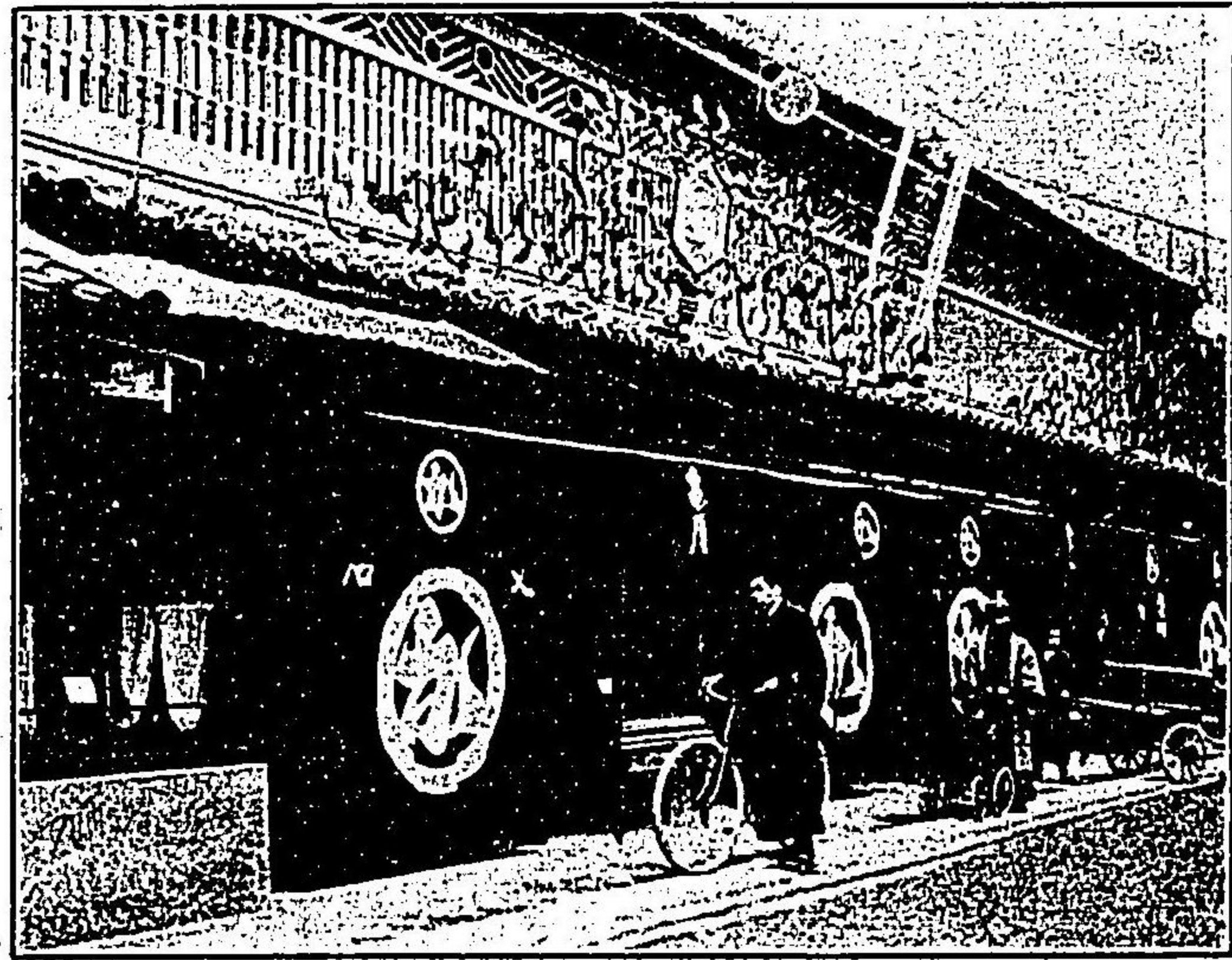
大野綱衛製靴店



松山市三番町郵便局西角

店賣販約特合組買購

吳服及反物商



松山市木屋町四丁目

龜井兼藏本店

電話拾四番

龜井支店

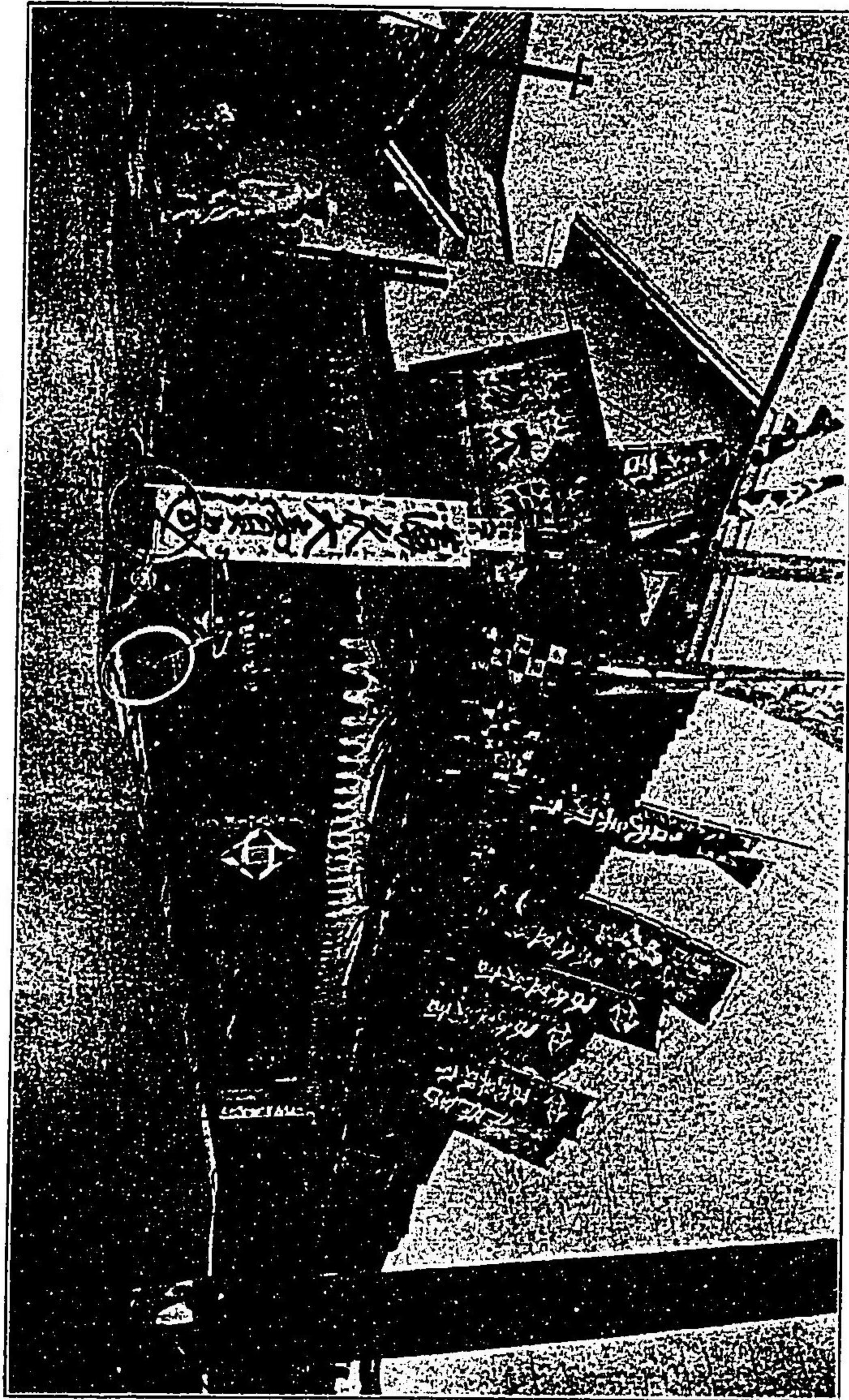
(松山市湊町三丁目)

(三津濱町藤井)

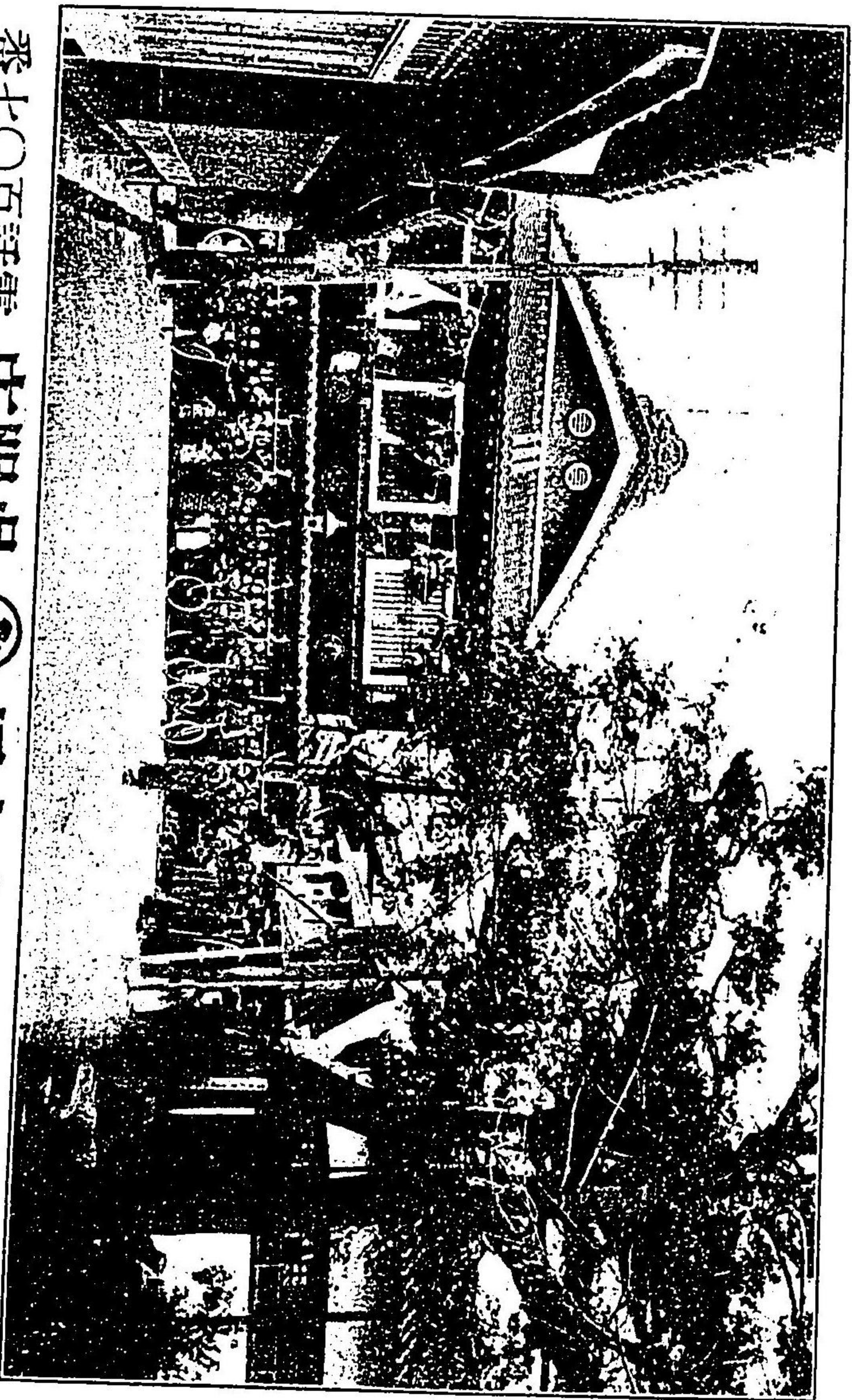
電話貳貳番

電話架設中

石丸吳服店



松山市大街道筋魚ノ棚(正安寺町角)



番七〇百話電 店服吳  屋丸大 目丁一町木市山松

△あ伊豫木丸特約大販賣

松山市湊町三丁目

魚之柳角

吳服 太物 卸賣 商標  神谷商店

發電略號(カミ)

獅印洋傘特約大販賣